紅葉野日記

田所稲造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅葉野日記

【Ｎコード】
Ｎ７２１４Ｘ

【作者名】
田所稲造

【あらすじ】
ブクログのパブー：　ｈｔｔｐ：／／ｐ．ｂｏｏｋｌｏｇ．ｊｐ／ｂｏｏｋ／１７５５３
あらすじ：室山県立敷島女子高校の生徒４人組を描く。
田所稲造：元小説大好き！！　総支配人。

第一話　美月のいちばん長い日

紅電榛名天神（はるなてんじん）駅前に停車中のバスに乗ったまま、アナウンスを聴いているのが、服部美月。彼女が、これから紹介する四人組の中では一番早起きなのだった。

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。料金は降車時にお支払い願います。発車までしばらくお待ち下さい。室山三四系統……』

（ん、んがっ。ふああああ……。何だ、まだこんな時間かぁ。あの子たち、まだ寝てんだろうなあ、きっと……）

背広組やスーツ組が、どんどん榛名天神駅に向かって先を急いでいる中、このバスは、まだガラガラだ。よほど春名坂の途中に用事がある人以外、始発から乗車するのは、彼女ぐらいなものだ。そもそも、各駅停車ひと駅で済むはずなのに、なぜわざわざバスに乗るのか。それには理由があった。同級生を拾って、急行停車駅の香枚井（かひらい）駅まで送迎するのが、彼女の役割。もっと言えば、美月はしっかり者で、みんなのタイムキーパー役でもあるのだ。みんなの保護者、とも言う。

（髪の毛、大丈夫かなあ。寝癖とかついたりしてないよねえ……）

後部扉を見渡す四角いバックミラーに向かって、必死に髪を直している美月。それを見た運転手さんが乗ってきて……。「スタイル決まってるよ、お嬢さん」と、苦笑いしながら言いつつ、バスの運転席に陣取るのだった。ちょっと赤面する美月。濃紺のセーラー服は、スカートも長め。赤いラインと緑色のスカーフ。白いハイソッ

クスと革靴とカバン。これが正統派の、県立敷島女子高校生のあるべきスタイルなのだ。

『発車します』

ブザーが鳴ると同時に扉が閉まる。バスの停留所を一八〇度、南に向かって転回したバスは、一路、何キロにもわたる、なだらかな坂、春名坂を香枚井方面に向かって下って行く。乗客は、まだ彼女ひとりだった。新緑の季節、並木の緑、木漏れ日が瞳に優しい。

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。お降りの際はボタンでお知らせ下さい。料金は降車時にお支払い願います。次は、春名坂上、春名坂上です』

沈黙が流れる。少女は窓に頬杖をついて、緑と日差しのコントラストが織りなす陰と陽のなかを激しく駆け抜けている。崖下に流れる鍵堀川（かぎぼりがわ）の水面（みなも）に映る、きらきらとした太陽を眺めながら……。

『次は、春名台団地、春名台団地です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい』

(桃花のやつ、寝坊してないだろうなあ……。なんか昨日、徹夜で勉強するって言ってたけど、寝坊したら、置いてくぞっ)

「あ、美月ちゃん、おはよう」
「おはよう、桃花。今日は遅刻しなかったんだ」
「そう、七個目の目覚まし時計でやっと起きて……」
「七個かよ！　なんだよ、その数！　目覚まし時計七個って、あんたどんだけ！」
「そう、それで、お母さんに制服に着替えさせてもらって……」

「着せ替え人形かよ！　マネキンか、あんたは！」
「でも、勉強したよ……」
「ほら、スカーフ曲がってるぞ！　やり直し！」

『次は、春名坂小学校、春名坂小学校です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい。電器のことなら、たちばなデンキ。たちばなデンキへは、春名坂小学校でお降りが便利です』

（このアナウンス……。本当に商売っ気のカタマリなんだから、あの親子と来たら……）

「よー、諸君、おはよう！」
「梨音ちゃん、おはよう！」
「美月も、おはようー」
「あー、はいはい」
「なに、美月。その冷たい態度」
「いや、毎日毎日、たちばなデンキの宣伝聴いてると、飽き飽きして来てさー」
「商売上手って言ってよねー、これでもお金かかってるんだからさー」
「そうね、確かに商売……って、あんた、そのスカート丈！」
「いやー、ちょっと夏用ということで、ちょっとだけミニにしました。自分でミシン使って」
「でも、それ、校則違反だから」
「いいじゃんかー、固てえこと言うなよ、ふたりともー」
「学校指定のスカート買うか、ジャージのままで帰りなさいよ、帰りは。まったくもう」
「風紀委員じゃあるまいし、ここは大目に見てよ」
「だーめ、わたしが許しても、学校じゃダメよ」
「けーち。校則反対！」

『次は、香枚井三丁目、香枚井三丁目です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい』

「おはよう、みんな！」
「おはよう、沙織！」
「おっす、さおりん！」
「梨音……なに、そのスカート！」
「いやあ、夏用にちょっとだけ改造しただけなんだけどねえー」
「ちょっとどころじゃないでしょー」
「校則違反だよねー」
「というわけで、全員揃ったようだね。ほっとしたよ、わたしは」
「わたしは、沙織が常識人であることにほっとしたよ……おい、そこのアホ二名」
「えー、まとめてバッサリだー」
「あんまりだー」
「桃花ったら、目覚まし時計七個目でようやく起きて、お母さんに着替えさせてもらって、スカーフが曲がってたから、わたしが直して……ふう」
「美月も大変だよねえ……」
「ただ、坂のいちばん上に住んでるだけで、子守りさ、へっ。いっそ、バスやめて、電車にしようかな。アホ二名ほっといて」
「いやだ！　置いて行かないで！」
「ともだちでしょ、わたしたち！」

『次は、終点、紅電香枚井駅前、紅電香枚井駅前です。どなた様も、お忘れ物無きよう、お支度下さい』

「さあ、行くよ、みんな！」
「おー！」

「うー……ね、ねむい」
「さすがは沙織といったとこか……」
ところで最近、梨音が小耳に挟んだ噂がある。そんな、ある噂の真相を、直接、沙織にぶつけることに決めた。
「ねえ沙織、あのー、紅電の駅員さんと、最近いい感じ？」
「べっ！　別に、何にもないわよ」
「おお、何だそのリアクション！　ね、ね、本当は何があったの？」
「か、関係ないでしょ！」
「ほらー、顔、どんどん赤くなって来てるよー、熱いねー」
「ただ……」
「ただ？」
「わたしんちのお店のケーキを渡すだけなんだからっ！　じゃあね！　お先ッ！」
そう言い放つと、ずかずかと駅に向かって、ひとりで歩き始めた。
「おおー」
「美月さん、これはつまり、アレですかね」
「アレだよ」
「ここで観察しましょう」
「今度の急行を逃しても、次の通勤急行でも充分間に合う……一本遅らせるか」
「放置プレイだね」
「そ、放置プレイ……って、どこで覚えたのその言葉！」
「しーっ！」
「悪い、わたしとしたことが……つい興奮が抑えられず……」
降車用バス停の影に隠れる女子三名は、明らかに周囲の耳目を集

めていた。隠れながらも、彼女たちは、高槻沙織の一挙手一投足を観察していた。バス停からは、東口改札が丸見えだった。何か、駅員と話をしているようだったが、しばらくすると、「バカっ」という声が聞こえたかと思うと、沙織は涙をぬぐいながら、鍵堀川の橋を渡って、葱北本線の香枚井駅に向かって駆けて行った。

「うん。誰だ、泣かせたの！」
「それじゃあ、乙女の敵だよー」
「あ、携帯にメールが……」

『美月へ　いまから葱北本線に乗ります　気にせず先に行っててね
沙織』

「おのれ、また、あの改札の駅員かー！」
「何があったんだろう……」
「乙女の敵はわたしの敵！とにかく、ものども、行くぞっ！」
「おーっ！」

◇　◇　◇

紅葉野電鉄、香枚井駅、東口改札を目指して駆け込む、美月、梨音、桃花。

「済みません、霜田拓也さんはいますかー」
「駅長の河上です。おはようございます。霜田なら、券売機の裏で落ち込んでるよ」
「なに？　落ち込んでる！」
「本当だわ」
「なんか、がっくりと来てるね、こっちも」
「ええ、プレゼントを持って来られたお嬢さんがいたんですけど、

会社の社内規定で、プレゼントを受け取ってはいけない決まりになっているることをお話しし、『気持ちだけは受け取っておくよ』と言ったら、どうやらお嬢さんを傷つけたらしくって……」
「ええ、傷つきますとも！」
「それは余りにも可愛そう過ぎませんか」
「キテイもテイキもへったくれもないわー」
「うーん、午後から霜田は休みだから、その時に、彼の自宅に行くといいよ。霜田タクシーって建物だから、すぐに分かると思うよ」
「しょうがないわね……じゃあ、沙織を説得します」
「ええ、勤務時間中は、建前としてプレゼントは受け取れないんだけども、ここが済んだら、別に構わないから……何だか、泣かせてしまったようで、上司としても、誠に申し訳ない」
「今度泣かせたら、学校じゅうに広めますからね！」
「学校じゅうで、紅電に乗らない運動を起こしてみせます！」
「女の子を泣かせないように、霜田さんによく言っておいてください」
「わかった。わかりました。霜田も確かに杓子定規なところがあったから、よく言っておきますよ」
「頼みますよ！」

一通り、気が済んだ模様の敷女三名。沙織にメールを打つ美月。

『沙織へ　駅長直々に謝罪があったので　勤務を終える午後に　春名坂下　霜田タクシー本社に　みんなで一緒に行こう　そこで、ケーキを改めて渡そう　彼は充分反省しているじゃない？　だから元気出して　美月』

「券売機の裏で落ち込んでいる写メも添付して、これでよし、送信っと」ピッ……
「沙織、元気出るといいねえ」

「機嫌、直ればいいと思うんだけどね」

『間もなく、二番線、通勤急行、海浜神崎行きが、八両で参ります。停車駅は刈羽台、咲花台、紅電室山、塩瀬、紅電岩崎、岩崎台、紅電敷島、牡鹿沢、紅電神崎、終点、海浜神崎の順に停車します』

「これ、混むんだよねー」
「皆の衆、痴漢がいたら声を出そう、声を」
「つーか、あんたが一番スカートの丈が短いんだけど」
「じゃ、じゃあ、行きますか」
「話をそらすなー」

『香枚井、香枚井です　二番線、通勤急行、海浜神崎行きです。終点までこの電車が先に到着します。次は、刈羽台、刈羽台です。間もなく発車します、お急ぎ下さい』

……電車が塩瀬駅を出て、鍵堀台駅を通過したあたりで、梨音は太腿に奇妙な感触を覚えた。もぞもぞと、何かをまさぐっているような、そんな感じだった。

「やっ……」
「どうした？　梨音……」
「きゃあああ痴漢ー！」
「どうしたどうした」
「何だ何だ」
「痴漢だって？」
「取り押さえろ！」
「車内電話使え、誰か！」
「美月ちゃん、こいつのアゴをアッパーカットだ！」
「了解！」

「ぶほわあああー」

既に、その場に居合わせた背広組が、痴漢の犯人を羽交い締めにしていた。服部美月の、強烈なアッパーカットを食らった男は、その場でただちに悶絶した。

『間もなく、紅電岩崎です、お出口左側です』

「あのー、先生？　服部美月です。おはようございます。いま、立花さんが岩崎駅に向かう通勤急行の車内で痴漢に遭いまして……み、みんなで取り押さえました。通勤客の方にも手伝ってもらって……はい、遅刻ということで……今から警察に向かうかも知れませんので……はい、わたしと、柏原さんも一緒で、三人で……はい、以後気をつけます、では」美月は、電話を切った。

悪い予感は的中した。早速、メールを打つ美月。

『沙織へ　案の定、梨音が痴漢に遭った　もうすぐ紅電岩崎駅　先生には遅刻の電話入れた　心配しないで　犯人はノックアウトしたから』メールは送信された。

美月は、助けてくれた会社員の面々に頭を下げた。

「皆さん、どうもありがとうございました」
「いやいや、当然のことをしたまでだよ」
「そうそう、俺らのことは気にしないで」
「さ、警察に連れて行くぞ！　しゃきっと歩けコラ！」
「わたしたちも行くよ」
「み、美月……うえええええええ」
「どうした、梨音らしくないぞ！　しっかりしろ！」

『紅電岩崎、岩崎です。一番線の電車は、通勤急行、海浜神崎行きです。停車駅は、岩崎台、紅電敷島、牡鹿沢、紅電神崎、終点、海浜神崎の順に停車します』

　そこに、ホームに駅員と警察官が現れた。

「痴漢はこのドアで間違いないですか」
「ああ、こいつだ」
「被害に遭った子は……」
「この子です」
「ちょっと署まで来てもらおうか。あ、君たちはこの子の友達かい？　君たちも一緒に来てもらおうかな」
「わたしたちもですか？」
「こりゃ長引きそうだね、美月ちゃん」
「そうだな、桃花……」

◇　◇　◇

　室山県警、岩崎署。犯人とは別室で、婦人警官の前で、梨音たちはお説教を食らっていた。お説教と言っても、半ば呆れられたような感じだった。主に、梨音のスカートの丈について……。

「敷女って、わたしも憧れたお嬢様学校よ。それなのに、なに、その丈の短いスカート。なあに、改造したの？　自分で？」
「はい、しゅみません……その通りです……」
「泣くな、梨音」
「ここでジャージに着替えればいいじゃない」
「そうね。女子更衣室があるから、後でそこ使いなさい。あと、お父さんももうじきクルマで来るから」

「お、親父が来るんですか！」
「当たり前じゃない」
「怒られても、仕方がないよね」
「自業自得だよー」

やがて、ダダダダダダと、階段を上がってくる音が聞こえたかと思うと、扉が開いた。

「こちらです」
「り、梨音は無事かぁあ！」
「お、親父……」
「このバカ、心配させやがって！　どうもすみません。梨音の父です」
「いいえ、私どもは別に……可愛そうなのはこの子です」
「だから、スカートの丈は詰めるなとあれほど！」
「ご、ごめんなさあああー」
「美月ちゃんと、桃花ちゃん。巻き添えにしてごめん。授業、遅れるだろ。ここは僕にまかせて、先に学校に行きなさい。単位落とすとまずいからな。梨音！　これ終わったらスカート買いに行くぞ！丈詰め禁止だ！　いいなっ！　今日は欠席だ」
「い、いいんですか、おじさん」
「話なら、僕が聞いてもいいそうだから、ふたりとも、学校に急ぎなさい」
「はーい」

室山県警岩崎署を出るふたり。服部美月と、柏原桃花。

「こ、ここからどうやって駅に戻るんだっけ」
「パトカーで来たから、よくわかんない。あ、バス停があるよ、こっちこっち」

「岩崎一六系統、岩崎東中学校経由、紅電岩崎駅行きだって」
「じゃあ、学校の三時限目に間に合うかも！」
「なら、わたし、ちょっと学校に電話する」

おそるおそる、携帯電話をかける美月……。

「もしもし、相川先生はおられますか……はい。あ、先生ですか？　二年三組の服部美月です。おはようございます。岩崎警察署は、梨音……じゃなかった、立花さんとお父さんが何とかするそうです。え、原因？　そ、そうですねえ……立花さんがスカートの丈を自分で詰めすぎたとか、いろいろです」
『★§@＊＃％◎◆△▽※～～～！』
「ええ、はい、わたしも止めとけ、校則違反だから、って言ったんですけど、ついに詰めちゃって……。で、案の定痴漢に遭ったと、そういう理由です」
『～～～～！』
「と、とにかく、大至急学校に戻ります。どうもお騒がせしました。ではっ」

美月は電話を切った。そして、桃花に向かって振り向いた。

「美月ちゃん、相川先生、怒ってた～？」
「それはもう、梨音に対してはね」
「停学かなあ」
「それは大丈夫。スカートが元通りに出来上がるまで自宅謹慎の予定」
「なるほど」

『岩崎一九系統　木庭団地　県立岩崎高校　岩崎東中学校経由　紅電岩崎駅行きです　整理券をお取り下さい　発車します』

「あ、このバスじゃなかった。これじゃあ遠回りになる」
「先に言えよ、桃花～！」

◇◇◇

服部美月、柏原桃花の遅刻組二名が、おずおずと教室に入る……。抜き足、差し足、忍び足……。まだ授業の間の、休み時間のようだった。

「よっ、はっとり！」

ポンと肩を叩かれる美月。

「う、うわあああ！お、脅かすなよ、何だ沙織かぁ！」
「ごめんごめん……で、なあに？　立花梨音が逮捕されたって？」
「違う違う。彼女は痴漢の被害者です……って、沙織、もう立ち直ったの？」
「うん、そうねえ。落ち込んでる拓也さんの写真見てたら、何だか可笑しくて」
「あのフォトが効きましたね、隊長」
「だから、ワタシは隊長じゃなーい！」
「ぶっ、くっ、あっはっはっはっは～」
「もうっ、さっきからこの調子で、隊長、隊長って、いい加減に……」
「じゃあ、いい加減にします、隊長！」
「も、もうダメ、可笑しすぎる～」

あー、やれやれ、泣いたカラスがもう笑った、と言わんばかりの表情。なんでえ、心配して損した、と言わんばかりの表情。

「あ、やばい、遅刻届出さなきゃ」
「いいところに気づきましたね、隊長」
「その隊長ネタ、いつまで引っ張る気だ、さ、行った行った」
「いざ、職員室へ！」

職員室は階下の一階にある。そこに、ＨＲ担任の相川杏子先生を訪ねることにした。

「失礼しまーす」
「相川先生、いらっしゃいますかー」
「あたしはここ！　んもう、探したわよ！」
「うわぁ！　後ろに！」
「脅かさないで下さい！」
「もう四時限目が始まるけど、事情を聞かせて。一体、何がどうなって……ああ……」
「先生！」
「先生が倒れちゃう……」
「……もう倒れる寸前よ……心労で、朝から気が気じゃなくって……がくっ」
「杏子先生！」
「椅子……に戻られた方が……いいと……」
「はいはい、そうさせてもらうわ。あたし、マジで倒れそうで……」
「わたし、お水汲んで来ます！」
「あ……アタマも痛いわ……」
「保健室から、頭痛薬をもらってきます！」
「いいの、あたしのおくすりがあるから……」

ごきゅごきゅと頭痛薬を飲み干す先生を見て、二人がつぶやいた。

「何だか、心配かけちゃったねー」
「先生に心配をかけたことが、何だか心配で……」
「ぷっはー！　これ、医療用の頭痛薬よ。気付け薬みたいなものかしら」
「そ、そういうものなのですか？」
「そう、大人になると、いろいろとね。人間関係、上下関係エトセトラ……」
「で、ですね、これ、遅刻届なんですが、あのー、理由は何て書きましょう」
「え？　理由は……『私事につき、遅刻致しました』で、今回は勘弁してあげるわよ」
「す、済みません……」
「そのへんの、空いている椅子に座りなさい、立っていられると、何だか落ち着かないから」
「はあい」

相川杏子先生は、失いかけた理性をようやく取り戻した様子で、服部美月、柏原桃花の方へ向き直った。

「それで、立花さんと一緒に通学してるんでしょ、いつも」
「はい、私が先導して、香枚井までバスで通学しています」
「だったら、何で友達だったら、スカートの丈を詰めるの、止めさせないの？」
「は、はい、も、申し訳ありません」
「警察沙汰よー。なんだ、敷女ってそんな程度か、ってみんなに思われちゃうの！」
「は、はあ……」
「まあ、あなたたちに怒ってもしょうがない事で、むしろ、あなたたちは、被害者ですものね」
「今も、立花さんのお父さんが、代わりに婦警さんの話を聞いてい

るみたいです」
「それで、君たちは学校へ急げ、話は僕が代わりに聞くから、って……」
「優しいお父様ね。感謝なさい」
「立花さんは、明日登校する予定だと、彼女のお父様が……」
「なんでも、今日にでもスカートを作り直して、出直せ！っておっしゃってました」
「正論ね。これ以上迷惑かけられちゃ、あたしも立つ瀬がなくて……」
「は、はあ……」
「これでもねえ、かなり、みんなをかばって来てるのよ。あなたたち、知らないでしょ」
「はい……」
「でも、どうしようかなー。これ以上、敷島女子に泥塗られちゃ、かばおうにも、かばいきれなくて」
「先生！　梨音の退学だけはご勘弁を～！」
「先生！　そこを何とか！」
「じょ、冗談よ。本気にしないでー。まったく、冗談も言えやしないわー」
「ふー」
「はー」
「さて、と。立花さんの反省文、何枚にしようかなー。原稿用紙で五〇〇枚ぐらいかな」
「に……ご……じゅ、じゅうまん文字い～！」
「そんな殺生な～！」
「いいえ、例え、五〇〇万枚書かせても、まだ足りないぐらいよ！」
「まあ、五〇〇枚で、退学が許せちゃうなら、これぐらいで、いいかも知れませんね」
「そうそう、物は考えようです」

ダァン！……と、机を叩いて、先生はこう続けるのでした。
「ふー。なになに、あたしのクラスの生徒が、勝手にスカート丈を詰めて、超ミニにした上で、電車で痴漢に遭いました……って、どのツラ下げて、上司に報告すんのよー！」
「先生、落ち着いて！」
「お水、お代わり持って来ました！さあ、どうぞ！」
「ふぃー、あんがと。また理性のたがが外れるところで、危ない危ない……」
するど、また杏子先生は、ハンドバッグから頭痛薬を取り出すのでした。
「先生、そんなに呑んじゃ身体に毒です」
「無理、しないでくださいね……」
「そうねー。本人いないんじゃ、これ以上怒る気にもなれないし……前向きに考えることにするわね。あなたたち、本当におつかれさま……暴漢に、アッパーカット食らわせた、服部美月さん？」
「は、はいー！」
「女子高生が、公衆の面前で、制服姿で、野郎を殴るなんざ、大きな間違いです！」
「ご、ごめんなさい……」
「……ふっ、いいのよ、もう。済んだことだし。うっかり忘れたことにしておくわ。じゃあ、大至急クラスに戻って頂戴、いいこと？」
「わ、わかりましたー！」
「で、では、失礼しましたー！」
……二人とも、脈拍ドキドキ、心臓バクバクだった。決して、ときめいたとか、そんなレベルの話ではなく、大人の恫喝ってーのは、とても怖いなあ、といった心境だった。

「女子高って、ある意味怖いねー」

「特に、あの柔和な先生がキレた時は、もう胃がおかしくなっちゃいそうで……」

「言えてるー」

「さあ、静かに戻りましょう、美月ちゃん……」

◇　◇　◇

六限目も過ぎて、放課後。県立敷島女子高等学校、略称「敷女」（しきじょ）には「家庭科部」というものが存在する。これは、主に和洋のスイーツと、お裁縫、茶道も含めた家庭科一般を指してまとめて「家庭科部」としたものなのだった。お題は一週間毎に決められ、たとえば「今日は洋風スイーツの日」などと、顧問の柴島祥恵（くにじまさちえ）先生がお題を出すのだった。

場所は家庭科室。ここがメインの部室になる。三階東側の、大きなベランダがある部屋。よくある流し台のある部屋。家庭科準備室、裁縫室も部室に入る。裁縫室は飲食禁止。家庭科室と、家庭科準備室の東半分が飲食可能。冷蔵庫も完備。

「はーい、皆さん、今日は、レアチーズケーキの仕上げですー。あとは、ブルーベリージャムを載せて完成でーす。うふふー♪」

服部美月はダラダラ汗をかきながら、一人でぶつぶつつぶやいていた。

（チーズ！　チーズケーキ。しかも濃厚なレアチーズケーキ！　どうする美月！　わたしって、作ってはみたものの、チーズが大嫌い……というより、アレルギー起こすんだよな。どうか神様、食わず

に帰られる方法を教えて。食わずに、持って帰りたいです……）
「はっとり、何青ざめてるの？　汗びっしょりよ」
「う、うわー、びっくりした、なんだ、沙織かあ……」
「なんで、おどおどしてるの？　はっとりのも美味しそう♪」
「あ……あの……」
「はい？」
「お、お願いがあるんだけども……こ、これ、いらないから、持って帰って……わわわ、わたし、チーズって大の苦手で……」
「何言ってるのー、ブルーベリージャムとのコンビネーションが合うんじゃない♪」
「い、いや、わたし、それ食べたら、た、たぶん間違いなく病気になる……」
「じゃあ、わたしのあげる。あーん♪」
「ご、ごめん、ど、どうしても食えん！　たぶんジンマシンになる！」
「はい♪」

ぱく。ごきゅ。ごっくん。

「ね、美味しいでしょう、何ともないんだから」
「あ、食べちゃった。食べちゃったということは、わたし……か、かゆい！身体がかゆいっ！」
「ええーっ、もう？」
「あー、腕がかいかいかいかい……かゆいっ！　わたし、チーズを含めた、乳製品アレルギーなんだからっ、もう！」
「ごめんごめん……」
「沙織は、何アレルギーだっけ……」
「わたし？　えー、あずきかなあ」
「ふっ、覚えておきなさい、今度、滅茶苦茶濃厚な、羊羹を食べさ

せてあげるから」
「そ、それだけはご勘弁をー！」
「それとも、あずきがぎっしりの、きんつばか、ぜんざいはいかが？」
「そ、それだけは勘弁！」

放課後も終了間近、みんなで自分が作ったチーズケーキを試食する時間だった。

「うあ、和菓子屋のお嬢様にしてはなかなかね！」
「見栄えはね……」
「味見はして……ないか」
「じゃあ、わたしの作ったチーズケーキ、まるっと沙織にあげよう。味には自信がある」
「ごっつあんです」
「本当は、チーズ見ただけで卒倒しそうになったけど、あの生臭いプロセスチーズよりかはマシだからね」
「しかし、美月のチーズ嫌いは、筋金入りだなあ……」
「さて、どうしたのかなー、沙織ちゃん、わたしのケーキ、プレゼント包装なんかして」
「本当だ、どうしたの、さおりん？」
「べっ、別に、何もないわよ。霜田さんにあげるだなんて一言も……」
「バレてるバレてる」
「あ、携帯のメールだ……梨音からだ……」
『沙織へ　スカート新調した　わたしは真人間になるつもりです。なので、今から親父と学校へ行きます　帰りは一緒に帰ろう　立花梨音』

「どれどれ～？」
「ぷっ、真人間だって♪」
「更正したな、梨音ちゃんも」
「ということは、学校に来ると」
「来るとすれば、職員室だよね」
「帰りがてら、寄るとしましょうか」

放課後の職員室前。相川杏子先生が、立花親子に、目くじらを立てて怒っている。

「いいですか？　わかりましたね！」
「はい……」

とぼとぼと職員室から出てきた親子ふたり。立花梨音の父、功武さんは、水色の作業服姿だった。いかにも「電気工事してます！」というような出で立ちだった。そんなお父さんが、拳を振りかざして娘に向かって怒鳴っている。

「いいか、大体、お前が無茶かますから！　反省文は手伝わないからなっ！」
「はあい……」
「あ、君たちは！」
「こんばんは～」
「梨音ちゃんは、反省文何枚になったんでしょうか、おじさん」
「ああ、先生は、もう読むのも面倒くさいから、十枚にまけておくってさ」
「助かったな、梨音！」

梨音は、涙声で絞り出すように謝った。

「はい、しゅびばせん……」
「じゃあ、僕は先に仕事に戻るから、梨音のこと、頼むよ！」
「わかりました！」
「集団下校します！」
敷女指定の、丈の長いスカートを新調した梨音は、朝のセクハラといい、その後、身に降りかかって来た、あらゆる種類のパワハラを受け、まるで別人のように、おしとやかになっていた。

◇◇◇

『香枚井、香枚井でございます。三番線の電車は、急行、楠葉(くすのは)行きです。停車駅は、吾野本陣、紅葉野、吾野以降の各駅に停まりますね……』

「ふぁー、着いたー」
「お疲れさま、梨音ちゃん」
「つ、疲れたあああ」
「帰りは、何事もなかったな、沙織」
「そうだね美月……わたしも疲れた」
「午前中の授業、ノート借りて来た」
「さすがは美月さん！」
「おっと、露出狂には見せないからな、お前、自力でやれ」
「えー、ちょっとぐらいいいじゃん、ぶーぶー」
「じゃあ、桃花には後で貸してあげよう、露出狂は放って置いて」
「……ろ、露出狂キャラが定着してしまった」
「あなたには反省文があるでしょ、だからそれから」
「……あ、ケーキ！」
「そうだ！　霜田さんに渡すんだったっけ、沙織？」
「電話してみなよー」

数字をそそくさとプッシュする沙織……。

「あ、もしもし……はい、高槻沙織です。はい、みんな一緒です……うわ、いいんですか？　本当に？　じゃあ、今から伺います」

「で、何だってさおりん？」

「霜田さんは帰ってるんだけど、う、うちのお爺さんも来てるって……」

「あの、元祖パティシエの？」

「まあ、安全といえば安全でしょう」

「ほら、霜田さんだけじゃ心配なんじゃない？　万が一、危ない展開にならないとも限らないし！」

「まあ、ムードぶち壊しだけどねー」

香枚井三丁目、紅電無線グループ、霜田タクシー前。いそいそと、乗務員たちが、車内清掃を行ったり、休憩を取ったりしている。駐車場の二階の軽量鉄骨の部屋が、事務所兼家屋になっている。

「や、やあ、君たち……」

「おお、沙織、来たか！」

「お爺さん！」

「ど、どうも……」

「お邪魔しまーす」

「失礼しまーす」

高槻沙織の祖父、高槻康久と、霜田浩二郎社長、霜田家の長男、拓也が、食卓に陣取っていて、かに鍋がぐつぐつ煮えていて、今やビールで酒盛りが始まろうとしていた。

「うわあ、かにだー！」

「ちょっと梨音、はしゃぎすぎ！」
「じゃあ、プレゼント贈呈と行きますか、沙織」
「う、うん……あのー、朝に渡し忘れたプレゼントです」
「ありがとう。中身は……チーズケーキかぁ！」
「は、はいっ！」
「勤務中は本当に申し訳なかった。今朝はごめんね。美味しくいただくから」
「ありがとうございます！」

高槻の爺さんが、口を挟んだ。

「みんなの家には、ワシが連絡を入れといたから、ゆっくりしたまえ」
「ありがとうございます。でも、制服にお酒の匂いがついちゃうし……」
「心配いらん、ビールぢゃから！　それに……」
「はい？」
「沙織のボデーガードをせねばならんからな。変な虫がつかんように」
「お、お爺さん……ムードぶち壊し……」

霜田のお父さんが、口を挟んだ。

「さあ、冷凍とはいえ、季節外れのかにだよ。ちょっと食べて行きなさい」
「いえ、遠慮します……」
「ええ、さっそくいただきま……ぐはっ！」

美月の肘鉄が、梨音の脇腹にヒットした。

「梨音はちょっとは自重しろ！」
「だ、だってえ……」
「では、私達はこれで……」
「かに、食べて行かないのか？」
「ボデーガードもおるぞ！」
「この後、勉強もありますし……」
「それに、制服がお酒臭くなったら、明日学校で何言われるか……」
「んじゃあ、楽しんでくださいね！」
「霜田さん、飲みすぎないでね！」
「あ、お疲れさまでした～！」
「失礼しました～」
「お、おい、かにが煮えてるのに……折角買ったのに……」
「いやいや浩二郎くん、あれが青春ぢゃよ」
「年頃の娘さんって、そういうもんですかね」
「うむ！恥じらいこそが、伝統ある敷島女子の生徒ぢゃ！」

いそいそと、霜田タクシーを後にする四人。

「うわー、助かったー」
「あのまま酒盛りにつきあう訳にはいかないよねー」
「お酒臭くなったら、着替える制服もないし……」
「とりあえず、バスに乗りましょう！」
「沙織、良かったな！プレゼント渡せて」
「じゃあ、沙織、私たちはバスに乗って帰るよ」
「おやすみー」
「じゃあまた明日～！」
「いい夢見ろよー」

香枚井三丁目バス停に陣取る、美月、梨音、桃花。

「ちぇー、かに食べたかったのにー」
「お前は反省文があるだろう？」
「そうね、ちょっとあのミニスカートは……ね……」
「さて、反省文かぁ……何書こうかな……」
「梨音。お前、自分の胸に手を当ててよーっく考えろ」
「え、Ａカップだけど……」
「ちっがあああう！　校則違反のスカートと、遅れた授業のノートのことだ」
「え、そうだったっけ？」
「もう、お前には絶対ノート見せない。自力でやれ」
「美月のけちー」

そこへ到着する紅電バス。

『室山三四系統、春名坂小学校、春名台団地方面、紅電榛名天神駅行きです　発車します』

こうして、美月のいちばん長い日は終わろうとしていた。

第二話　美月と沙織と狼たちと

土曜日。榛名天神駅前の和菓子店、服部宝珠庵。服部美月の実家だ。名菓「香枚井餅」という羽二重餅が、まるで飛ぶようにはけてゆく。榛名天神社の参詣道の入り口というロケーションから、おみやげに買っていこう、という人たちが、朝早くから列を成していた。美月も例外ではなく、お店を手伝わされていた。白い頭巾に、白い割烹着という出で立ち。

「六個入りが三箱で、一八〇〇円になります。ありがとうございます。丁度お預かりします。ありがとうございました……あれ、携帯が……」

『はっとりへ　折り入って相談がある　今から香枚井駅前のウインピーバーガーに行かない？　そっちは暇してる？　沙織』

美月は早速返信を打った。

『沙織へ　いま実家が忙しくて、餅ばっかり売ってるよ！　お昼を一緒に、ぐらいなら、たぶんOKかな　美月』

服部美月は、母親に香枚井まで行くと言うと、こんなに忙しいのにお昼を抜けるなんて……と言いつつ憮然な表情に変わったが、高槻さんと昼食を共にするだけだ、と言ったら「まあ、しょうがないわね、行ってらっしゃい」という感じで許してくれた。早速、割烹着を脱ぐと、服装は、ふつうの普段着だった。仮に敷女の制服で買い食いしたり、商売していたら、近所の住民から学校に通報されるといった厳しさがあるからだ。

榛名天神駅から、各駅停車に乗って一駅で香枚井に着く。香枚井駅は、室山市の北の玄関口とも呼べるロケーションで、葱北本線は快速が、紅葉野電鉄は急行が停車する。そんな賑わいを見せる商業地には、大規模なショッピングモール「シエスタ香枚井」があり、高槻沙織の実家が経営する洋菓子店「高槻洋菓堂」の支店もテナントに入っている。なお、「ウインピーバーガー」という地元のチェーン店も、テナントに入っている。

服部美月は、ハンバーガーショップに入った。適当にフィレオフィッシュ（もちろんチーズ抜き）のセットを頼むと、やがてそれを受け取り、店の奥で待っている高槻沙織の姿を見つけると、そのまま店の奥へと入って行った。

「やあ、はっとり、こっちこっち！」
「なあに、折り入って相談ってーのは。相談だったら、わたしん家来ればいいだろ？」
「呼びつけておいて、ごめんごめん、実は、わたしんところの店も忙しくて、お店のお手伝いをしているのだ、シエスタ香枚井で」
「なんだよ、お前の都合かよ……わたしだって、榛名天神の店で忙しいんだからっ」
「はい、お礼の印と言っては何ですが、これ当たったんで、はっとりにあげるー」
「お、ポテト引換券か、サンキュー。ところで、わたしのスクラッチカードはどうかな……ええと、十円玉……あった。どれどれ……」

スクラッチカードを必死にこする美月。

「なんだよ、ハズレかよー」
「おやまあ、残念。でもこれって、十枚ためると五百円のチケットになるんだよ、とっときなよ」

「わたしは私用で香枚井に来ることは滅多にないから、沙織、お前が集めろ」
「そうしますー」
「で、相談って何だよ、教えろよ沙織」
「じ、じつは、今から霜田さん兄弟が揃ってこちらに来るのですー」
「はあ？　聞いてないぞ。何だよ、まるで合コン開始、みたいな雰囲気になっちゃうじゃんかよー！　焦らせるなよ」
「で、ですねえ、友人代表として、一緒におしゃべりしましょう、というのが、わたしからのお願いだったりするのです」
「……帰る、わたしは忙しい、残り全部お前が食え」

沙織は、美月がすっくと立ち上がると、事務的な表情になって、その場を立ち去ろうとするのを、服をつかんで必死に制止しようとした。

「お願いです服部さん、わたし一人だけじゃ心細いので、どうかお願いします！」
「……んもう、ちょっとだけだぞ！」

その頃、鍵堀川を渡ってきた霜田　翔と、橋の対岸で待っていた霜田拓也が合流し、紅電香枚井駅西側に隣接する「シエスタ香枚井」に向かって歩き始めたところ。背広には社章がついているので、二人共、上着を脱いだカッターシャツにスラックスという出で立ちだ。ライバル鉄道の社員同志が一緒に飯を食うというシチュエーションは、お互い避けたかったらしい。やがて、二階のハンバーガーショップに、二人が現れた。

「はっとり、あの人がおなじみ拓也さん。で、ちょっとチャラそうなのが、弟の翔さん」
「翔さんは初めて見る顔だなあ。確かにチャラそう」

「あ、こっち来るわ」
高槻沙織が手を振って合図を送ると、霜田兄弟は「よっ」というような、敬礼ほどではないけれども、軽いジェスチャーをして見せた。
「はっとり、あなたの隣譲って、席譲って」
「わ、わかった」
霜田兄弟が、ハンバーガーをトレイに載せてやって来た。まず口を開いたのが、弟の翔のほうだった。
「おっす、沙織ちゃん！　隣の子、誰？　新顔だなあ」
「こ、こんにちは翔さん、この子、友人代表の服部さんです」
「服部さんって言うのか。初めまして。オレは霜田　翔。よろしく！」
「あ、ど、どうも……」
「それにしても、服部さんって、胸でけえなあー」
「こら、翔、セクハラするな！」
割って入ったのは、翔の兄貴である霜田拓也だ。翔の頭に空手チョップを炸裂させた。
「痛てえ……」
「女の子にセクハラするなとあれほど……」
「わたし、帰りたい……」
「はっとり、ここは我慢して、お願い！　女子には、誰にでもああなの、翔さんって」
「セ……セクハラされた……」
「だってさ、本当にでけえから」

「ま……またセクハラされた……」
「翔、黙れ！　とっとと座れ、このおっぱい星人が！」

◇◇◇

「拓也さん、こんにちは」
「ああ、こんにちは」
「お、オレには？」
「知りませんっ！」
「沙織ぃ、まるでガキンチョだよな、翔さんって」
「目が、もう身体目当て、って感じだよねー」
「なんだよー、それ、失礼な。オレだってマジメな葱北本線の駅員だぞ！」
「沙織ちゃんに美月ちゃん、コイツ、女子をナンパすることだけが生き甲斐の、どう猛なケダモノだから、気をつけて」
二人「はーい」
「おい、ちょっと待てよー！　オレにはそんな設定ねえよ！　誤解を与えるなって！」
「ちなみに、兄貴のオレは、いつでも紅電の代行バスが運転できるよう、バスが運転できる大型二種免許持ってるよ」
「お、オレだって、ハーレーダビッドソン運転できる大型二輪持ってるんだからな！」
「霜田さんたち、すごおおおい！」
「でも、翔さんとタンデムしたら、翔さんの背中のセンサーで胸の感触探られそうね」
「あり得る、あり得る」
「なんだよー、そのケダモノ設定やめてくんないかなあ……」
食事も一段落したところで、各自が携帯電話を用意して、ワイヤレスで情報を交換することにした。

「じゃあ、いっきまーす」
「いっせーの、えいっ！」
「あ！　翔さんのも取り込んじゃった……」
「後で消せばいいんじゃない？」
「消すなよ！　ちゃんとオレのも残せよ！」
「拓也さんのは、ちゃんと残しときますからね」
「うん、ありがとう」
「って、おい！」
「じゃあ、今日のメインイベント終了、ってことで、良かったな、沙織」
「あ、霜田さんたち、今日はお忙しい中、ありがとうございました！」
「ありがとう、はっとり！」
「済みません、私のわがままで呼び出したりして……」
「いや、気にしなくていいよ、オレらのことは」
「そうそう、オレたちのことは、心配いらないから」
「じゃあな」
「じゃあ、また月曜日、改札口で！」
二人「はーい」

そうして、二人の駅員は、席を外した。まだ何かしゃべり足りない翔は、兄貴に向かって何か言っているが、その都度兄貴の空手チョップを後頭部にくらうのだった。

「翔くんって、まだまだ子どもっぽいところあるよねー」
「くんって……確かに、言えてるー」
「それに引き替え、拓也さんって、紳士よねー」
「そうかなー。案外、実は中身がムッツリスケベだった、とか言うんじゃないのー」

「んもう、幻滅するじゃない、はっとりったら」
「男は狼よー、気をつけなさい、赤頭巾ちゃん」
「そういうもんですか」
「その通り」
「と、いいいますと？」
「敷島女子、略して『敷女』ならいいんだが、色魔の女子、略して『色女』にだけは、絶対なっちゃダメだぞ」
「はっとりったら、時々、学校の先生みたいなこと言うねえ」
「まあね。長年、アホ二名の世話してきたから、くせかな、これは」

服部美月が、ドリンクを口にした瞬間、高槻沙織が突拍子もない事をしゃべった。

「ところで、はっとりは誰が好きなの？」
「ごぼっ！」
「恋とか、してるの？」
「げはっ、げほ、げほ……あー、もう、沙織は急に何を言い出すの？」
「わたしの恋愛事情はともかく、いつも仲人さんみたいに振る舞ってるはっとりは、誰が一番好きなの？　恋とかは……してないの？」
「ぼっ、ばかもの！　わたしに限って、好きな人なんかいるはずないじゃない！」
「そうかな。はっとりって、異性モテしそうな感じするけどなあ……」
「もてでない、もてでない。どうせ見てくれだけの堅物な女ですとも！」
「そうかなあ……はっとりを見て、振り向く男子、結構いるよ？」
「あー、わたしさあ、まだ異性に興味ないんだよね。つーか、色恋沙汰は、何かと面倒くさいし、噂や評判になるのもイヤだし」
「でも、和菓子屋さんの長女なんだし、お店にお婿さんをお迎えし

なきゃ……」
「って、いきなり配偶者かよ！　気が早いんだよお前は！　……さて、帰るか」
「ぶ……無粋なこと、訊いちゃったかなあ」
「さあ、もうすぐ一時だ！　仕事だ仕事！　行くぞ沙織！」
「はあい」

シエスタ香枚井の地下一階に、高槻洋菓堂の店舗がある。そこに付き合わされる、服部美月。なにやら「お土産」があるそうだ。冷蔵ショーケースと、いわゆるクッキー、ビスケット類が半分半分に置いてある。

「やだ、チーズケーキが置いてある……」
「違うよはっとり、こっちのだよ。これだったら食べられるでしょ。ほら、棒状に丸めたバタークッキー」
「え、ちょっと待て。わたしにくれるのか？」
「うん、ヤボ用に付き合わせてしまったお礼」
「いいよ、友達なんだし、そんな社交辞令みたいな、遠慮します」
「堅いこと言わない言わない。電車賃代わりに」
「わたしは、できれば五〇〇円玉の方が嬉しいのだが……」
「はい、プレゼント、フォー、ユー」
「さ、さんきゅ。あんがと。じゃな。仕事頑張れよ！」
「うん、今日はごめんね」

シエスタ香枚井のエスカレーターを昇って行く美月。そういう美月も、実は、恋がしたいって思っているし、人並みの健康な女子なのだから、異性に興味がないわけじゃない。が、しかし、いっつも理性が勝ってしまう。理性が、そうした欲求を、知らず知らずのうちに抑え込んでいるのだ。由緒正しき「香枚井餅本舗」のお嬢さんだ。常に、そういう欲求は抑えるように、両親から知らない間にイ

ンプリントされている。

（でも、沙織に言われた……恋をしたことがあるのか、って。ないことはないけど、わたしって勝ち気だし、どちらかと言えば男言葉だし、男友達はいたけど、そんなピュアなシチュエーションまで至ったことがないし、キス……だって、まだだし……）

エスカレーターを上り終え、少し進んだところで、ふと立ち止まった。

「恋……かあ……」

美月は一瞬、遠い目をした。

「えええい、心頭滅却すれば火もまた涼し！　さあ、仕事だ仕事！」

服部美月は、紅電香枚井駅の切符売り場で、コインを投入し、一五〇円と書かれたボタンを押した。そして、完全に我に返った。

（そうね、シエスタ香枚井に空き店舗が出来れば、服部宝珠庵の支店を出すという手もあるかもね、経営上。ライバル同士、繁華街でこそ、しのぎを削らねば！　各駅停車の門前町でくすぶっている場合じゃないわ。よーし！　今度、父親に相談してみよう！）

◇　◇　◇

服部家の晩の食卓。ショルダーベーコン入りの野菜炒めに、ご飯、それからおみおつけ。至ってシンプルな晩ご飯だ。服部家の夕餉は遅い。午後七時に店を閉め、午後八時にみんなでお食事といった具合に。食卓には、沙織と、沙織の兄で服部明良、沙織の母、沙織の

父、服部征志が座っていた。

「ねえ、父さん、お願いがあるんだけど」
「お金の相談だったら、聞けないなぁ……」
「今度、シエスタ香枚井に出店することがあったら、私手伝う！」
「うーん、シエスタ香枚井かぁ。一度は考えたんだが、どうも店賃が高くてな……」

社会人一年生の兄、明良が口を挟んだ。

「おい美月、もしかして、お前の友達の、洋菓子店と張り合おうってのか？」
「うん、まあ、そんなところ」
「止した方がいいと思うぜ。うちは、室山市観光協会に置かせてもらっているし、道の駅・香枚井にも置いているし、葱州縦貫道の岩崎サービスエリアにも置かせてもらっているんだから、全然、高槻さん家とは、客層が違うんだよ」
「くっそお、早く大人になって、高槻洋菓堂を見返してやりたいんだけどなあ……」

この道一筋の父、服部征志が口を挟んだ。

「美月。今は、学問に集中しなさい。もし文学部に入れたら、特に、この近辺の歴史を研究するんだ。何故、天神社に餅を供えるようになったのか。なぜ、服部家が御用達になったのか。そもそも、何故地名が春名坂上なのに、どうして井戸の名前が香枚井なのか。どうせ勉強するのなら、そこんとこを、深ーく勉強しなさい、わかったね」
「はあい」

服部美月は、自分で自分の食器類を洗い終わると、自室にこもった。椅子に腰掛けて、机に向かって、音楽を聴きながら勉強をし始めた。そして、つぶやいた。

「あー、早く大人になりたい……ちきしょ、認めてもらいたい……」

第三話　臨時講師、マイク・ゴズウェル登場！

ここは、県内屈指の進学校、室山県立敷島女子高等学校。規律正しく、折り目正しき女学生が集う、他校の女子もうらやむ、お嬢様学校な、はず、だが……。今日の職員室は事情が違っていた。

なんと、はるばるイングランドのリバプールからやって来た、英語の臨時講師、その名も、マイク・ゴズウェル。身の丈、約二メートル。当然英国人だから、あやふやな日本語を操り、そして、何と言ってもむだ毛の多さ。Ｔシャツからは、あふれんばかりの胸毛が見えている。そして、腕にも体毛がわんさと生えていて、脚も例外ではなかった。とりあえず、いまのところ、セックスアピールだけは抜群だ。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡー、ミナサン、ゴキゲンオカラデスカー？ワタクシ、リバプールカラ、キチャイマシタ、マイク・ゴズウェルデース。ワーオ、コノ、ハイスクール、ピチピチガール、バカリデース！　ドウゾ、ヨサク、オニガシマース」

英語科の、悩める女性教諭、相川杏子先生が、この巨漢を相手に生徒に生のイングリッシュをレクチャーさせせないといけないのだ。

「わたし、頭が痛いんですけど……校長、早退させてもらってもいいですか？　いきなり疲労がレッドゾーンなんですけど……」
「なんだ、英語科担当教諭なんだろう？　自分から志願したんだし、やりかけた事を途中で投げ出すのは、関心しないねえ……」
「でも、校長……この人発言が卑猥です……」
「じゃあ、早速、三時限目に、二年三組に連れて行きなさい……頼むよ」

「はああ……」

◇　◇　◇

三限目は、英語？の時間……。その前の休み時間に、廊下にゴズウェルを引き連れて、相川杏子先生が二年三組の教室に向かった。杏子先生の手提げ袋には、謎の物体が。そうして、二年三組の教室の前で、杏子先生はゴズウェルに向かってこう言った。

「ミスター・ゴズウェル、キープ、サイレント。ウェイティング、ヒアー。アンダスタンド？」

「オー、オーケー、オーケー、ハーッハッハッハー」

「シーッ、ビー、クワイエット！」

「ソ、ソーリー……」

先に、相川杏子先生が教室に入ってきた。お祭り騒ぎできゃいきゃい言っている教室が静まりかえった。

「起立、礼、着席！」

「えー、先般から皆さんにお知らせしていました、イングランドからお越しになった、マイク・ゴズウェル講師が参ります。もし、セクハラの表現の度が過ぎた場合、わたしが合図をしたら、今から配ります、豆まき用の豆を渡します。わかりましたね。徹底的にぶつけてください。生徒同士怪我のないように。わかりましたね。わたしは後ろで見ていますから、安心してください」

「えー、豆えー？」

「そんなに酷いセクハラなのかしら」

「スケベなのかなあ……」

「えー、全員行き渡りました？　行き渡った。ああ、そう。じゃあ、武器は隠して下さい。では、今からゴズウェル講師をお招きします」

ガラリと扉を開いて、杏子先生がゴズウェル講師に呼びかける。
「ミスター・ゴズウェル、プリーズ、カムイン！」
「ウェル、オーケー、オーケー。ハーッハッハッハー！　オー！　ウァオ！　ミナサン、ビューティフルデスネー！　ハジメマステ、ワタクシ、イングランドのリバプールカラ、キチャイマシタ、マイク・ゴズウェル、デース。ドーゾ、ヨサク、オニガシマース！」
「はい、拍手ー」
パチパチパチパチ……。
「サンキュー、サンキュー、ジャパニーズガール、マルデ、カインドネスデ、ハートウォーミングデース」
「じゃあ、ミスター・ゴズウェル、ゴー、アヘッド」
「オーケー、ミス・キョーコ！！　ハーッハッハッハー！」
「……では、わたしは後ろで見ていますから、授業を受けてくださ い」

◇◇◇

「デハー、ジュギョーヲ、ハジケマース！　アー、ユー、レディ？」
一同「イエー！」
「マズ、ノートヲ、シャカシャマにして、ウラガエシテ、ソウ、サッカサマニ、シマース」
「逆さまの裏返しだって……」
「どうする気かなあ……」
半信半疑に、英語のノートを裏返し、天地逆さまにしてみる、女生徒たち。

「ソコニ、コクバンドオリ、カキクダシテクダサーイ！　ヘルス&フィジカルエデュケーションノ、テクストヲ、モロダシシテクダサーイ！」

「ゴズウェル先生、保健体育のことですか？」

「ハーイ、ホッケンタイックのコトデース！　アイム、ソーリー」

「何ページを開くんですか？」

「ホワット、ドゥー、ユア、オープンナ、ページ？　オーケー、オーケー」

相川杏子先生は、おやっ？　と思い始めた。何の教育をするのだろう、そんな目で見ていた。ところが。

「ホッケンタイック、テクストノ、ヨンジュウハチ、ページ、デーズ！」

そして、おもむろに、それを黒板に板書し始めた。そして、黒板に描かれた睾丸のへんを、拳で叩きながら、こう言うのだった。

「ココ、イイデスカー、ココハ、ダイジデス！　テスティクル！　テスティクル！」

相川杏子先生が叫んだ！

「みんな、準備しましたかー？　これは、セクシャルハラスメントです！　突撃ー！」

「イエッサー！」

「ホワット？　ハラス……ノー！　マイ、ガー！」

マイク・ゴズウェル講師にぶつけられる、豆の数々。廊下へ逃げ

ようとするのを、みんなで追いかけて追い払う。
「ノー！　ソイビーンズ！　ダスケテ、タシケテクダサーイ！　ニッポンノ、オンナノコ、キレルト、コワイデース！」
職員室まで追いかけて、校長先生にマイク・ゴズウェル講師を突き出した。そして、ノートを見せた。最後まで追いかけた女生徒は、十数名はいただろうか。
「おやおや、生徒の皆さんと、ゴズウェルくん。一体全体どうしたんだね」
「こ、校長先生、この人、英語教えるかと思ったら、こんなモノを教えるんですよー。もう、超最低ー！」
「あ、あそこを指さして、テスティクル！　って言って、もうセクハラです！　やだー、わたし、やだー！」
相川杏子先生が追いついた。
「校長、人選ミスです！　即刻この学校から叩き出して下さい！　最低です！　最低です！」
校長が巨漢のゴズウェル講師に詰め寄って、言葉汚く罵った。
「ユー、サック。ナウ、レイオフ！　レイオフ！　ゲット・アウト・オブ・ヒアー！　ユー、アンダスタンド？」
「オー、ソーリー、ソーリー、モウ、トゥワイスハ、シマセンカラ、カンベンシテ、クダサーイ」
「ノーノーノー、レイオフ！」
相川杏子先生はため息をついた。

「校長、人選ミス……っていうか、廊下の大掃除が必要ね……はぁあ……」

教室では、日直の服部美月が、黙って例のあれを、黒板消しで消している。机には、立花梨音だけが残って板書を書き写していた。

「ねえ美月ー、まだ消さないでー、わたし、今日すごく勉強になった！」

「書き写すな、こんなもん！」

「えー、やーだ、消しちゃやーだ！」

「だが断る……」

その後、マイク・ゴズウェル氏がどうなったかは、読者のご想像にお任せする……。

第四話　中間テストがやって来る！

春名台団地の一部屋。土曜日の午後二時、立花梨音が、柏原桃花の家を訪ねた。団地と言っても新しく、３ＬＤＫの広いお部屋だった。そこでしばらくは、おとなしく現代文の教科書を広げて、柏原桃花から指導を受けていたの……だが？

「……い、いかん、糖分不足で、全然考えがまとまらん！」
「え？」
「じゃあ、桃花、今からおやつの時間にしようか？」
「……そうしましょう。それが終わったら、数学にしましょう。その前に、掃除機を」
「あ、そうだった！　忘れるところだったー」

辺りは、主に立花梨音が吹き飛ばしたと見られる消しゴムのカスで一杯だった。

「で、今日のおやつは？」
「沙織んちの、スイートポテトでーす！」
「うわー、美味しそう！」
「じゃあ桃花、お茶入れてきてー。あ、掃除機どこー？」

梨音は、現代文の宿題を書き終えると、ウオークインクローゼットの中から掃除機を取り出し、カーペットを掃除するのだった。一方、桃花は台所から、電気ケトルとティーバッグ、お皿やフォークなどを用意して、こちらの部屋へ持ってくるのだった。

「梨音ちゃんちで揃えたんだよね、掃除機とか、電気ケトルとか、この家の電化製品のほとんどを……」

「お、お客様は神様でございます、桃花さまー」
「えっへん！」
「六〇ヘルツの電子レンジとか、いろいろ揃えてもらいまして、恐縮です桃花さまー」
「お茶ですよー」
「サンキュー！」

さつまいもをくりぬいて作られたスイートポテト。女性に生まれて来たなら「芋・たこ・なんきん」の三大好物は外せない。このふたりは、まだまだ「色気より食い気」の方が勝っていた。

「でさー、今回芋だろう？　でさ、わたしが、たこ焼き器持って来たから、たこを制覇するだろう？　で、次はあんたが、わたしに、かぼちゃの含め煮を食べさせる。これで、芋・たこ・なんきんコンプリート計画は完璧だね」
「いい計画ですね、梨音ちゃん」
「えっへん！」
「でさー、まさか、その、ナサパニックのたこ焼き器、売りつけるんじゃないんでしょうねー」
「ええー、まさかのまさか、今回はわたしのサービスつーことで、無料でーす」
「良かった、また何か売りつけられるんじゃないかって、ヒヤヒヤしてたの」
「そこまで商売汚くないよ、だって、お得意様だしー」
「じゃあ、芋・たこ・なんきんコンプリート計画って、いい計画ね」
「だろう？　桃花もそう思うだろう？」
「でも……」
「なんだよ」
「五月って、中間考査があるんだよねー。中間テスト」
「……ちゅ、中間テストー！」

「そう、ぁ、梨音ちゃんは見てなかったんだ、はい、プリント」
「本当だ！　やっべえ……」
「……準備、してないんだ、やっぱり」

一方、服部宝珠庵の美月も、プリントが配られていたことを思い出していた。家の自室に入ると、革鞄の中から「中間考査実施について」のプリントを引っ張り出した。しげしげとプリントを見つめ、プリントを持ったまま、店のカウンターへ入って行くのだった。

「お母さん、これ……」
「んまあ、中間テスト？　あなた、二年生になってから初めてじゃない？」
「うん。敷女の中間テストって、あなどれないんだよね」
「難しぃの？」
「うん、結構ビシバシ来るね」
「……あなた、お店はいいから勉強なさい。さあ、ここはいいから！」
「はあい」

美月は、自室の机に戻り、現代文、数？、物理、英語？などなどの教科書とノートを取り出した。「ふう」と、溜息をつき、「さてと、どうすっかなあ……」とつぶやいた後、携帯電話を取り出すのだった。

「まずは、一番勉強してなさそうな、梨音にかけてみるか」
『はい、立花ですが……って、美月ぃ？』
「正解。お前、中間テストあるの知ってるかー？」
『えっへん。いま、わたしたちは、桃花の部屋で勉強合宿中なのであったー』
「……それで、はかどってんのか？」

『もちろんであります。理系はわたしで、桃花が文系』
「そ、そうなのか……随分仲良く助け合っているんだなあ……梨音が、勉強だなんて、天災地変の前触れかもな」
『な、なにをおっしゃいますか美月さん。わたしらだって勉強してますよー。いま、桃花の部屋でー』
「ま、マジメだなあ……お前ら、変なもの食べたか？　何か食あたりでも……」
『やだなあ、沙織んちのスイートポテト食べてただけだよー』
「……や、やっぱり」
『なあに？』
「……やっぱり変なもの食べて、アタマがおかしくなったのか……あ、それはそうと、ちゃんと、おカネ払ったんだろうな！　まさか、ネコババ？」
『失礼な。わたしらで分け合って、おカネ出しましたよ、美月さん！』
「ちきしょ、うらやましい……さつま芋か……」
『ところで、お二人で、霜田さんたちと、デートしてる場合じゃありませんよ、美月さんったら』
「デートじゃない……って、そ、その話、だ、誰から聞いた？」
『沙織のお母さんからー』
「あ、あのおしゃべり親子……」
『美月さんも、隅に置けないねえ、ぷふっ！』
「わ、笑うなー。わたしは、翔さんにセクハラされただけだ！　全然楽しくなかった！」　『まあ、詳しい話は置いといて、ウチ来る？』
「ったく、春名坂小学校までバスで何分かかると思ってる！　わたしは、沙織を呼ぶ！」　『おおー、やっと勉強する気になったか商売人！』
「元祖商売人の、お前に言われたくないよ……じゃあ、勉強、がんばれよ！　じゃあな」

『はーい、んじゃねー』

（……く、くそっ、全部見透かされた……沙織はどこじゃぁぁ！）

いそいそと、美月は沙織に電話をかけた。

「あ、もしもし、沙織？」

『はーい、いま、お店のお手伝い中……』

「って、そんなこと、やってる場合かぁぁー！」

『うわぁ……何だか知らないけど、急に怒られたぁぁ！』

「沙織、何か忘れてない？　中間テストとか……」

『い、いや、わたしは覚えてないよ』

「それがいかんっちゅーんじゃー！　まったく、緊張感持てよ……」

『い、いや、わたしは一夜漬けで何とかするから』

「それもダメ！　エプロン脱いで、勉強道具持って、敷女の制服ちゃんと着て、今すぐ榛名天神の店に来なさい！　今日は、明日になるまで、みっちり勉強を叩き込んであげる、わかった？　外泊は、親の許可取るの！」

『はっとり、話が急すぎて、何が何だか……』

「今から一時間だけ待つ、大至急来ないと、絶交だからな」

『わ、わかりました、わかったから、はっとり、どうか落ち着いて……』

「じゃあ、待ってる、わたしは切る」

『……』

高槻沙織は、シエスタ香枚井店のショーケースの裏にしゃがみこんで、とても困惑している……。

「ど、どうしよう……なんか、凄い怒ってる……」

沙織が、母に急いで電話をかけた。

「もしもし、お母さん、いまシエスタ香枚井なんだけど、服部さん

に、勉強しろ！　って呼び出されて……」
『あら沙織、お疲れさま。って、何かテストの時期でも？』
「そうなの。五月は中間テストがあるから、お前も勉強しろ、って、榛名天神のお店に呼び出されて、お泊まりで勉強がんばることにしたの。直ちに来なきゃ絶交だって……」
『まあ、必死っていうか、すごい剣幕ねえ……』
「とりあえず、家に帰って支度するから、お店、店員さんに任せていいでしょ、ね、ね」
「ありがとう、お母さん！」ピッ……
『まあ、しょうがないわねえ……いいわよ、行ってらっしゃい』
携帯電話を切って、店員さんの方へ向き直ると、沙織はアタマを下げた。
「お店の方、済みません。急に美月の家で勉強する事になったので、行って来ます。後は宜しくお願いいたします、皆さん！」
「沙織ちゃん、勉強がんばってね！」

シエスタ香枚井を出た自転車が、香枚井三丁目の本店兼自宅に着いたのは、そんなに時間はかからなかった。ただ、春名坂を越えて自転車では到底間に合わないので、紅電に乗るしかなかった。

「おやまあ、お帰り。ちょっとあなた、急ぎ過ぎよ！」
「いいの！　これはゆっくりしちゃいられないから！」
「もう、ドタバタしちゃって……」
「お母さん、今日は服部さんちでお泊まりになるから、よろしくね！」
「ええ、いいわよ……いいけど、あなた、制服なんかで……」
「はっとりが着て来いって！」
「あら、そう……」
「じゃあ、行って来まーす！」

「気をつけて！　って、もう、ドタバタね……」

香枚井三丁目のお店から、自転車で紅電香枚井駅に取って返す沙織。自転車置き場に自転車を収納すると、改札口へ駆けて行く。もう土曜日の午後五時だ。改札口に、霜田拓也の姿を見つけた。

「霜田さああん」
「沙織ちゃん！　どうした、こんな夜に、しかも制服で……」
「えへ、榛名天神駅に行くだけですー、服部さんちでお勉強です」
「服部さんかあ……この間は、翔のやつが済まなかった、と言っておいてくれる？」
「はい、わっかりましたー！」
「じゃあ、行っておいで、気をつけて……」
「はーい、霜田さんも、おやすみなさい」
「ああ、おやすみ！」

『四番線の電車は、次発、各駅停車、楠葉(くすのは)行きです。楠葉までの各駅に停まります。間もなく、電車がまいります。白線の内側まで下がってお待ちください』

(携帯電話、この車両は使っていいんだよ……ね。メール打とうっと)

『はっとりへ　いま、紅電香枚井駅の電車の中　次発の各駅なので、動き出すのを待ってる　だから、もうちょっと待っててね　沙織』
「ふう……。これで安心してくれるかなあ……」

メールを打ち終えた直後、今度はいきなり電話がかかって来た。

「はい、もしもしー」

『わたしだ！　香枚井三丁目なら、なんで霜田さんちのタクシー使わない！　坂登りゃあすぐじゃないか！　急げ！』
「はっとり、うるさい。もう駅の改札くぐっちゃったよー」
『あーもう、あんたってばお金持ちなのに、コレだっ！』
「でもでも、霜田さんに『おやすみ』って言ってもらえて、なんか幸せ！」
『……なーんだ。のろけかよー。色恋沙汰はわたしには関係ないんだから』
「あ、電車出るよ、じゃ、お店で待ってて」
『はいはい。じゃあ、お幸せに！　大至急来いよ！』ガチャ！　プー・プー・プー……
「切れちゃった……っていうか、はっとりがキレてた……何でだろう……」

◇◇◇

紅電・榛名天神駅は、線路を通すための切り通しの上をまたぐように、橋上駅舎が建っている。つまり、ホームからの上り階段が長いのだ。小刻みにステップを踏んで、沙織は階段を駆け上がった。エスカレーター。そんなに便利なものは、ローカル私鉄の各駅停車の駅には存在しない。階段を上がり終え、自動改札に切符を通すと、例の「服部宝珠庵」を目指して駆けて行った。
「服部宝珠庵」は、寛永七（一六三〇）年から綿々と続く、餅屋の家系だ。名菓「香枚井餅」は、この近辺の地名の由来となっている「香枚井」という井戸の銘水で練り上げられた羽二重餅で、昔は、葱州街道の春名坂越えをする旅人の休息場所となり、美月の実家、「菓匠　服部宝珠庵」は、榛名天神社で「御用達」になっているほどの旧家だったりするのだ。

「こんばんはー、高槻沙織でーす。美月ちゃんおられますかー？」
「あら、春名坂下の高槻さんね！　こんばんは！　いま、おばさんが呼んでくるから、ちょっと待っててね。……美月！　美月！　高槻さん家のお嬢さんが来られたわよー」
「はあーい」

二階で美月の物音がする。

「……美月、もう来るからね、ちょっと掛けてて頂戴なさい」
「やあ、はっとり！」
「なんだ、遅いぞー！　日が暮れちゃったじゃないかー」
「ごめーん、これでも、全力疾走して来たんだからー」
「じゃあ、上がって、さあ、早く！」
「お邪魔しまーす」
「お、ちゃんと制服着て着たんだな。偉いぞー。それでこそ敷島女子！」
「もう、急がせるから、階段でスカートがもつれて……走りにくかったんだよー」
「今日は、桃花の家で、梨音が合宿するらしいから、わたしたちも合宿だ！」
「な、何で対抗して、わたしたちも合宿するのよー」
「ばかっ、梨音のアホに負けてなるものか。わたしたちが負ける？　そんなこと、絶対にあってはならない。さあ、入った入った！」
「もうっ、相変わらず、とことん負けず嫌いねー」

かれこれ、築、四〇〇年近く経った、とことん古風な和風の部屋に、不釣り合いな、水色のカーペットと、ステンレスをベースにした、とことん実用一本槍な調度品。

「ここ、はっとりの、お兄さんの部屋？」

「ちっ……ちがあああう！　ここは、わたしの部屋だ！　悪かったな、男らしくて！」
「ごめんごめん……」
「ところで、沙織……あなたのお母様が、わたしたち二人と、霜田さん兄弟と、デートしたことになってるわよ。あなたの店に、スイートポテトを買いに来た梨音に、それがバレちゃってるのよー！　なんておしゃべりなのかしら、あなたのお母様！　信じられない」
「ええーっ、お母さん、しゃべっちゃったのー？　お、おんなじ制服……だからかな」
「そう、筒抜けよ。同じ敷島女子の生徒といえども、言っていいことと、悪いことが！」
「ごめえん……」
「……ったく！　さあ、勉強勉強！」
「あ、そういえば、拓也さんから、はっとりへ、弟がセクハラしてごめんね、って伝言があったよ」
「へっ、今更何を……」

本棚をのぞき込む高槻沙織。他人の本棚なら、誰しもが気になるところ。そこに、朱書きの書籍を何冊か発見した。

「あ、本棚……大学受験の赤本が並んでるー」
「敷島女子の二年生なら、今頃、当然の装備だろ？」
「そんなもんですかねえー」
「あなたも買いなさい。損はしないから……」
「だってー、志望校はおろか、進路決めてないし……漠然と、店を継ぐとか……」
「あーあ、進路も決めずに恋愛ばっかしてるし……沙織は呑気でいいよなあ……」
「はっとりは、決めてるの？」
「最低でも、室山大学には入ろうと思ってる。そこで、教育学を専

攻する」
「えー！　国公立ぅー？　むずかしぃよー」
「あんた、それでも敷女の普通科？　さあさあ、そんなことより、わたしに昨日の授業、教えなさいよ。梨音の痴漢事件の巻き添え食って遅れたから！」
「そんなに急がなくても、明日は日曜日だよー！」
「……それもそうね。じゃあ、カフェイン摂るか！」
「じゃあ、わたしはコーヒーで……」
「いや、この家には、お茶っ葉しかない。緑茶だな」
　こぽこぽと急須からお茶が注がれ、お茶菓子は、売り物の「香枚井餅」の訳あり品が出された。
「餅なら、ご飯と一緒で、アレルギーの心配がないだろう？　これでも沙織さんには、陰ながら、いろいろと気を遣っているのですよ、わたしは」
「ありがとう……ね」
「じゃあ、借りて来たノート、早速、見せてくれないか！」
「わかりました、美月さん……」

◇◇◇

　明くる日曜の、深夜一時。一通り勉強を終えた服部美月は、テレビを見ながら、奇抜なパフォーマンスのお笑い芸人たちを見て、必死で笑いをこらえていた。一方、高槻沙織は、机の上で、まだ問題と取っ組み合っていた。美月はボリュームを落とすと、デスクにかじりついている沙織の方を見て、言った。
「ねえ、沙織……そろそろ眠くない？」
「いや、もうちょっと……」

沙織は、カリカリと、シャープペンシルで書き、時に消しゴムで文字を消したり、口をとがらせて考え事をしたり、また書き始めたり、そうかと思えば腕組みしたり……。

「沙織……ぼちぼち、寝るか！」

「ねえ、はっとり、ここ、分かんない」

「どれどれー？　ああ、微分ね。だから、xの時間軸が限りなくゼロに近づく時のyの値のことで、このページの、ここ！　教科書のここだ。ほら、xを徐々に小さくして行くと、その瞬間のyの速さが、核心に近づいて行ってるだろ？　これを極限値と言って……」

「ふむ。何となく分かった気が……でも、xの時間の幅はゼロじゃないんだよね……」

「そうだな、ほんの少しの幅はあるけど、幅はゼロじゃないんだな、これが」

「ふむ。奥が深い……時間軸は限りなくゼロに近い幅だけど、ゼロではなく、限りなくゼロに近い……あぁっ、もうっ、わたし、これ意味わかんなーい」

「じゃあ沙織、今日は、もう寝よう。あんたいま、数学に随分、哲学混じってる。もっと言えば、ドツボにはまってる。まあ、そういうもんだ、と割り切って、公式を丸暗記することだな。じゃあ、また明日、考えよう。さあ、お布団出してー♪」

「はあっ、やっと解放された……」

◇◇◇

高槻沙織は、ふすま一枚隔てた向こう側の布団部屋で、着替えをしている。一方、服部美月は、勉強部屋で、着替えを済ませた。

「沙織、着替え済んだー？」

「はい、お待たせ、黄色いパジャマです……って、はっとり、和服の寝間着ー？」
「ええ、いつもそうだけど、それが何か？」
「何か、新鮮……っていうか、胸元がどことなくセクシー！」
「こら沙織！　お前、煩悩が多すぎ！　そして、変な妄想もしない！」
「は、はなぢが……」
「こらあ！　他人ん家の寝間で、わたし見つめて、鼻血吹いてんじゃない！　さっさとティッシュ丸めて鼻の穴に詰める！」
「おまたへしまひた。さあ、れんき消して、にぇるよ、はっとり……」
「な、何言ってるか、わからん！　とにかく電気消せー！」

◇◇◇

美月の部屋には、和風のペンダント照明があり、麦球の常夜灯が、ぽつんと灯る。布団をふたつ敷いて、横になっている。が、沙織は慣れない種類の枕で眠れず、まだ緑茶のカフェインが効いているようで、ひとり暗闇で携帯電話をもてあそんでいる。
携帯に、マナーモードの着信があった。どうやらメールのようだ。

「ねえねえ、はっとり……」
「ふ、ふあ～？」
「いま、携帯に、梨音たちの様子が、写メ付きで、着信来たんだけど……」
「むむう……はん？　はいー？　いま何時ぃ？」
「ご、ごめん起こして……いま、午前二時……」
「あん？　二時ぃ？　梨音のやつがどうしたってー……もうっ、そんなの、どうだって、いいじゃんかよー……わたしは……ねむ……」

「あ、寝ちゃった。しょうがないなあ、はっとりは……ん？　メール？」

『沙織へ　イエーイ！　ハイテンション！　ハイテンション！　やってるかーい！　わたしら、勉強はかどってまーす！　お夜食に、たこ焼きも作ってるぜ！　そっちはどうだーい？　梨音』

携帯電話の中で、勉強してるんだか、ちまちまと、たこ焼きを作っているのか、本当に勉強がはかどっているんだか分からない、とにかくハイテンションな画像が映し出されていた。

(そうねえ……うっしっし……フラッシュ消して、美月のセクシーな寝姿などを、パチっと撮影して……)

『梨音へ　イエーイ！　そっちは楽しそうね。こっちは……ローテンション……わたしが思わず鼻血を吹いた、セクシーな美月の寝間着姿のサービスショットはいかが？　ふっふっふ。じゃあ、こちらはもう消灯時間なのでまた明日。じゃあねー。　沙織』

またもや、メールが着信した。

『沙織へ　うおおおー、セクスィー！　そりゃあ鼻血も吹くよ、色っぺー！　じゃあ、わたしらは、色気より食い気っつーことで、芋・たこ・なんきんコンプリート計画、始めてまあああす。桃花のかぼちゃの煮付け、いっただきまあす！　じゃねー！　梨音』

こうして、服部家の夜は更けて行く……。

◇　◇　◇

明くる朝……服部家の朝は早い。午前六時半……。ラジオから、けたたましいラジオ体操の歌が流れてきた。服部美月は、ジャージに着替えて、自室でラジオ体操の演技をしている。そうして、コンポーネントステレオから大音量で流れる、ラジオ体操第一……。

『それでは、姿勢を正して、ラジオ体操第一！』

「ほにゃっ？」

『胸を反らして大きく、背伸びの運動から！　イチニーサンシー……』

「む、むがっ？　は……はっとり……？　い……いま何時ー？」

『手を振り後ろ反りー……』

「む……むにゅむにゅ……」

「さあ、沙織も起きる！　ほらあっ！」

「え？　た……体操？　急に言われても……」

『斜め後ろに大きくねじって、ゴーロクシチハチ……』

「みゅ……ふみゅ……ゴビー、グー、スー、スー」

「スースーって、おい！　まどろみに陥ってるんじゃない！　今すぐ起きろ、沙織！」

どうやら、午前六時半に、高槻沙織を起こすことは、大変な困難を伴う作業と見た。再び制服姿に戻った美月は、机に端座して、朝の勉強を始めた。一方、無理矢理布団部屋に押し込まれた沙織は、制服を眠そうにだるそうに、もたもたと着替えているのだった。

「はっとり、朝早いんだね。おはよう……」

「おはよう沙織。そりゃもちろん、春名坂中学校の頃から、あのアホ二名を起こして引率していたので、私は毎日大変だったんだよ」

「あー、それは大変そう。わたしは、もともと香枚井中学校だから、隣の学区だねえ」

「沙織んとこは、都会だからなあ……。この家はもう少しで、椎瀬

町になるところだからねえ、ぎりぎり室山市春名坂上……そこの神社ってば、もう室山県吾野郡椎瀬町大字榛名、だからな」
「田舎って大変だね」
「田舎……って、お前が言うなー！」

◇◇◇

翌週、中間テストの結果が返ってきた。答案を返却するのはもちろん、君子豹変する、クラス担任の相川杏子先生だ。もしも悪い成績だったら、ケチョンケチョンに言われるだろう。
「はーい、答案を返します。もしも一科目でも赤点だった人は、面談、補習の上に、後日、再試験を行います」
赤点を免れたのは、美月と桃花だけで、たこ焼きを深夜に作っていた子と、数学に哲学が混じっていた子は、それぞれ赤点がちらほら。
「高槻さん、数学。だめよ、数？レベルでこんなのわかんなきゃ……立花さん、英語が最悪ね。だめよ、これぐらいでもたついてちゃ……」
高槻沙織は、内心動揺していた。
(駅員さんの事で頭が一杯になってた挙句、お店を手伝っていて、ましてや、数学に哲学が混じっていました、なんて言ったら、先生に怒られる……)
立花梨音も、内心動揺していた。
(徹夜でたこ焼き作って食べてました、英語は中学校レベルです、なんて言ったら、先生にバラバラにされる……)

――帰りのＨＲ後。服部美月が召集をかけた。
「香枚井登下校組、集合ー！　テストどうだった？」
「てへっ」
「おおっ！　さすがアナウンサーの子どもだなあ」
「みてみてー！　全部七十点は取れてるよー」
柏原桃花がやって来た。
立花梨音が、ぶつぶつぶつぶつ言いながらやって来た。
「ず、図星です美月さまー」
「うわ、本当に最悪だ。お前、たこ焼き作って遊んでただけだろう」
「英語。ほら見て」
「数学。こんな感じ……」
高槻沙織が、うなだれながらやって来た。
「うわあ、すごい書き込みと、消しゴムで消した跡……何があったんだ？」
「数学に、哲学混じっちゃいました……」
「はあー。香枚井登下校組でまともなのは、わたしと桃花だけかよー」
「そういう美月は……全部九十点台！　いつ勉強してるのー？」
「普段。普段から、一歩一歩の積み重ねだぞ！」
「参りました」
「服部さーん、柏原さーん」
「は、はい！」
恐怖の大魔王、相川杏子先生が、美月と桃花を柔和に呼び止めた。

「あの二人、当面、部活動は禁止ね。香枚井から来ているよしみで、ここはいっちょ、あの子たちに、居残り勉強のボランティアをして欲しいの。先生役ね」
「わかりました。高槻さんには、土日もわたしの家で数学の勉強を教えていたのですが、何と言いますか、哲学的に深く考えてしまうようで、こういうものだ、と暗記して飲み込むのが苦手だと見受けられます」
「ほんとうに……あなたも苦労が絶えないのね……柏原さんも、できれば勉強、手伝ってあげてねー、顧問の先生には、わたしから言っておくから」
「はーい」

先生が去った放課後の教室……。服部美月はゴキゲン斜めだった。

「お前らー！　お前らの胸に緊張感はあるか！」
二人「胸なら多少はありまーす」
「これだ……まだまだ緊張感が足りんつっとろうが！」
「はい」
「申し訳ありません」
「まったく……家に電話かける……あ、もしもし、お母さん？　それがね、聞いてよー」
「美月先生怖いわねー」
「き、鬼畜だわー」
「……何か言ったかオイ」
「べ、べっつにー」

その後、美月の鬼畜とも言えるスパルタ教育と、桃花の懇切丁寧な教え方で、追試で赤点は免れたようだった。

第五話　総合高校がやって来る！

　ふと、服部美月は、昇降口近辺から、学校の掲示板を眺めていた。すると、さりげなく、このようにポスターが貼りだしてあった。そこに書いてある文面は、こうだった。

“室山県立敷島女子高等学校は、来年度より室山県立敷島総合高等学校になります”

「はあ？　総合高校になるって……もしかして！」

“なお、室山県立敷島総合高等学校は、完全単位制となり、男女共学となります”

「なんだ……と……ちょっと沙織！　沙織来ーい！　カモン沙織ィー！」

「うあー、ほわああー、おはよう、はっとり。素っ頓狂な声を出してどうしたの、朝から」

「うちの学校、来年度から男女共学になるんだよー！」

「ああ、なんだ、そっかー、良かったね……って、えええええー！」

「眠気が覚めたか」

“室山県立敷島女子高等学校と、室山県立敷島商業高等学校は、来春合併予定です”

「そっかー、少子化の影響でかー。でもさあ。なんかこう、学校の文化っつーものが違くない？　なんか、彼ら、そろばんとパソコンと簿記会計ばかりやってるイメージが」

「んじゃあ、私たち、最後の真っ当な、敷女生だねえ……」

「今後、女子制服は、敷島女子のものを踏襲するらしい。なお、男子制服は、敷島商業のものを踏襲するらしい」

別の紙には、こう書いてあった。

“敷島女子高等学校英邁会（卒業生ＯＧ会）学校合併反対の署名をお願いしています”

「そりゃー、ＯＧのお姉様方が黙ってないでしょ！」

「仮に敷島商業の生徒の半分が男子として、校内の四分の一が男子生徒になるわけで」

「ちょっと嫌ねえ」

「相当嫌だよ。何のために女子高選んだかわかんなくなる」

そこへ、遅れてきた立花梨音と柏原桃花がやって来た。

「おっす諸君、おはようー」

「コラ、誰を捕まえて諸君だとー、えー、オイ！」

「いでででで！　顔をつねるのだけはやめー！」

「で、桃花、話なんだが……」

「これだよね、美月ちゃん。掲示板の、あれ」

「そうそう。男子と共学になるかも、というお知らせだ。まだ本決まりではなさそうなんだがな」

「なんとか防ぐ方法は……ないの？」

「あー、ＯＧ会がね、いま、あっちで署名集めていて、敷島商業と合併反対、という内容で、県議会や県教委に請願や陳情を行うらしい……」

「あ……室山工業高校もやってるらしいよ、反対署名」

「梨音、その情報、どこで？」

「知らなかったのか？　わたしのお父さんや、霜田さんたち、みんな室山工業高校卒業だよ。ちなみに、わたしのお父さんは電気科、霜田さん兄弟は、機械科かな。ほら、夏の高校野球で、うちのチア

部やブラスバンド部が友情応援している関係で……」
「なるほど」
「貴重な情報、どうもありがとう、さっきは済まなかった」
「じゃあ、沙織に美月も一緒に、署名しに行こうぜー」
「よっしゃー！」

室山県立敷島女子高等学校の玄関前には、「合併反対！」のプラカードと共に、記帳台が設けられた。生徒たちが群がって、反対署名をしている。ＯＧや教職員組合の人たちが、メガホンで呼びかけている。

「えー、皆さん、今回の合併騒動は、我が校存亡の危機です。何としてでも室山県議会で反対の議決が得られるよう、努力いたしましょう……」

署名を終えた、高槻沙織、服部美月、立花梨音、柏原桃花の四名は、昇降口に向かって歩き始めた。

「なーんか、大変だね」
「朝から、メガホンって」
「つーか、敷島商業と一緒にされると、何かしゃくだなあ」
「テレビ局も来てたねー」
「室山県立敷島総合高校かあ……男子が入って来るのねー」
「ねえねえ美月ちゃん、商業は男子の人数少ないんですか？」
「まあ、若干名だけどな」
「ううう、気色悪い」
「水泳の授業を想像するだに気色悪い」
「や、やめろ。卑猥な想像もするな！」

◇　◇　◇

帰りのＨＲの時間。なにやら、紙の束を抱えて、相川杏子先生がやってきた。どうやら、例の反対署名の用紙らしい。

「おはようございます。今日は、大事なお知らせがあります。一部のクラスメイトの皆さんには、今朝、校舎の外でもう既に反対署名を書かれた方もいるかと思いますが、敷島女子高等学校は、敷島商業高校と合併の上、男女共学の敷島総合高校になる予定です。九十年続いた敷島女子高等学校の伝統を守るために、父兄の皆さんや、友人、知人の皆さんに、是非署名に協力していただきたく、ここに用紙を持って来ました。

これを集計して、県議会や、県教委に届けますので、用紙を紛失しないよう、気をつけて持って帰ってください。わたしも敷女のＯＧなので、何が何でも合併は反対です。前の席の人から順番に用紙を回しますので、一人五部ずつ持ち帰ってください。用紙のコピーは自由です。なお、提出期限は、三週間後の金曜日です」

――下校時、夕暮れ時の葱北本線、敷島駅前で。

同じく香枚井に住む、チア部の先輩、長沢千秋が、高槻沙織の電話に連絡を入れた。なんでも、署名をする男子や近隣住民、それに室山工業の保護者とＯＢが後を絶たず、人手が足りないそうだ。すぐに来てくれとの話だった。

「今日は、チア部やブラスバンド部の様子を見に行こう。まだ署名活動しているみたいだから、どうする？」

「そうだな、室山工業高校は、葱州長坂（ぎしゅうながさか）だから、じゃあ、今日はこっちの敷島駅だね」

「さて、チア部はチア部として、わたしたちは、誰に署名を渡すか

だが……梨音、決めた？」
「そうだなあ、電気工事士の組合とか。ナサパニックの関係者とか、電力会社とか」
「桃花は……室山放送局……かなぁ……」
「公営放送、それは強力ね！」
「わたしはどうするかなー。室山県和菓子業同業組合とか……」
「それも組織力としてはすごいと思う……」
「沙織には、とっておきの人がいるじゃないか。九十歳の元祖パティシエ！」
「んー、全国洋菓子同業組合なら、何とかなるんじゃないかなぁ」
「全国！　でも、何だかあのペース見てると、男女共学に賛成しそうだしなー」
「それはお爺さんに限っては、ないない。男女、席を同じうせず！で育ったから」
「これまた、随分お堅い教育だなあー」
「あ、もうじき電車来るよー、乗ろう、乗ろう」

『三番線の電車は、快速、大牧行きが、六両で参ります。停車駅は、岩崎、室山、志賀原、葱州長坂、香枚井、椎瀬、新芝草、吾野、楠葉、麦野原以降の各駅に停まります』

◇◇◇

一方、こちらは、県立敷島女子高等学校に応援してもらっている、葱州長坂駅近くの、室山県立室山工業高等学校。伝統的に、高校野球のチアガール、ブラスバンド部の応援をしてもらっている関係上、野球のライバル校、室山県立敷島商業高等学校との合併には、誰もが反対している様子だった。

敷女の乙女たち数十名が記帳台に工業高校生を迎え、そして両校

の先生方は、こちらもメガホンを持って、署名への協力を呼びかけているところだった。また、チア服に着替えた数名は、ポンポンを手に、いままさにチアリーディングのパフォーマンスを行っているところだった。署名担当の、長沢千秋先輩は、制服で、臨時の記帳所にいた。

「署名お願いしまーす……って、おお、沙織ちゃんたちか。来てくれてありがとう」
「いえいえ、いつもお世話になってますからー」
「いいえー、いつもお世話してますから〜」

バシッ！

「梨音、うるっさい！」
「いてーなー、沙織！」
「でも、梨音ちゃんは、署名をパパが運搬してくれるんだよね、ボランティアで」
「もちろんです！」
「助かるよ、心強いよ、梨音ちゃん」
「ありがとうございます、先輩！」

そうして、敷島女子高等学校、家庭科部四名を加え、チアリーディング部、ブラスバンド部、そして室山工業高等学校の数少ない女子三名とともに、「室山工業高等学校の生徒の皆さん、署名お願いしまーす」というかけ声をかけていたのだった。現場は突然の女子襲来に色めき立った。

「おいおい、何の騒ぎだ」
「なんでも、来年から野球部のチアリーディングやブラバンが、なくなるかも知れないってーんで、反対署名集めてるらしいぞ」

「聞いたところによると、なんでも敷島商業と合併するらしい」
「これは反対しねえとな。おい、お前らも来ーい！」
「なに？　敷女の学校が総合高校になると、応援に来られない、だとー？」
　まるで、神社仏閣で、お守り売り場の巫女さんに集まる参拝者のような様子で、約一千名の男子が記帳を済ませ、謄写ファックス刷りの署名簿を受け取るのだった。
「はーい、順番に並んでくださいね！　あと、追加の署名簿は、後ほど工業高校の先生が回収しますので、きちんと持って帰ってくださいね」

◇　◇　◇

——三週間後のある朝。
　一台のワンボックスカーが、室山県立敷島女子高等学校の正門に到着した。たちばなデンキのクルマだ。玄関前で待っていたのは、相川杏子先生ら、教職員と、高槻沙織、服部美月、柏原桃花だった。
……なぜワンボックスカーなのか。それは、服部宝珠庵、たちばなデンキ、高槻洋菓堂、それに公共放送・室山放送局による、大量の反対署名を載せているからだ。段ボール箱にして、数個はあるだろうか。
　クルマからは、立花梨音と、その父、功武が降りて来た。
「どうも、梨音の父です。ご無沙汰しています」
「杏子先生、おはようございます！　高速道突っ走って、署名、持って来たよー！」

「立花さん、おはよう。まあ、こんなに！」
「美月い、段ボールが重くて、わたし、腰が痛くなったよー」
「お前はお婆さんか！」
「いいから手伝ってくれよん、重いんだから。ささ、みんなで荷物おろしてー」
「えー、か弱き女子に向かって！」
「念のため、わたしも、一応女子なんですが……沙織さん……」

立花功武が、杏子先生に向き直って挨拶した。

「これが、私共の総意です。一箱に千五百枚は入っていますので、十名書いたとして、六箱で、約九万名分の署名が入っています。どうぞ、ご査収願います」
「まあ、そんなに……」
「はい、高槻さん家の洋菓子組合、服部さん家の和菓子組合、柏原さん家の室山放送局、霜田さん家の鉄道会社と室山県タクシー業同業組合、室山県立室山工業高等学校、それから、私どもの電気工事業関係の皆さん、それぞれ共学に反対してくださいました」
「校長、お聞きになられましたか？　九万名ですよ！　この子たちの人脈ってなんて素晴らしいのかしら……」
「校長の松井です。この度は何と御礼申し上げて良いかわかりません。誠に恐縮で、ご尽力に感謝申し上げます」
「いえいえ、そんなにかしこまられても……」
「有効に活用させていただきます。学校長表彰をしたいぐらいですよ、ええ」
「今後とも末永く、この子たちをよろしくお願い申し上げます」
「わかりました、この度はありがとうございます」
「では、わたくしは電気工事の仕事がありますので、これで。こら梨音！　ちゃんと勉強しろよ！　もし、なまけてたら承知しねえからな！　では、わたくしはこれで」

「親父ぃ……」

かくして、全校生徒の尽力と、彼女たちの父兄の尽力によって、室山県立敷島総合高等学校の設立は見送られることになった。

◇　◇　◇

「あーあ、反対しなきゃ良かったかなぁって」
「なんだよ、桃花、今更、残念そうに」
「ううん、共学だったら、また違った楽しみがあっただろうな、ってお話」
「なるほど。じゃあ、女子高は彼氏を他校の生徒の中から探さないといけないからねー」
「うん……」

第六話　いろんなイベントがやって来る！

（６—１）衣替えがやって来る！

衣替えと言っても、敷女の場合は、単にセーラー服の上を着ずに、代わりに、半袖のカッターシャツで過ごすだけ。スカートが少し生地が薄めの夏用になるだけ。私立高校のように、上から下までコーディネイトされた、専用の「夏服」というものは、この学校には存在しない。

学年で色違いのスカーフの代わりに存在するのが、徽章の七宝焼きの色表示だ。胸元の徽章だけを頼りに、先輩か後輩かを判断する。

また、クラス番号の徽章には、情報処理科は、Ｉｎｆｏｍａｔｉｏｎの「Ｉ」が、家政科はＨｏｍｅの「Ｈ」が、普通科はＧｅｎｅｒａｌの「Ｇ」という具合に付いている。沙織や美月たちは、「敷女・普通科Ｇ・２組」であり、先輩と色違いになるわけだ。三学年が赤、沙織たち二学年は緑、水谷啓子たち一学年は青、という色分けになる。

以前、実施されたのが、スカーフをキャビンアテンダント風にアレンジして、首に巻いて、横に流す案だ。但し、これも本格採用されなかった。なぜなら、クラスメイト同士引っ張り合いこしていて、首が絞まってしまう事故があったため、これも見合わされた。

後は、上履きのゴムの色と、体操着の色……ぐらいだ。後は、半袖のカッターシャツなので、先輩後輩を見極めるのは、慣れないうちは至難の業だ。やがて、慣れて来ると、徽章の色で簡単に判別できるようになる。

放課後、家庭科室で——

「衣替えしたねえー」
「これで、梨音がこれ以上痴女になる可能性がなくなった」
「やれやれだねえー」
「ところで梨音、どこ行ったのかな」
「気にせず、タルトを作ろう。待ってたら時間なくなっちゃうよ！」

ガラリと扉が開いて、立花梨音がやって来た。見ると、スカートの丈が短い。

「諸君、おまたせー」
「おそようー、って言うか、何ですと！」
「夏用のスカートを？」
「へへーん、折って来ちゃった」
「どんなセックスアピールなんだよ……」
「先生ー、立花さんがスカート折って来ましたー」
「まあ、何ですって？」
「美月ぃ、先生にチクるなんてそんな……」

やがて、被服室で、貸し出された短パン姿になった梨音は、アイロンで折りじわを、ちまちまと直すのだった。先生が沙織たちに言った。

「あの子、普通科よりも、家政科に進んだ方がよさそうねえ」
「そう思います」
「どう見ても、普通科向きではないですし……」
「でも、コンピュータの授業だけは高得点ですし……」
「ならば、情報処理科だけど」

「でも、クラスが分かれるのは嫌だし……」
一同「うーむ……」
　しばらくすると、立花梨音が、被服室から出て来た。

「諸君、お待たせー」
「お前には学習能力っつーもんがないのか！」
「本気で心配させやがって、こんにゃろ、こんにゃろ！」
「もう、わたしは慣れた」
「先生も、この展開には、もう飽きました」
「み、みんなああああ！」
「あー、はいはい、あんたも支度して、スイーツ作るの手伝って」
「わかりました皆さん……」
　昨晩から冷蔵庫で寝かせたタルト生地を伸ばして、型に敷き込む。生地に重石を乗せ、から焼きしている間に、アーモンドクリームを作り、から焼きが終わったら、重石を取り、アーモンドクリームを生地に入れる。そうして、しっかりオーブンで焼いてから、取り出す。適度に冷めたら、全体にラズベリージャムを塗り、ラズベリーを敷き詰めれば完成だ。

「できたぁ！」
「さすがは沙織、本職だな」
「さて、問題は、どうやって取り分けるか、なんだけど」
「トルテカッターがあるから、八等分が、ちょうどいいんじゃない」
「じゃあ、そうしよう」
「今回は、チーズ入ってないから、わたしは安心した」
「じゃあ、ここで、パルメザンチーズの粉末をまぶして……」
「うおおおい！　それじゃあキッシュになるだろう！　チーズは苦手だ！」

「へへん、冗談だよ～ん」
「はー、お前の冗談はシャレに聞こえんから、心臓に悪い……」
「冗談か真面目か、分からない時があるから、梨音ちゃんって、ある意味怖いねー」
「あいつは油断ならん女だ……」
「じゃ、じゃあ、みんなでいただきましょうか！」

一同「いただきます」

「紅茶が合いそうだな、桃花、お茶入れてくれる？」
「うん、持ってくる！」
「わたしも手伝うよ、桃花ちゃん」
「ごめんね沙織ちゃん」
「いいって、いいって！」

（6―2）実は、今日は多い日で重い日で痛い日なのだ……

六月……春と夏の間を交互に行き交う季節。お陽さまは、照ったり曇ったり……。もうじき衣替えの季節だというのに、ぐずつく空模様に、体調を崩す生徒が後を絶たない。中には、女性特有の症状で、鎮痛剤をもらいに来る生徒もいる。ここは、県立敷島女子高等学校の、保健室。ただでさえ頭の痛いシーズンだ。

「おはようございますー」
「あら、いらっしゃい。立花さんじゃないの、まあ珍しい」
「藤井先生、わたし、今日、ちょっと、あれで……」
「まあ、つらそうね。顔が真っ青じゃない……」
「痛み止めをください、少し横になりたいっす」
「はい、どうぞ、ゆっくりしていってね」
「そ、そうもゆっくりしてらんないんですよ先生」

「まあ、何で？」
「授業に出ずに、家庭科部だけ出ていると、なんか、サボってるみたいで」
保健担当教諭、藤井奈?子は、立花梨音を寝かしつけると、こう言った。
「お友達や担任の先生に言っておくから、ちゃんと帰れるようになるまで、ゆっくり横になりなさい。何なら、眠ったっていいわよ。さっき見たら、足許ふらふらじゃない。なんなら、代わりに、鉄分ドリンク買ってくるから、三百円出しなさい」
「はあい……」

◇◇◇

一方、こちらは教室。
「ええ、そうなの、相川先生……」
「病気ならば、仕方がないですわ……藤井先生」
「じゃあ、よろしくお伝えください」
「了解です。おーい、そこの、香枚井登下校組！」
「は、はいっ！」
「実はね、立花さんが、とってもつらい日で、多くて、重くて、痛いの。おまけに、顔面蒼白で。帰るまで保健室ね」
「本当ですか？　梨音が生理痛で顔面蒼白？」
「珍しいこともあるもんだ」
「そりゃあ、あれでも一応、女の子なんだから、あってもおかしくは……」
「梨音の世話ですか？」
「というわけでみんな、お昼ご飯と、帰りはよろしくね」

「わかりましたー」
「で、余りにも様子がおかしい場合、ご両親に連絡するから、私に教えて頂戴ね」
「はーい」

◇　◇　◇

――昼休み

「それにしても、梨音に、生理が酷い時があるとか、生理で調子悪い時があるなんて、知らなかったよ」
「わたしも、近所に住んでいて、よく遊ぶけど、おくびにも出さなかった」
「我慢しきれなくなったかー、ついに」
「とりあえず、購買では、全員パンにしよう。で、梨音にも買って帰る。牛乳や鉄分飲料も忘れずに」
「了解！」
「何パンがいいかな」
「意外と、梅干しおにぎりが良かったりして」
「学食に来られないほど酷いんなら、栄養価の高いものを」
「ねえ、はっとり、ドリンクどうしよう」
「ドリンクなあ……意外と、タウリン二〇〇〇ミリグラムとか効きそう、かな」
「二十四時間戦えそう！」

◇　◇　◇

保健室のドアを開ける友人三名。ドアをノックしてから、おそるおそる中に入った。そして、引き戸を閉める。

「梨音はどこだ」
「おーい、梨音ちゃん」
「ここでもなさそうね」

カーテンをめくって確かめるが、いない。窓際のベッドまで行ってようやく梨音の姿が見えた。珍しく、声も出さずに、横になっている。余程つらいらしく、額に腕をかざして、陽の光を遮っている。パンを窓際に置く音と、ドリンクを袋から出す音で、梨音は少しうっすらと眼を開けて仲間の方を見た。起き上がろうとする梨音を、全員が制する。

「梨音！　寝てなきゃダメだろ？」
「ん、んあー？　み、みんなー？」
「梨音ちゃん、大丈夫？」
「お前、調子悪いんだろ？」
「心配してたよ……」
「お、お昼か……あ、ああ、サンキュ、サンキュな……みんな……」
「寝ながら、おにぎりとお茶でまったりすべし！」
「ああ、悪いなあ……」
「どう？　今日はもう歩いて帰れそう？」
「うーん、放課後になんなきゃわかんない……」
「最悪の場合は、紅電タクシーね！」
「沙織！　なんだそのタクシーチケットの束は！」
「へへーん、霜田さんにもらっておいたものでーす」
「じゃあ、タクシーチケットと、高速道路料金か……」
「わ、悪いよ、沙織ちゃん……」
「うわー、倒れそう、起き上がっちゃダメ！」

◇　◇　◇

「やはり、早退させるべきですかね、藤井先生……」
「そう思います、今からでも、お医者さんに連絡取ってみようかと。なにせ、デリケートな問題なので……」
ヒールのかかとを鳴らし、相川先生が保健室に入って来た。
「立花さん……梨音ちゃんはどこー？」
「相川先生、こっちですー」
「あ、みんな揃っていたのね。この子、今から婦人科のお医者様にかけるので、今から帰宅させます」
「先生、紅電のタクシーチケットあるんですが」
「あら、高槻さん、使っていいの？」
「もらいものですし、後で返してもらえればいいかなって」
「悪いわね、ごめんなさい……さ、立花さん、起きて」
「は、はい……」
「立花さん、足腰立たないじゃない！　よくここまで放っておいたわねー」
「す、すびばしぇん……」

昇降口には既に、紅電無線タクシーが停まっていた。相川先生と、高槻沙織が、肩を貸してやってはいるが、梨音は、なかなか思うように歩けない。

「済みませーん、この子を、室山市香枚井一丁目の、香枚井レディースクリニックまで連れて行ってください。はい、高速道路で。料金とタクシーチケットはここにありますので……お願いしますね、運転手さん」
「しかしまあ……香枚井とは遠いねえ……室山北インターだろ？電車も無理なのかい？」
「そうなんです」
「じゃあ、お預かりします」
「お願いします！」

◇　◇　◇

六限目も終わり、みんな一様に溜息をついている、二年三組の教室。

「じゃあ、部活の人も程々にして、何もない人は、寄り道せずに帰宅してください」

「起立、礼、解散！」

まるで、下校のタイミングを見計らったように、携帯にメールが着信した。

「あ、携帯だ……誰からだろう……梨音？」

「わたしのところにも……ねえ、先生のところにもメール来てませんか？」

「あ、何か届いているみたいだけど……」

『皆さんへ　立花です。お昼はご迷惑をおかけしました。さて、病院で診てもらったところ、何の異状もなく、思い起こせば、ただの食べ過ぎとわかり、重ね重ね申し訳ないです。昨日の夜、隼人そば屋さんでの、ざるそば大食い大会に出た所為でした。実は、大ざるで、十五杯食べたので、申し開きができません。ごめんなさい、本当にごめんなさい　梨音』

「まあ、何ですって？　食べ過ぎー？」

「ただの食べ過ぎ……腹痛……ぷぷっ！」

「梨音……許さん！　どうもおかしいと思ったんだ！」

「しかし、顔面蒼白、足腰立たなくなるまで食べるってどれだけ……」

「お邪魔します……立花先輩が、どうかしたんですか？」
「あ、啓子ちゃん……実はね、梨音が、昨日、大食い大会に出て、食べ過ぎたために、保健室で寝ていたってこと……」
「ぷっ……た、食べ過ぎってどれだけ！」
「水谷さん、ああいう先輩見習っちゃダメよ。大食い大会で大ざる十五杯」
「ぶっ、大ざる、十五杯って、あはははは－」
「笑い事じゃないよ－」
「マジ心配したのに－」
「ここは、教育的な指導が必要ね！　今に見ていらっしゃい！」
「私たち、香枚井に戻りますが、何か梨音に伝えておくことはありますか？」
「そうねえ、香枚井通学組のみんなから、あたしが本当に、心底カンカンに怒っていた旨、伝言してもらえるかしら？」
「わ、わかりました、杏子先生！」
「先生の、その微笑みが怖い……」

◇　◇　◇

――翌朝

「おはよ－」
「あ、おはよう」

ここは、県内屈指の進学校、室山県立敷島女子高等学校。だが、その職員室内では、朝っぱらから、生徒を怒鳴り散らしている相川杏子教諭と、怒鳴り散らされている生徒、立花梨音がいた。
「なんですって？　腹痛？　食べ過ぎ－？　あなたねえ、もう三～四年で大人になるのよ！　自覚を持ちなさい、自覚を。なになに－、

うちの生徒が、前日、ざるそばをたらふく食べて、授業に出られないぐらいお腹を壊し、生理痛と間違えられた挙げ句に、早退しました……って、どのツラ下げて上司に報告するのよー！」
「す、済みません……」
「あたしのことはいいわよ、この際。でも、本気で心配してくれた仲間に、申し訳ないでしょ、今から行って謝って来なさい！」
「失礼しましたー」
「……ったく、しょうがないんだから！」

◇◇◇

二年三組の教室。いつもの仲間が集う中に、梨音が泣きながら入って行った。
「ごめえええん、みんな、昨日は本当に心配掛けて……ごめんよー。沙織、これ、タクシーチケット返すから、受け取ってー」
「え、ええ。どうしたの、急に。ひどく取り乱したりして……」
「あのその……反省しています……」
「あんまり無茶ばかりやってると、そのうち、友達なくすよー」
「昨日は本当に心配したよ」
「ご、ごめんなさい」
窓辺の陽だまりの中、クラスメイトにひたすら詫びを入れる、立花梨音でした。

（6－3）家庭科部、スイーツ食べ歩き！

家庭科室に集まった、全学年の生徒。三年生はもっぱら受験勉強なので、それどころではなさそうだった。そこで、顧問の柴島祥恵（くにじま・さちえ）先生の発案とは……。

「えー、七月最初の行事は、このスケジュールに従って、一、二年生全員でお店めぐりをやります。参加費はかかった実費のみです。皆の実家でご商売をされているお店を巡ってスイーツを堪能しようというわけです。出発地は、敷島駅から葱北本線を北上して新芝草駅……そこで乗り換えて、紅電紅葉野駅から。そこから紅電沿線に海浜神崎まで南下します。わかりましたかー」
「はーい」
「それぞれの駅近くにある部員の実家のスイーツショップなどに立ち寄ります。なお、これは、学校の行事なので、集合は制服でお願いします」

◇◇◇

「……そっか、家にも先輩方が来るのか」
「どうしたの、はっとり？」
「うちが出せるスイーツって、餅か、水ようかんなんだよね……沙織んちは？」
「そうだねえ……うちはバターロールクッキーぐらいかな。後は生ものしかないよ」
「いやはや、ハイカラで、お洒落だなあ……チーズだけは勘弁な」
「美月んちだって、お餅美味しそう！」
「うちは、ナサパニックのヘルシーオーブンがあるぞ」
「お前んちは電器屋だろ？　論外だ」
「ご飯をパンにできる機械だってあるぞー！」
「それ、いいかも！」
「いいなあ、みんなお店持ってて……」
「そだねー。桃花んちは公共放送だもんねー」
「『あすの料理』の料理本販売とか！」
「お父さんに訊いてみる」

「せ、先輩！」
「やあ、水谷啓子ちゃんじゃないか。どした？」
「私も、香枚井地区なんです。フルーツショップやってます。シエスタ香枚井で、水谷青果を……」
「忘れるところだった、ごめんごめん」
「スイカか、プリンスメロンぐらいなら、何とかなるかと……」
「スイカにメロン！　いいねえ！」
「持つべきものは、後輩だなあ」
「香枚井登下校組は決まりましたかー」
「はーい」

◇◇◇

ある日。県立敷島女子高等学校、家庭科部は、スイーツ食べ歩きを開始していた。部活の顧問の先生が、皆を誘導する。先ずは、新芝草駅前のベーカリーで待ち合わせ、ラスクを食べる。次に、新芝草駅に徒歩十分で隣接する、紅電紅葉野駅前の繁華街にある芋羊羹のお店で、芋羊羹とお茶をご馳走になる。

そして各駅停車に乗り、紅電榛名天神駅前の服部宝珠庵に着いた一行。今度は特製水羊羹だ。細い竹筒に入っていて、ちっちゃな栓を抜いて、片側から吸い込むと、きゅーっ、ぽんっと水羊羹が口に入っていく仕組みだ。

「服部さん、これ、美味しい！」
「買って帰ろうかしら……」
「くせになりそう……」
「はい、喜んでいただければ光栄です、先輩」
「このお餅も最高です！」
「寛永七年創業のお店だからね、歴史が違うんだよー」

「さすがは江戸時代から続く味ね、感心したわ」
　服部宝珠庵の、服部美月は得意気だった。そこへ家庭科部、顧問の柴島祥恵先生がやって来て、みんなに諭した。
「いいですか、まだ三軒目ですよー！　甘い物食べ過ぎてデブになんないようにね、適度なところでお土産にして持って帰りなさい」
「はーい」
「次は、紅電香枚井駅ですよー！」
「ごちそうさまー」
「さて、行くか」

　紅葉野電鉄の榛名天神駅（はるなてんじんえき）に向かう、ぞろぞろと連なって歩く、白いワイシャツ女子の集団は圧巻だった。普段は制服で団体行動と言えば、修学旅行程度だからだ。電車に乗り、榛名天神駅から一駅、室山市の北の玄関口、紅電香枚井（かひらい）駅に着いた。

　駅前の複合ビル「シエスタ香枚井」に到着した一行。まずは、水谷青果店を目指して歩いて行った。そこでは、薄く人数分に切りそろえられ、試食用の紙のお皿に盛られた、本場の静岡メロンと、山梨の巨峰ぶどうが提供されていた。店にはおばさんが出て来て、皆に振る舞った。

「敷島女子の皆さん、水谷青果店へようこそ！　啓子の母です。今日は採算度外視で、本場のメロンと巨峰を食べて行っていただきます！　ささ、どうぞ中へ」
　乙女たちは、目の前に出されたメロンに、ハートを射貫かれていた。

「静岡のマスクメロンだってさー！　どうしよう桃花！　うっひゃあー！」
「ちょ、ちょっと落ち着いて、梨音ちゃん！」
「沙織、メロンって言っても、薄いなあ……向こうが透けて見えるぞ……」
「まあ、四十分の一だからね、夢のないこと言わないの！」
「うん！　ぶどうがうまい！」
「ぶどうって、こんなに甘かったっけ」
「アメイジング！」
「梨音……お前、知ってる単語それだけだろう」
「てへー、ばれた？」

次に、シエスタ香枚井の中にある、おなじみ、高槻洋菓堂に向かった。

「敷島女子の皆さん、沙織がいつもお世話になっています。ここで食べていただくのもちょっと場所がないので、おひとりおひとりに、バターロールクッキーをお渡ししますので、どうぞお家で召し上がってください」
「店長さん、そこのシフォンケーキも買っていってもいいですかー」
「どうぞどうぞ！」
「スイートポテトくださーい」
「あ、ありがとうございます！」
「お父さん、いつもと違って上機嫌ね……」
「久々に、女子高生の大群を見たからじゃないのー？」
「梨音、うるっさい！」
普段滅多に他人をぶたない沙織が、怒って梨音の頭をはたいた。
バシッ！

「おわ、痛たあぁあー、沙織が怒ったー、珍しぃー」
「これ無料じゃないんだからねっ！　定価で一袋、六百円するんだからねっ！」
「おおー、出血大サービス！　……って、ぶたれたわたしが出血しそう」
「じゃあ、これは帰ってからのお楽しみだねー、梨音ちゃん」
「ち、チーズケーキじゃなくてほんっとうに良かった……」
「じゃあ、はっとり、チーズケーキひとつ持って帰る？」
「やめろ、いらん！　ジンマシンが出る！」

シエスタ香枚井を後にした一行は、その後、海浜神崎までの部員の店を訪ね、あらゆる種類のスイーツを制覇して、もう、甘いゲップしか出ない。紅電敷島駅近くの、県立敷島女子高等学校、家庭科室に戻った一同……。

「うえー、疲れたー、だりぃー、あちぃー、胃薬が欲しぃー」
「だれるな、梨音！」
「はっとりんちの水ようかん、あずき嫌いなわたしでも食べられた……」
「あ、そっか、それは良かったな……」

顧問の先生が、ドサッ、ドサッと本を用意した。公営放送の「あすの料理」のスイーツ特集の本だ。ちょうど四十冊あって、ひもで束ねてある。

「えー、これは、二年の柏原さんのお父さんが、ポケットマネーで勤務先の室山放送局から買って来て下さったスイーツ本です。『あすの料理』という本です。皆さん、これを見て、更に腕に磨きをかけてください。柏原さんに拍手！」

パチパチパチ……。

「柏原さんのお父さん、室山放送局だって？」

「はい、そうです、ラジオでニュースとか読んでます」

「知らなかったあー」

「はい、拍手されると、ちょっと照れますねー」

「うちは、受信料払ってたっけ……」

「え？」

「いやあ、何でもない！　払ってる、払ってるとも！」

立花梨音は、全力で否定した。それから、顧問の先生が言った。

「それでは、暗くならないうちに下校してください。夜道には、不審者がいないとも限らないので、気をつけて帰ってね」

◇　◇　◇

さて、下校時、四人連なって歩く香枚井登下校組。紙製のショッピングバッグには、あらゆる種類のスイーツや果物や煎餅、餅や書籍に至るまで揃っていた。みんな、少し重そうにしている。そこへ、背後から呼び止める声がした。

「先輩ー！」

「お、何だ何だ？」

「あれ、水谷啓子ちゃんじゃない、どうしたの？」

「一緒に帰りましょう、私も混ぜてください」

「あ、ああ、いいとも。聞かれて恥ずかしいことはないもんな」

「大歓迎だよー」

「でも、たまには猥談も少しは混じるけどねー」

「梨音は黙っちょれ！」

バシッ！

「痛い……わたしばっかり……もしかして、ぶたれやすいアタマのカタチ？」

「違う！　ぶたれるようなことばかり言うからだっ！」

「ところで啓子ちゃんって、刈羽台（かりばねだい）だったよね、お家が」

「はい！　急行に乗られている皆さんとは、咲花台（さっかだい）で普通電車に乗り換えなので、そこでお別れでーす」

「私も普通電車に乗り換えようかな、アホ三名は放っといて。手短に済むからな」

「ええー！」

「美月、わたしはともかく、アホ属性をつけるのは、梨音ちゃんだけで充分だよ」

「いいえ、沙織ちゃんも、梨音ちゃんもさすがに可哀想だよ……」

「冗談に決まってるだろ？　ささ、いつものコースで帰るか、仕方がない」

「いつものコース？」

「あ、啓子ちゃんは知らなかったんだよな。沙織が香枚井三丁目、梨音が春名坂小学校前、桃花は春名台団地だ。そして、わたしが、榛名天神駅前まで紅電バスなんだ」

「そうなんですかー。わたしも、香枚井登下校組に混ぜてください！」

「いいよ～」

「賛成！」

「ありがとうございます！」

水谷啓子が、ぺこりと頭を下げた。

「あの、啓子ちゃん、良かったらうちの洋菓子店とあなたのお父さ

んが、商談してみない？　メロンやいちごのいいのが無くて困っていたところなのよー」
「はい、協力できそうなら、ぜひ」
「わたしん家も、いちご大福作ってるから、お願いしようかなー」
「はい、喜んで……」
「待って！　和菓子でしょ？　大福にいちごなんて邪道だわ。ケーキにちまっと乗っているのが本来の姿というもの。和洋折衷にも程があるわ、あり得ない！」
「いや待て沙織！　そんなに興奮するな。洋菓子にいちごが使えて、和菓子に使えないという理屈は、何だかおかしいぞ？」
「最近出来た商品でしょ？　水っぽくなって、ああ、いちごが可哀想……」
「和菓子に対する偏見は、他の追随を許さないなあ……」
「わたし、どっちも賛成です！　いちごはどんなスイーツにも合いますから、どうか、喧嘩しないでください、先輩！」
「ご、ごめんね……ついいつもの癖で……」
「ありがとうな、止めてくれて！」
「てへっ」

◇　◇　◇

七月中旬……。気温はまるで体温か、微熱レベル。暑い……暑い……。ここは、県立敷島女子高等学校、家庭科室。みんなの部室だ。部室には、いつもの香枚井登下校組しかいなかった。教室の天井からぶら下がるテレビで、室山地区大会、夏の高校野球の地区大会の試合を観ていた。
「ところで皆の衆！」
「はいー？」
「じゃーん、こんなふうにアレンジしてみましたー」

「ど、どうしたのよ、そのスカート！」
「またかよ……」
「今度は、改造なんかしていません。思い切って大胆に折ってみました ー」
「半分に折る！」
「スカートを半分に折る！」
「また始まったね……」
「おい、梨音、いますぐその安全ピン外さないと、どうなるか分かってるんだろうなあ」
「さ、殺気……」
「早く安全ピン外せー！」
「あーもー、うるっせえババアだなあー」
「誰がババアだと、コラ！」
「いたたたたー、ヘッドロックはやめてええー」
「とっとと、ババア発言取り消せ！　ったく、服装を元に戻せ、この露出狂が！」
「あうー、はうー、わかりました美月さん、取り消しますうー、戻します」
「ふんっ」
「ぜいぜい……はあはあ……解放された……」
「それから梨音、ジャージの下を履け。そして、そのスカートの折りじわを、このアイロンで伸ばせ」
「やだもう、余計に暑いじゃんかよー」
「やかましい、自業自得だ！」

梨音は、家庭科準備室の鍵を内側からロックすると、折ったスカートを脱ぎ、自分の短パンを履き、ロックを解除すると、また部室の方へ戻って来た。アイロン片手に。

「ひとーつ、ふたーつ、みーっつ……あーん、なかなか終わらない

ー」
「プリーツが多いからな、うちの学校のスカートは」
「罰ゲームにはぴったりね」
「梨音ちゃん、手伝おうか？」
「いいや、これはふたりでアイロンかけたら、ややこしくなるから、お気持ちだけで結構ですぅ」

——一時間後……。

「や、やったー！　終わった終わった……って、暑いんですが……」
「とりあえず、準備室でスカート履きなよ。それから、スイーツね！」
「冷蔵庫のもの、冷えてるかなぁ……」
「お待たせー。履き替えて来た！」
「じゃあ、スイーツのお披露目としますか」
「だな」
「ですね」
「ですね……って、啓子ちゃんも？」
「はい！」

高槻沙織は、オレンジ味のソルベを用意してきていた。服部美月は、普段使い用の、プラスチック容器に入った水ようかんを持ってきた。そして、気になる水谷啓子のデザートとは？

「ドリアン……」
「！」
「お願い、袋は開けないで！」
「暑い上に臭いなんて！」
「ふふ……大丈夫ですよ。ドリアンは冗談です。パイナップル丸ごと持って来ましたー」

「さすがは啓子ちゃん！」
「輸入果実も扱ってるのよねー」
「やっぱ、原材料握ってる子は強いわー」
「そういえば、わたしもー」
「どうした、梨音？」

準備室から出て来た梨音は、例の「ご飯をパンに出来る機械」を持って来た。ほかほか湯気が立っているみたいだが、蓋を開けていないので、様子が分からなかった。

「はい、そうでやんす！　では、オープン！」
「ナサパニックのお店でも扱うようになったのね！」
「初めて見た！」
「ご飯をパンに出来る機械でーす」
「そっか……これが噂の……」

機械の中には、しっかりと食パンが出来上がっていた。

「六時間かかんだけどさ、とてもご飯で作ったとは思えませんよね、皆さん！」
「おおー！」
「じゃあ、パン切りナイフで切り分けて……啓子ちゃん、例のあれ」
「いちごとブルーベリーのジャムですね」
「随分用意がいいんだなあ……」

立花梨音は、各人に出来たての米粉食パンを細かく切り分け、渡した。

「はい、さおりん」
「サンキュー」

「はい、美月」
「おお、あんがと」
「はい、ももっち」
「どうもです」
「はい、啓子ちゃん」
「ありがとうございます」
「じゃあ、みんなで、いただきます、するぞ！」
「いただきまーす」

「美味しい……って、何だ？　やけにテレビが騒いでるぞ」
「ははーん、九回の裏、室山工業の攻撃で、満塁だねえ」
「あと二人かー、微妙だなあ」
『おっと、犠牲フライ！』
「まずは一点！」
『二塁にはサヨナラのランナー！』
「頼む、撃ってくれええ」
『右中間へ！　伸びる伸びる……入ったー！』
「きゃあああああ」
『七対五、打撃戦を制したのは、室山工業でした！　室山工業、県大会ベスト8進出！』
「うーわ、うーわ、また団体で応援に行かなきゃ、だねえ……」
「あ、あの組み合わせ……間違いなく、あの『修身学院』と一緒になるね」
「あー、あれでしょ、薬火野(くしびの)のスポーツ学校だよねえ」
「因縁の対決か……テレビやレコーダーが売れるといいなあ」
「って、また金儲けの話か、梨音！」
「……ま、まあ、とにかく、美味しく召し上がれ」

（6－3）水泳大会がやって来る！

夏休み前のお楽しみは、屋内プールでの水泳の授業だ。しかし、遊びに行くのと違って、授業なので、年がら年中、きゃいきゃい出来ない訳で、泳法の指導から、リレー競技まである。敷島女子オリジナルというよりかは、黒色の競泳用水着を学校から指定されている。三年生は赤のライン、二年生は緑色のライン、一年生は青色のラインが側面に入っている。

保健体育の指導は、高野　寛先生（男性）だ。まだ三十歳代前半といったところ。ソフトボール部の顧問をしている。しかし、脱ぐとすごい。もっこりしているのだ……。夏になれば、ぴちぴちの競泳用水着を履くから余計エロスを感じるらしく、生徒の間では「敷島女子のもっこり野郎」とあだ名されているのは、公然の秘密。

「お前ら、集合ー！　お遊びはこれまでだ、プールから上がれー！」
「はーい」

二十メートル離れた場所で、美月と梨音がつぶやいた。

「もっこりが何か叫んでる」
「もっこり、きゃはー」

二十メートル離れた場所から、高野先生が、美月たちにめがけて叫んだ。

「なんだ服部、立花、何か言ったかー？」

美月と梨音は、ノンノン、といった感じで、首を振り、手を振るのだった。
（ちきしょ、あの地獄耳めが！）
（覚えてやがれ！）

「えー、クラス対抗リレーの代表選手を選ぶ。これから全員、二十五メートルを往復して、五十メートル自由形のタイムを計るので、各々、好きな泳法で行って帰って来い。出席番号順に、五名づつ、八組に分かれてタイムを計る。さあ、ここへ出席番号順に並んで、控えの生徒は、自分の番が来るまでプールサイドで待機」

第二組に、柏原桃花が現れた。

「うわー、ももっち、ふぁいっとー！」

友達の応援に、少し照れながら、ぎこちない仕草で台の上に上がる。

「てへへ」

「位置について、用意……」パアーン！

柏原桃花は、そんなに運動が出来る訳ではなかったが、水泳は別だった。ただし、バタ足、平泳ぎしか出来なかったが……。

「柏原桃花、五十メートル、二分十五秒〇三」

「偉いよ、よく頑張ったよ、ももっち！」

「ありがとう、沙織ちゃん！」

「ねえねえ、梨音！」

「なんだよ、さおりん……」

「今日はあなたと競争よ！　絶対に負けないんだから、わたし！」

「なにおう！　こっちには『超絶バサロ』って泳法があるんだからね！」

「超絶とは？」

「まあ、見ててごらんなさい、なんてったって『超絶バサロ』なんだから」

「超絶って……」

第四組に、高槻沙織と、立花梨音が現れた。
「きゃあああー、高槻さん、ファイト！」
「根性見せたれ、立花ー！」
プールサイドで待機している、服部美月と、柏原桃花。
「梨音のことだから、またあのパターンかもな……」
「あのパターン？」
「去年やらかした、あのパターンだよ」
「ああ、あれ！」
「位置について、用意……」パアーン！
高槻沙織はクロールで息苦しそうにしていたが、立花梨音が、いつまで経っても浮上して来ない。へびのように、身体をくねくねさせていて、ちっとも浮上して来ないのだ。高槻沙織は焦った。
(おかしい、梨音、まだバサロのまま……くうっ、このペースだと遅れる……二十五のターンで……)
次の瞬間、梨音は、プールの壁に頭から正面衝突をして、そのまま動かなくなったかと思うと、肺の中の空気をゴボゴボと吐き出して、やがて、挽き潰された蛙のようなポーズになって、がに股といった、はしたない格好で、ぷかあんと浮かんだ。
「立花梨音、失格！　高槻沙織、三十六秒四〇！」
「おおっ、暫定一位か……やるなあ、沙織……」
「ねえ、はっとり、梨音は？」
「あっちの方で、引き揚げられたみたい……去年と同じパターンで

ね」
「超絶バサロ、真似しない方がいいみたい……」

第六組に、服部美月が現れた。

「よし！　自己ベスト三十五秒台に乗せる！」
「きゃあああー、服部さああん！」
どうやら、服部美月は、女子にも人気があるようだった。
「位置について、用意……」パアーン！

服部美月は、クロールで水を切って泳いでいる。動きに無駄がない。二十五メートルのターンをして、壁を蹴って勢いに乗った美月のタイムは……。
「服部美月、三十五秒五三！」
「おおー！　すごい……」
「ただいまー」
「服部さん、すごいよ。何、スイミングかなんかやってたの？」
「ま、まあね、小さい頃、ちょっと……」
「はっとり！　暫定一位だよ！」
「ありがと。でも問題は決勝戦！　絶対に負けないわ！　今までのはまだ手加減していたのよ！」
「むむっ、わたしだって負けませんからね！」
「沙織ー、だからって、ムキにならないならない……」

◇　◇　◇

二年三組、五〇メートル決勝。第一のレーンから、第五のレーンまで選手が並ぶ。第二のコースに服部美月、第四のコースに高槻沙織がいる。

「位置について、用意……」パーン！

一斉にプールに飛び込み、最初に抜きんでたのは美月だった。しかし、二十五メートルのターンで、ちょっと出遅れた。代わりに抜きんでたのが、沙織だった。熾烈なデッドヒートは、さながら、ベルリンオリンピックの前畑選手とゲネンゲル選手を彷彿とさせるものがあった。もしも、ここに河西三省アナウンサーがいたら「高槻嬢、現在第二位、ガンバレ、ガンバレ、高槻ガンバレ、服部嬢と並んでおります。まるで火の出るやうな大接戦、わずかに一?き高槻リード、高槻ガンバレ、ガンバレガンバレ！」と連呼していたことでしょう。で、結果は……？

「服部美月、五〇秒五五……高槻沙織、五〇秒二三、よって、クラス代表は、高槻沙織に決定だ！」

服部美月は、ゼイゼイ言いながら、ゴールで沙織の方向を向き、ちっ、と舌打ちをしたが、やがて、レーンを越えて来る沙織を見ると、沙織も息が切れていた。

「え、わたし、勝ったの？　はっとりー」
「そうさ。おめでとう。ちくしょ、寸でのところで負けた……多分、あそこのターンで失敗した……」
「そんなことないよ、だって、コンマ何秒差でしょ？」
「わたしはそれが悔しいけど……とにかく、おめでとう！」

と、プールの中でデジタルのスコア表示を見ながら、二人は堅い握手をした。

（６―５）夏休みがやって来る！

「明日からは、夏期休暇です！　皆さん、気を引き締めて勉強しましょうね！」
相川杏子先生が言った。しかし、女生徒はそれどころではなかった。

「夏休み！　夏休み！　夏休み！」
「うるさーい！」
「ねえ、一緒に水着買いに行こう？」
「キャンプセットも捨てがたいね、バーベキューとか！」
「海水浴かー、久しぶりだなー」
「わたしはバイトだね、バイト！　みっちり貯める！」
「おお、働き者！」
「わたしたちは吹奏楽だから、室山工業の応援に行かなきゃ」
「それは熱そうだね、さすがは熱闘甲子園！」

そうして、生徒がわいわい、キャーキャー言っているのを、黙って見ていた杏子先生だったが、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、バンッ、と教師用机の上に、学級名簿を叩き付けると、鋭い目つきで言い放った。

「あなたがた、いいですか？　勉強と両立なさい。それから、不純異性交遊は断じて許しません！　気を引き締めて、遊ぶことばかり考えずに、勉強に励みなさい。わたしなんか、高校生の頃は、難関大目指して夏期講習や自習や宿題に没頭していました。遊んでばかりいると、先生の雷が落ちますからね！　いいですね！」
一同「はーい」
「ではよろしい、日直さん！」
「起立、礼、解散！」
「ふー」
「はー」

各所で溜息が漏れる。夏休みの開放感、そして、日々怒れる杏子先生の呪縛からの解放。明日からは、すべてが自由だ！　そんなクラスの雰囲気。仲良しグループごとに分かれてゆく女生徒たち。さあ、夏休みの始まりだ！

◇◇◇

放課後、家庭科部の家庭科室……。今日は部活動は休みで、その代わり、仲良しグループ同士で、わいわい、キャーキャーと「夏休み、どうする？」という話題で持ちきりだった。ところで、肝心の美月たちは、この夏をどう過ごすのだろう……。

まず、沙織が切り出した。
「ねえねえ、浜辺で海水浴、なんてのはどう？　泊まりがけで、秋津浜で！」
「秋津浜あー？　知り合いいないし……。どうだ、わたしん家の庵で抹茶でも！」
「美月、却下。今は夏よ？　かんかん照りの夏に、着物着て、茶室で抹茶はどうかと思うなあ……」
「言えてるー。考えただけでも蒸し暑そう……」
「そういう沙織は、知り合いいるのー？　秋津浜に」
「うーん、知り合いはいないけど、小さなレンタルコテージならあるよ」
「さ、さすがは金持ち……」
「もう、はっとりは、すぐそうやってー」
「ここは多数決だよ！　この夏、海水浴にしたい人！」
「はーい」
「……なんだ、美月以外は全員賛成だぞー」
「……わ、わたしも水着になるのかー？」

「その通りー。美月が水着。あは、何かの洒落みたい」
「しょうもない洒落は、よしなしゃれ、って、何言わすんだ！」
「じゃあ、全員賛成ね！　じゃあ、明日早速出発！　集合はわたしん家！　時間は、午前8時！」
「ラジャー！」
「はいはい、付き合いますとも、沙織さん……」
「これからシエスタ香枚井で、水着選びしようねー」
「ふー、やれやれ……」

沙織たちがノリノリの中、ひとり溜息をついたのは、美月だけだった。

「せんぱーい」
「あ、啓子ちゃん！」
「わたしも付き合います！　すいか持って行きましょう！」
「おおー、すいか割りかあ！　雰囲気出るわねえー」
「さて、香枚井に帰りますか！」
「イエーイ！」

◇◇◇

こちら、紅電香枚井駅に隣接する大型ショッピングセンター「シエスタ香枚井」。婦人服の、水着のコーナーは、海水浴に、はたまた、プールに行くことだけを考えている女学生たちで、ごった返していた。

高槻沙織が言った。
「ねえねえ、はっとりは選ばないの？」
「わ、わたし？　わたしは学校のでいい」

「そうかなあ、この、フリル付きのセパレーツなんか似合いそう。透けない白で」
「そうだよ、似合うよ美月！」
「これにしときなよ……」

服部美月は顔を真っ赤にしながら、こう言った。
「それ、とっといて」
「おやまあ、はっとり、買う気になったー？」
「と、とりあえず、わたし、ちょっとATM行って来る……」
「……お金がなかったんだー」
「悲しいね、貧困家庭は……」
「梨音、何か言ったかー？」
「いえ、べ、別にぃー」

柏原桃花が、立花梨音に訊いた。
「ねえ、梨音ちゃん、わたしのこれ、似合うかなあ……」
「おおっ、桃花らしくていいね、何だか子どもっぽくて！」
「子どもっぽいって一体……」
「もっと大人っぽいものにしろよ、桃花。怪しいおじさんとかに、かどわかされるぞー」
「じゃあ、わたし、もっと大人っぽいものにするー」

高槻沙織が、立花梨音に訊いた。
「そう言う梨音は、水着、何を選ぶのさー」
「えー、あたしー？　じゃーん、黄色のビキニでーす」
「うわああー、似合わなさすぎる……」
「うるさいうるさい、これにするのだ！　そういう沙織はどうなのさ」
「え、わたしは、白のワンピース水着」
「ぐはっ、の、悩殺……」

「参ったか」

水谷啓子が、高槻沙織に訊いた。
「沙織先輩、わたしは、これにしようと思います」
「え、どれどれ……って、これー？」

立花梨音が、続けた。
「白地に四つ葉のクローバーマークのワンピース水着！」

柏原桃花が、続けた。
「か、かわいい……」

ＡＴＭから戻って来た美月が、水谷啓子の水着を見るなりこう言った。
「うわー、洒落たものを持って来るね、この子は！」
「じゃあ、全員決まったようなので、レジへ……」

服部美月がさえぎった。
「ちょっと、沙織の見せて……うわあ、お洒落。わたしもお揃いにするー」
「え、ビキニはいいの？」
「乳だけ丸見えなのは嫌だ！　わたしも透けない白のワンピース探す」
「もう、美月ったら……」
「あったぞー、これにするー！」
「じゃあ、みんな持ったかなー、レジへＧＯ！」
「イエッサー！」
「あ、ああ、お金が要るんだったな……五千円は痛い……」

◇◇◇

——翌日……。蝉が朝からミンミン鳴いている。ここは、葱北本線、香枚井駅。みんなで、秋津浜行きの快速電車に乗るためだ。秋津浜行きの電車は、こちらの快速電車の方が速いのだ。沙織、美月、梨音、桃花、そして刈羽台から来た啓子が、プラットホーム上で集っている。

「今日は、あのおっぱい星人は現れないみたいだね」
「ふー、やれやれー」
「誰がおっぱい星人だとー？」
振り返ると、アロハシャツに短パン姿の、霜田拓也、霜田　翔が現れた！

「うおおおおーい！　知らせたの誰だー？」
「誰だと思う？」
「梨音……お前の仕業かああっ」
「いててっ、ほっぺ、つねったらだめー」
「ありゃー、発信元は梨音ちゃんだったのー、びっくり！」
「よっ、今日はおまえらのボディーガードに来てやったぜ！」
「いりません！」
「美月ちゃん……僕らいたら、邪魔かなあ……」

寂しい子犬のような声を出す拓也に、思わず美月が……。

「いえいえ、邪魔だなんて、そんな、大歓迎です！」
「やれやれ、梨音のせいで、借りコテージもう一個予約しなきゃ……もしもしー？　はい、室山市の高槻沙織といいます。急遽、男性二名追加で、もう一部屋予約お願いします、大至急！　はい！」
「ごめんね、沙織ちゃん」

霜田　翔が、服部美月の肩に後ろから手をかけた。
「なんだよ美月ちゃーん、お泊まりかよー、興奮しちゃうな、オレ」
「勝手にすれば」
「ほら、意地張ってないで、笑顔、笑顔」
「ぎゃあああ！　ど、どこ触ってんのよ、この変態！」
「翔、止めろって！」
「こういう輩は……関節技で……えいっ！」
「痛ってえ……腕が、腕があらぬ方向に曲がっ……痛ってえなあ……」
「天罰てきめん！」

『二番線の電車は、快速・秋津浜行きです　停車駅は、葱州長坂、志賀原、室山、岩崎、敷島、新室山、葱州神崎、終点・秋津浜の順に停車します』

◇　◇　◇

ここは、室山県秋津浜市の、秋津浜海水浴場近くにある、緑が丘コテージ。会員レンタル制になっていて、高槻沙織の父、信也が会員になっているため、コネで安く借りられた。十数棟の小さなログハウスが作られている。海岸までは、作りつけられた、専用の階段を降りてすぐ。じりじりとし照りつけている太陽が、砂を焦がす。

高槻沙織と、霜田拓也は、それぞれに支払いを済ませた。一泊二日。虫除けスプレーと、日焼け止めを買っておいたので、男部屋、女部屋でそれぞれに塗り、みんな水着に着替えて、三々五々、コテージから出てきた。

「美月ー、まだー？」
「着替えが……もう少しかかる」
「早くしないと、行っちゃうよー」
「すいかは今日にしましょう！」
「啓子ちゃーん、こっちこっち！」
「あ、先輩、出口こっちですか」

霜田兄弟は、プラスチックの椅子兼テーブルの中央に、貸し出されたパラソルを立てる作業をしていた。

「パラソルは、このテーブルの真ん中にっと！　おい、翔、手伝えー」
「やだよー、美月ちゃんと遊ぶんだもんオレ」
「いいから手伝え！　パラソルが重いんだよ！　ちょっとこっち来ーい！」
「はいはい、分かりましたよ！」

翔はそそくさと兄貴の手伝いをしていたが、専用のビーチバレーのコートがあるのを浜辺に見つけ、わくわく楽しそうにしていた。沙織が、美月に声をかけようとしたが、肝心の美月は……黙々とラジオ体操……。

「何か、泳ぐのに必死な人が約一名……」
「沙織ー！　向こうの島まで泳いで行って、帰って来る！　すぐ戻る！　じゃな！」
「って、ちょっと、美月……」
「ちっ、逃げられた……あーあ、オレの美月ちゃん……」
「お前がいじるから、美月ちゃん、呆れてどっか行ったぞ！　この間抜けぃ！」
「じゃあ、残った俺たちでビーチバレーすっか」

「沙織ちゃん、立花さん、柏原さん、そして、水谷さんかー。4対2でビーチバレーしようかな？　いい？」
四人「はい！」
「さてと、賞品は……」

やがて、美月が海から上がって来た……。

「やあ、みんな、ビーチバレーだね！　ぜいぜい……　向こう岸の沼島の海女さんから、壺焼き用のサザエ買って来た」
「美月はビーチバレー、どうするの？」
「泳ぎ疲れたので、審判をする」
「ああねー、ちょっとした遠泳だったもんねー」
「はーい、前半二セットは二十一点以上先取、後半一セットは十五点以上先取で一セット獲得。二セット先取で勝ち。二点差がつくまで頑張って相手方コートに落とそう。まずはコイントスから、先攻後攻決めて？」
「先攻わたしたち！　美月ちゃん、賞品は？」
「そうね、勝ちチームには、スイカ割りをする権利。負けチームには、スイカ割りの棒で叩かれる罰ゲームかなんかがいいかと。みんな、肉離れが起きないように、今から三分間は、ウォームアップの時間です。みんなで体操をしましょう」

三々五々、体操をしていたが、美月だけは「ちょっとホイッスルと、ストップウォッチ借りてくる」と言って管理事務所まで駆けて行った。戻って来ると、間接チューが嫌なのか、ホイッスルを海水で洗って、審判席へよじ登った。

「どっこらせっと。じゃあ、始めるよ！」
美月のホイッスルが鳴った。

「サービスは、いちばん背の高い沙織！」「よっしゃー！」バンッ！「翔、受け止めろ！」「兄貴、スパイクだ！」「分かったー！」バシーン！

「梨音、受け止めろ！」「あ痛っ！」「桃花、トス」「了解！　沙織ちゃん！」

「アタック！」「させるかぁ！」

という具合に、白熱した試合展開の後……。

「ゲームセット！　２―１で、敷島女子チームの勝ち！　スイカ割りの権利獲得！」

「やったよ！　大人相手に勝ったよ！」「そりゃあ、大人２人に高校生４人じゃあ、圧倒的にオレら不利だよ……」「は、ハンディ与えすぎ……」

スイカと同列に砂浜に埋められた霜田兄弟。一方で、目隠しをした沙織が、じわじわと接近して、棒を振り下ろす。

「オイ、怖ええなあ……って、ぐえっ！　腹を踏むな！　そこはオレの腹の位置だよ！」

「オレは……え、え、そんな近くで、びゅん！　って、危ない危ない！」

「ここだなあ、えいっ！」

「あ痛っ！　そこはオレの頭じゃないよ……って、痛てえ！　痛てえ！　ストップ！」

「沙織ー、霜田さん叩きもいいけど、スイカ割りなさいよー」

「こ、これが四回も続くのか……」

「ひ、酷い……」

「さあ、次は梨音……」

一巡して、霜田兄弟を砂から救い出したら、霜田兄弟の頭と身体が、全くもって、ふらふらになっていた。霜田兄弟を支えていた沙織と美月が腕を離すと、彼らは砂の上に、仰向けにひっくり返った。

「ノックアウト……」ドサッ。
「同じく……」コテッ。
「あーあ、霜田さんたち、伸びちゃったよー」
「あんまり沙織が踏んだり叩いたりするから」
「その代わり、梨音みたいに、急所は狙ってないからね」
「すいか、一個も割れてないのが不思議だね」
「割れてないのかよ！」
「一個ぐらい割れよ！　つーか、急所って！」
二人「は〜あ……」

◇◇◇

女生徒、男性陣、別々に、管理事務所近くのシャワールームで水着を洗い、砂まみれ塩まみれの身体を清めた。私服に着替え、コテージの側のバーベキューをする所に集まった。やる気を起こした"バーベキュー奉行"、火起こし職人の霜田拓也が、助手の高槻沙織を従えて、必死に炭の火起こしをやっている、

「助手、固形燃料プリーズ！」
「はい、霜田さん」
「助手、炭をもう少し！」
「はい、霜田さん」
「よおーし、起こって来たー！」
「その調子です、バーベキュー奉行さま！」
遠くで見ている女生徒たち……。

「助手って何？　何、あの小芝居？」
「沙織が甲斐甲斐しく……」
「沙織ちゃん、本当に霜田さんのことが好きなのねえ……」
「ああ、兄貴と沙織ちゃんは、十年前ぐらいの頃は、ままごと遊びしていた仲だからな」
「材料持って行きましょう！」
「そうだ、そうだ、そうしよう！」
「あ、肉奉行はオレだからな！　言うこと聞けよ！」
「さあねー」
「どうだか」
「翔さんとは、関係ナシに食べるよ」
「そこの変態！　肉抱えて突っ立ってないで、さっさと歩く！」
「……変態……変態って一体……関係ナシって一体……」

バーベキューパーティーは、女生徒たちが、きゃいきゃい言いながら進んで行った。霜田兄弟は、翔が次から次へと串に材料を刺しては、拓也が火起こし職人として黙々と焼く係。「はい、次！　はい、次！」女生徒の胃袋は、育ち盛りと言うことで、どこにそんなに入るの？　といった量が、次々とさばかれて行く。

「材料なくなったぞー！」
「兄貴、オレらの飯は？」
「焼くのに夢中で、気がついたら自分のがなくて……あ、そうだ！」

霜田拓也が、溜息をついた。

「しょうがない。クーラーボックスに、オレが秋津浜駅で買った駅弁と、生ビールが入ってるから、それでも食っとけ！」

服部美月が、翔に向かってこう言った。
「翔くんがボケッとしてるからでしょ！」
「し、失敬な！　オレはお前らの為にと思ってだなぁ……」
冷めた駅弁と、よく冷えた缶ビールで、お腹をこわしそうな、駅員二人……。
「硬い駅弁だなぁ……キンキンに冷えてるよ……」
「まあ、生ビールは良かったなぁ……って、無い！　あれ、どこだー？」
ごっふごっふごっふ「ぷはーっ！」
なんと、翔のビールを、梨音がいつの間にか飲み干していた！
「コラ！　梨音ちゃん！　未成年だろ！」
「ひっく。あー、固てえこと言うなよー、無礼講だよ今日は」
「翔、お前、ちゃんとビールを管理しておかないから！　梨音ちゃん酔っ払って……」
「え？　あたし？　あたしー、酔ってなんか、い・ま・せ・ん、よーだ。でへへへー」
それを聞いたほかの女生徒たちが、酔っ払いの梨音の前に集まった。
「お前、飲酒したのかー？」
「梨音ちゃん、お顔が真っ赤！　ちょっと誰ー？　梨音ちゃんに飲ませたの？」
「いえ、オレは、別に……」

立花梨音が言った。

「おっす！　揃いも揃った、不細工共めが。がん首並べて、あたしに何をしようって言うんだー、へへへい！」

「コラ、梨音！　正気に戻れ！」

「あたしー？　ひっく。至って正気にてごじゃりまするー」

「こら、今度は翔さんに何を？」

「あそこはお元気ですか、ちーん！」

翔の下腹部を、梨音の指が弾いた。

「おわ、痛っ！　何しやがる、このガキー！」

「お遊びはそこまでだ、梨音……」

「やあやあ、美月ちゃん、今日もきれいだねえー」

「お前、今からちょっと、女子トイレに来い！　さあ、来るんだ！」

「やーだー、もっと飲みたいー！」

「お仕置きだ！　水ぶっかけて、胃の中のもの、全部出させる！　さあ、来い！」

「やーだ、やーだ、もっと飲むんだ、あたしー！　美月！　離せ！　ぐるじい！」

服部美月は、小柄な立花梨音を右腕で抱えると、階段を昇って行った。高槻沙織が、何事かと仰天して、美月と梨音の行方を追った。他の面々も、慌てて後を追った。暗い中で、トイレの電気だけは灯りが漏れていて、そこからは、信じられない音がした。ザッパーン……と、バケツをひっくり返した音が聞こえたかと思うと、中から、何かをリバースする音が聞こえて、キーキー、ぎゃあぎゃあという激しい乱闘の音がした後、トイレを流す音がして、やがて静かになった……。

そして、水でべちゃべちゃになった梨音と、猛獣を手なずけた達成感で一杯の美月が息を切らせていた。
「美月！」
「やあ、みんな！　大丈夫、梨音は完全に正気に戻った。ついでに、胃の中のものも全部戻させた！」
「梨音！」
「先輩！」
「あ、あれ？　わ、わたしはどこ？　ここはいつ？　あなたはいま？」
「ふー。梨音！　ちゃんと謝れ！　今すぐにだ！」
「ご……ごめんなさい……」
「お前、飲酒したのを、覚えているか？」
「いや、何も……って、わたしがお酒ー？」
「うん、オレのビール、二五〇ミリリットル……」
「重ね重ね、済みませんでしたー」
「よろしい、さあ、行け！」
「きゃいん、きゃいん……」梨音は、そそくさとログハウスに入って行った。
「大虎の次は、子犬かよ……」
「美月が次第にタフになってゆく理由が、こんなところで明らかに……」
午後九時……女生徒と男性駅員が、それぞれのコテージに分かれて、お休みの時間を迎えた。
「じゃあ、いろいろお騒がせしましたー！」
「ああ、まあ……」
「お休みなさい！」
「ああ、お休み！」

「失礼しましたー」
「気をつけて眠れよー！」
「じゃあなー」
　バタン！　っと扉を閉めると、霜田兄弟は、食べ直し、飲み直しといった案配で、柿の種、さきいかや、すっかり冷めたサザエの壺焼きなんかをつまみつつ、野球の生中継をラジオで聴きながら、生ビールを開けた。
　一方、女子部屋では、沙織や桃花や啓子が、ドライヤーで髪を乾かしたり、整えたりしている。猛獣を退治し終えた美月は、疲れて、カーペットの上で、大の字で横になっていた。その猛獣は、今では、バスタオルを上半身に絡めたままで、部屋の隅で、すーすー寝息を立てて寝ていた。

◇◇◇

　夜十一時……霜田兄弟は、まだ惰性で起きていて、深夜放送のリクエスト番組を聴いていた。何気なく、霜田拓也が、何気なく覗いた窓の外に、人の気配を感じた。誰だろうと、カーテンの隙間から覗いて見ると、なんと、女子部屋のログハウス付近でうろちょろしている、怪しげな人影を発見した。目出し帽にサングラスにマスク姿。手には懐中電灯を持っていた。これはまずいと思った拓也は、ひそひそ声で、弟の翔を起こした。
「う、うあー、夜中に何の用だよ、兄貴……」
「しーっ！　不審者！　不審者！」
「おいおい、女子部屋の近くにいるじゃんか！」
「翔、気配を殺して不審者退治だ！」
「了解！」

目出し帽の男は、女子部屋のログハウスの扉の取っ手に手をかけてゆさぶった。女子部屋の中では、物音の怪しさに全員目覚めていて、特に美月は、みんなを背に守り、戦う覚悟でいた。

「こ……怖い……」

「な、何この音……？」

「いざとなったら、わたしに任せて！」

一方、霜田拓也、霜田　翔は、不審者の男に背後から近づいて、羽交い締めにして、一気に階段の下へ転落させた。翔が馬乗りになって、二〜三発、男の頬を殴った。拓也が、目出し帽と、マスクと、サングラスを取って、懐中電灯で照らしてみると、意外な人物が目を回していた。

「高槻のお父さん！　何でここに？」

「きゅー」

「沙織ちゃんの親父か！　ちっ！」

その後、コンコンとノックをして、霜田拓也が女子部屋の扉を開けさせた。

「夜分遅く済まない。あれは、高槻さんちのお父さんだった！」

「ごめん！　オレが間違えて退治しちまった！」

「沙織の、お、お父さん？」

「お父さん？」

その後、女子部屋に集まる全員。

「済まん……どうにもこうにも、娘が心配で……」

「いくら心配でも、あの入り方はないよねー」
「管理人さんに聞いたとしても、いくら何でも、真夜中に来るなんて！」
「オレが二〜三発殴った」
「オレが、変装を解いた」
「お父さん、最低ー！　とんでもないことをやらかして……」
「おじさん、さすがのわたしも、武者震いしたよー」
「済まんかった……」
「でもまあ、身内で良かったじゃないか。大事に至らずに……」
「そうそう、いつだって不審者はオレたちが許さない！」

やがて、貸しコテージの駐車場から、室山ナンバーの車が走り去って行った。不審者騒ぎは、未遂どころか、人騒がせな身内に終わり、みんな安心して眠るのだった……。

◇◇◇

——翌朝

「さー、今年最後の泳ぎ納めだー！」
「遊ぶぞー！」
「酔っ払いは自重しろ！」
「すいか切って食べましょうねー」
「沙織は？」
「わたし、ここがいい」
「え？」
「霜田さんの隣がいい」
「ええーっ！」

高槻沙織は、霜田拓也の左腕にしがみついて、すーすーと、眠っ

てしまった。

一同「仲良くしろよー、この純愛バカップルー！」

「バカ……バカップルって……お前らー！」

こうして、高校二年生の夏休みイベントは、終わりを告げるのでした……。

第七話　オープンスクールがやって来る！

八月は、オープンスクールのため、全員出席の日が一日だけぽつんとある。そこで、模擬授業や、父兄や当事者である、中学生の女子（敷女候補生）に、学校を見て、体験してもらおうという、生徒にとっては甚だ迷惑で、率直なところ、「かったるくてしょうがない」行事だ。

二年三組の担任教師、相川杏子が目指す、理想の学校説明会とは！

一、流れるようなプレゼンテーション
二、宝塚音楽学校のような、折り目正しき女子教育
三、徹底した風紀チェックによる、マナーの良さをアピール
四、偏差値高そうなイメージを崩さないこと
五、理知的でありながら、フレンドリーな校風であること

これら五箇条である。一年生の時にも経験済みなので、そこんとこは慣れているみんなだが、今度は二年生。下級生にはないアピールポイントとして、「ちょっと大人の雰囲気」を出してもらうこと。これが、担任相川に課せられた使命だった。

そんな気持ちを胸に、HR棟三階のクラスに赴くのだった。久しぶりに、ご機嫌なテンションで部屋を覗くと……。

「ごめえん、ナプキン貸して」
「いいよー」やおら、ナプキンを投げる。
「サンキュー」そして、キャッチする。
「暑ちいよー、だるいー、うー、死ぬるー」
「スカート、ばたばたさせればいいじゃない！」

暑さにたまりかねた女子複数名が、スカートをひるがえしている。大変お行儀が悪い。

ばたばた。ばたばた。

「ったく、この部屋女臭えなぁ！　窓開けろ、窓！」
「誰だよ、全館冷房止めるのは！」
「不快指数うなぎ登りだ、ってってんだろ！」
「つーか、なんで真夏に冬服なんだよー！」

相川杏子は、扉の隙間から見える、まるで舞台裏のような光景に仰天した。

（こ、これがイマドキの敷女生なの？　なにあの醜態！）

がらり、と扉が開くと、まるで何かのマシーンのように一斉に着席し、静まりかえった。そして、日直が続ける。

「起立、礼、着席」
「よろしい。日直さん、ありがとう。先程までの態度！　こっそり、見せてもらいましたが、女子高だからって、異性の目が無くたって、教師が来なくたって、今のように緊張し、普段から、張り詰めていて頂きたいものです」

そして、相川杏子先生が続ける。

「ここには、あなたがたの後輩に当たる女子中学生も見学に来るので、先ほどのような醜態、断じてなりません！　ああ、この学校に入りたい、ここの学校のお姉さんは優しい、この学校が第一志望な

の……と、思わせるぐらいの雰囲気を醸し出していただきたいのです、分かりましたね！　なお、節度ある交流は認めますので、やさしく接してあげてください」

◇　◇　◇

やがて、女子中学生の父兄が教室に入ってきた。中学三年生の女生徒と、そのお母さんが、羨望の眼差しで、在校生を見詰めている。相川杏子先生は、それまでの鬼の形相から一変、柔和で優しい口調に変わっていた。

「えー、お母様とお嬢さま方に申し上げます。今から、敷島女子高等学校、普通科のプレゼンテーションを行います。これが大体……そうですわね、大体二十分程度だとお考えください。それから、後の二十分間は、在校生と自由にお話ができる、ふれあいタイムを設けます。そして、最後の十分間で、資料をお渡ししますので、お持ち帰りください」

それから、一通り、相川杏子先生のプレゼンテーションが済んだので、自由なふれあいタイムに移った。在校生も、柔和なイメージを作り出そうと懸命だ。

ある子が、高槻沙織のところへ行った。
「ねえ、ママ、この人、すごくやさしそう」
「あら、本当ね」
「ねえ、お姉さん、勉強は難しいですかー？」
「う、うん、きっと基礎さえ出来てたら、大丈夫だよー」
「冬服着て、暑くないですか、お姉さん」
「うー、ちょ、ちょーっと暑いかなあ……でも、夏は薄着になるよ！」

「じゃあ、暑い日も安心、ってことですね！」
「うん、そうだね、そんな感じ……」
（ふー）

また、ある子が、服部美月のところへ来た。
「ママー、この人にお話を聞いてみようよ」
「そうね。ねえ、このセーラー服のスカーフ、学年別に色違いだそうだけど、娘がもし入学出来たとしたら、何色になるのかしら……」
「は、はい。ご入学時には、わたし達は三年生になりますので、スカーフは、赤色になります」
「ママ、赤だって！　赤いスカーフ！」
「あらそう。じゃあ、頑張ってお勉強なさい」
「はーい」
（やれやれー）

そして、ある子が、柏原桃花の席へ来た。
「ねえねえ、先輩！　普段、あだ名は何て呼ばれてますか？」
「え、あだ名……だよね。えーっと、桃花なので、ももっちと呼ばれています」
「そうですか！　ももっち先輩、きっと必ず合格しますから、待っててくださいね」
「う、うん、分かりました。じゃあ、今日から、ちゃんとお勉強しましょうね……」
「はーい、ももっち先輩！　じゃねー」
（ふえーっ）

ある子が、立花梨音の席へ来た。
「ママー、わたしと同じ、眼鏡キャラな人がいるよ」
「あはっ、本当ね」
「先輩、こんにちは！」

「あ、ああ、こんちわ……」（何だろう、この緊張感は……）
「このお姉さま、すごく勉強してるって感じですー」
「い、いや、特技はパソコンと裁縫ぐらいで、大したことないです……」
「まあ、ご謙遜を、さあ、ママとこっちにいらっしゃい」
「はーい」
（うぎょー、眼鏡キャラ呼ばわりされた！）

一通り、資料の配付が済んだ。

「では、何かご不明点でもございませんでしょうか……では、終わりにしたいと思いまあす、はい、日直さん」

日直が号令をかける。

「起立、礼、着席」
「では、皆様方は、こちらの出口よりお帰りくださいませー」

作り笑顔で手を振り、廊下へ送り出す、相川先生。

「……さてと」

相川杏子先生が、教壇に立った。

「皆さん、お疲れ様。肩の力を抜いて……」
「うおーっ」「あっちー」「だるい、わたしだるい」「めっちゃ緊張したよー」
「では、よろしい。本日のオープンスクール、終わりにします。解散してください。また、九月になったら会いましょう、では、解散！」

◇　◇　◇

毎度おなじみの、香枚井登下校組。紅電敷島駅のホームで電車を待っていると、先ほど、柏原桃花の席を訪れた親子がやって来た。

「うちの娘は、吾野本陣なんですの。香枚井から急行で一駅ですわね」

「ええ、急行で、香枚井まで」

「こんにちは、皆さん、ご一緒に通学を？」

「あ！　ももっち先輩です！」

「そ、そうですね」

「何か奇遇ですわ」

「そ、そうですね」

「ももっち先輩、板宿美香っていいます、よろしくお願いします」

「あ、わたし？　えー、柏原桃花っていいます。よろしくね」

「よろしくですー」

「この子は、水谷さんって、まだ一年生です」

「どうも、刈羽台の水谷ですー」

「みんな仲良しでーす」

「じゃあ、皆さんで一緒に帰りましょう」

「そうしましょう」

「通学する事になったら、この子もお願いね」

一同「はーい！」

「わかりました！」

「まずは、志望校合格ですね」

「でも、たまには猥談も混じるけどなーって、ぐえっ、痛あっ」

美月の肘鉄と、沙織の空手チョップが炸裂した。
「おやおや、敷女の生徒さんも、案外フランクなところがおありのようで……」
「いえいえ、こいつだけは例外です。何かの間違いです」
「入学試験の採点のコンピュータが故障したと思われます！」
「ぷっ」「きゃはははは」
「うーん、もう、笑わないでよ、わたしゃ自力で受かったよ」
『三番線、急行、楠葉行きです　停車駅は、岩崎、室山、咲花台、香枚井、吾野本陣、紅葉野、吾野、終点楠葉の順に停車致します白線の内側まで、下がってお待ちください』

◇◇◇

紅電香枚井駅に着いた電車。ホームでお見送り。
「じゃあ、きっと合格しますー」
「ああ、頑張れよ！」
「元気でねー」
「達者で暮らせー」
「バイバーイ」
『ドアが閉まります。閉まるドアにご注意ください』
「ふー、やれやれ……って、霜田さん？」
「あ、君たち。冬服でどうしたの？」
「今日は、オープンスクールなので、セーラー服じゃないと駄目だったんです」
「拓也さんはホームの掃除もやるんですかー」

「ああ、ラッシュ時以外は、掃除か、改札だよ。君たち、暑くない？」
「もう、べろーんとなるぐらい、暑かったです」
「じゃあ、自販機のアイスでも食べる？」
「ええー、いいんですかー？」
「六〇〇円ぐらい、どうってことないさ」
「さすがは霜田さん、１５０円アイスって！」

◇◇◇

「くーっ、生き返るー」
「つめたあああい」
「どう、美味しい？」
一同「はいっ！」
「んじゃ、そりゃー良かった！　あ、ゴミはくずかごにね」
「ごちそうさまでしたー」
「お粗末さまでした」
「なんて優しいのかしら、霜田さん……」
「そう言ってもらえて、うれしいよ」
「お熱いよ、二人とも、ヒューヒュー！」
「梨音、うるっさい！」

こうして、紅電香枚井駅は、夕刻を迎えようとしていた。

第八話　梅香祭（文化祭）

今年、創立九十周年を迎える、室山県立敷島女子高等学校。ここにも、普通の高校と同様に、文化祭がある。現在の敷島二丁目は、以前、敷島市大字梅香と呼ばれていた関係上、その伝統を受け継いで「梅香祭」（ばいこうさい）と呼び習わされている。

部活動やクラスの模擬店が展開されている校庭には、テントが設営されていて、さまざまな催しが行われている。鉄道員である霜田兄弟は、土日という関係上、駅係員として、参加どころではなかったし、タクシー業の霜田家も、目下忙しくて来られなかったが、家庭科部メンバーの親御さんは来ている。

高槻沙織の父、服部美月の父、立花梨音の父、水谷啓子の父が来ていて、公共放送ラジオ担当の柏原桃花の家からは、代わりに母が来ていた。どれどれ、といった案配だ。

「立花さん、あれ、娘さんでは？」
「本当ですね、梨音だ。……何々？　クイズ『乳酸ショック』ですと？」
「クイズに答えて、不正解ならば、乳酸飲料をジョッキに入れて、飲み干すそうです」
「あ、あのバカ……！」

『二年三組、立花梨音ちゃんです！　どうぞー！』
「いやあ、どうもどうも～」
『早速ですが、問題です。大化の改新が行われたのは、西暦何年でしょう、はい、十秒以内にお答えください。十、九、八……』
「はい！　はいはいはい！」

『おおっ、早いですねえ、さて、お答えをどうぞ！』
「鳴くよウグイス……七九四年！」

ブブー！

「な、なんだ、外れちった……」
『残念！　っていうか、当たりもかすりもしませんでしたね。正解は、西暦六九五年でしたー。歴史をもっと勉強しましょう。では、罰ゲームとして、ジョッキに並々と注がれた、乳酸飲料を飲み干してもらいます。さあ、どうぞ！』
「せーの、立花さんのいいとこ、見てみたいー！　そーれ、一気、一気、一気、一気……」
「ぶっ、ぶふううう—！」
「きゃあ」
『おっと、早くも吹きだしたー、大丈夫か立花さん！　最後まで責任持って飲み干していただきましょうー！』
「げはっ、ごえっ、わ、わたし、もう無理……」

その一部始終を見ていた、父、立花功武は絶句した。すでに怒りを通り越して、呆れていた。ぽかーんと口を開けて……。

「ほら、立花さん、女の子だけだと、遠慮がなくなるんですよ、気にしないで」
「そうそう、元気があっていいじゃないですか」
「チャレンジ精神旺盛な娘さんで……ぷふっ」
「お、オレ、育て方間違えたか……な……」
「さあ、立花さん、気を取り直して、家庭科部の模擬店行きましょう、ね」
「た、たぶん、育て方……間違えた……」
「見なかったことにしようか、立花さん……」

次に一同が向かったのが、文化祭には欠かせない、食品系の模擬店。中でも、代々受け継がれて来たのが、敷女名物、ダシが自慢の「梅の香うどん」だった。重要なミッション、梅の香うどんを任されているのは、服部美月とその先輩後輩たちだった。とても緊張している様子で、先輩たちに尋ねているのだった。

「ぼ、梅肉の分量、間違いないですよね、ね、ね？」
「うん、もう少し薄い方がいいんじゃないかしら。ダシを足してみて」
「は、はい、わかりました、先輩！」
「服部先輩、何か緊張されてませんか？」
「ぶるるるる、何でもないの、何でもないったら……ただ、伝統の味を守るプレッシャーがあってね、それで……」

様子を見て、たまらずに、服部征志が声をかけた。

「おーい、美月ぃー、来てやったぞー！　僕らにも一杯食わしてくれや」
「は、はい、わかりましたですとも、お、お父さま……」
「なんだ、えらく緊張しているな」
「敷女九十年の伝統を守るプレッシャーに押しつぶされそうで……」
「そんな昔からあるのか、梅の香うどんって……」
「うん、戦前から……」
「高槻です、僕も一杯もらおうかな」
「うちとは違って、立派な娘さんだ……」
「立花さんも、ぼおっとしてないで、一杯いかが？」
「はい、頂戴します」
「美月ちゃん、私にも一杯いただけるかしら」
「はい、お待ち下さーい」

「おお、来た来た」
「どうぞ、熱くなっていますので、やけどに注意してくださいね」
梅の香うどんは、薄い梅肉風味のダシ汁に、シーズン時に摘み取った、梅の花びらの塩漬けがトッピングされていて、どちらかと言えば関西風味だった。

「おお、美月ちゃん、グッジョブだ！」
「美味しぃ！」
「いい仕事してるなー」
「ありがとうございます！　苦労した甲斐がありました！」
「良かったですね、先輩」
「あの、皆さん、スイーツも、服飾雑貨もありますので、ぜひそちらもご覧くださいね！」
「おお、任しておけ、美月ちゃん！」
「そ……育ちがうちのとは全然違う……」

◇　◇　◇

さて、お次は、柏原桃花&立花梨音プロデュースのたこ焼き模擬店「桃源郷」だ。今は、立花梨音が「乳酸ショック」クイズの後で、テント内の椅子でへたりこんでいるので、桃花が先頭に立って売っている。三年生の先輩も一緒にちくちくとたこ焼きを作っている。そこへ、先程の父兄一同がやって来て、声をかけた。先ずは立花功武から……。

「こら梨音！　少しは真面目に商売しないか！」
「お、親父ぃ……今はもうダメ……ビフィズス菌のゲップが出るう……げぼっ」
「は〜あ、情けない……ごめんね、桃花ちゃんたち」

「いいえ、私たちは、大丈夫ですから……」
「小粒でも、ぴりりと美味しいですよー」
一部始終を見ていた、柏原桃花の母がつぶやいた。

「ねえ、桃花。私とお父さんのぶん、包んでくれないかしら……局に持っていくから」
「えー、恥ずかしい～」
「日頃からあんなにたこ焼き作ってるじゃない、心配いらないわ」
「じゃあ、二箱だけよー」
「いいわ、頂戴」

それを見ていた親父共も欲しくなって、その場で食べるのだった。

「うん、カリッとして、ふわっとして、丁度いい」
「霜田君たちにも買って帰ろうか」

そして、高槻沙織と後輩たちのブース「モンスター・クッキー・マシーン」というコーナーにたどりついた。一種の自動販売機で、500円玉を入れて、スロットマシンのように、モンスターの右手を下に降ろすと、「ウオー、クッキー！」といった具合に音が鳴り、袋に入ったクッキーが、本体上半身の下にある取り出し口から、ポロポロと出てくるのだった。おかげでお子様連れのお客が多く、物珍しさから行列が出来ている。

「沙織、沙織はどこだー？」
「ウオー、クッキー！」
見ると、モンスター・クッキー・マシンの裏側で、ボイスチェンジャーを使ってしゃべっていて、500円硬貨投入を見計らって、

クッキーを手動で排出していたのだった。その役を、後輩に譲ると、折りたたみ会議テーブルの向こう側から、ひょっこり沙織が出て来た。

「ウオー、クッキー！」
「沙織、もうそれはいいから、素に戻りなさい」
「いやあ、皆さん、どうもどうも、いらっしゃいませー」
「あの声、沙織ちゃんだったの？」
「ウオー、クッキー！　……この声に、ボイスチェンジャーを使ったの」
「よく喉が枯れないよな」
「ええ、実は、喉がガビガビですー　けほんこほん」

柏原桃花の母親が、こう言った。

「じゃあ、私たちのぶんと、うちのお父さん、それに霜田さんたちに渡すので、準備お願いね」
「ウオー、クッキー！」
「いや、その効果音は、もう無しでいいから……」

◇　◇　◇

「お待たせしましたー」
「どうもありがとう」
「ところで、水谷さんは？」
「あー、あの子はいま、あのへんで綿飴屋さんやってまーす」
「じゃあ、水谷さん、行きましょう？」
「あ、ああ、そうしましょうか」
「じゃあね、高槻さん」
「がんばれよー」

校庭を横切って、グラウンド隅の鉄棒の近所に行く父兄一同。その近辺は、疲れて休んでいる生徒のたまり場になっていた。水谷啓子は、いささか暇を持てあましていた。

「綿飴ですよー、おいしいよー……だめだ、全然売れない……」
「啓子！　こんなところで、綿飴かい？」
「お、お父さんたち……」
「どうだ、売れてるかー？」
「見ての通り、全然売れないよ……」
「これはねえ、こうやって、商品見本を左右、三つづつぐらいに吊り下げて……」
「値段は、もう少し落とした方がいいな。百円ワンコインってやつだ」
「そして、このメガホンで、お客さんに訴求する！　これで完璧。あ、喉をつぶさないようにね、注意して……」
「で、元気よく『綿飴いかがっすかー？』……これでＯＫだ。やってみ？」
「わ……『綿飴いかがですかー？』……『美味しい綿飴、くせになっちゃう綿飴！』」
「そうだ、その調子だ！」
「じゃあ、値段も下がったことだし、おじさんたちに一個くれるかー？」
「はいっ！」

水谷啓子は、機械の中央にザラメ砂糖を入れると、機械が暖まるのを待った。やがて、ふよふよと、綿飴らしきものが立ちのぼって来たので、それを割り箸ですくい取り、きれいに丸めて行く。

知らぬ間に、百円とあって、いつの間にか、近所の子ども達が群

がってきて、綿飴の順番を待つのだった。
「ほらね、小学生は、百円玉が限界なんだよ」
「なるほど……ありがとうございました！」
「じゃあ、頑張って！」
「はいっ！」
「お姉さん、僕もー」
「お姉さん、わたしもー」
「はいはい、良い子は順番に並んでねー」

◇　◇　◇

夕方……一般公開も済んで、撤収の準備にとりかかった。後夜祭では、キャンプファイアーが催されていた。
「やー、今年も済んだかー、なあ、服部！」
「そうですね、先輩！　梅の香うどんの味、伝授致しました」
「それは良かった……わたしら、最後だもんね……」
「こんばんは、サオリ……ですぅ……スッカリ、声が、枯れて……」
「お前は『クッキー！』言い過ぎだよー」
「あ、だっるうー、しんどーい。美月、なんか元気の出るものないー？」
「あいにく、ここにはない。つーか、お前は、乳酸ショックだけだったろ？」
「てへへ……その分、桃花がたこ焼きの腕を上げたぞ」
「あっついー……のど渇いた……のぼせています。沙織ちゃん、お水ない？」
「はい、お水！　桃花はずっと鉄板の前だったからね」
「先輩、水谷です……わたあめいかがですかー？」
「おおっ、啓子ちゃん、ありがとう！」

「みんなで食べよう」
「じゃあ、わたしはこれぐらい頂戴してー」
「もうっ、ダメです！　乳酸ショックだけの人は謹んでくださぃ」
「しょぼーん……」
「はい、先輩！」
「おお、悪いなあ、こんなにもらっていいのか？　一年の、水谷さんだったっけ」
「はいっ、なんというか、記念に……」
「ははっ、記念ね」
「で、これが沙織さん、これが美月さん、これが桃花さん、で、乳酸ショックだけの人は、これだけ」
「こ、こんなにちょびっと？　ひとつまみも無いよ？」

そんな笑いに包まれながら、今年の文化祭は、幕を閉じるのでありました。

第九話　霜田、身を挺して！

（９－１）霜田、身を挺して！

『二番線、急行、海浜神崎行きが、八両で参ります　白線の内側に下がってお待ちください』

霜田拓也の構内アナウンスが響く。通勤急行は特に、通勤客の人出が多い。上り線のホームに人があふれ返っている。白い旗を振って、電車の運転士に減速の指示を出した。

不意に、服部美月が、通勤客らにドンッと圧されて、ホーム端でよろめきそうになった。このままでは線路に落ちる。次の瞬間、恐らく、考えている間にも、電車は近づいてくる。美月がそう思った瞬間、そばのマイクに向かってアナウンスをしようとした霜田が、とっさに非常ボタンを押し、服部美月に駆け寄り、マイクを落としたまま、後ろからしゃがみ込むようにして、彼女を転落から身を挺して助けた。

「美月ちゃん、危ないっ！」

霜田の肩胛骨に、電車の側面がガツン、ガツンと何度も繰り返し当たる。幾ら非常ブレーキで減速している電車とは言え、肩胛骨には相当なダメージを受けているに違いない。電車の側面に、血糊の跡が帯状にくっついていた。ワイシャツには、血液が相当程度にじんでいた。

「い、痛ってえ……」

そう言ったきり、美月を抱き留めたまま、プラットホームの端にしゃがみ込んでしまった。かぶっていた制帽は、飛ばされて、線路下のどこかへ落ちてしまっていた。

「霜田さん！」
「わたし、携帯で救急車呼ぶ！」
「わたしは、駅員さん呼んでくる！」
「ねえ、霜田さん！　ねえ！　ねえったら！　ねえ！」
「あまり揺さぶらない方が！」

彼は後頭部も打ったらしく、気を失っているようだった。身を挺して助けたその安堵感からか、そのまま美月におぶさるように、がっくりとうなだれた。

まず駆けつけたのが、電車の車掌と運転士だった。次に駆けつけたのが、駅長と駅員だった。まるで、眠っているかのように微動だにしない霜田を見て、美月が口を押さえて嗚咽した。霜田は、そのまま、駅員の手によって、ホームに寝かしつけられた。もし頭部を打っていたならば、無闇に動かすのは危険だと判断したからだ。

『ピーポーピーポー　ウーウー　交差点に進入します　進路を譲って下さい』

やがて「室山北9」と書かれた救急車が、香枚井駅東口に到着した。沙織は、携帯電話で、担任の相川先生を呼び出し、事の経緯を説明した。救急隊は救急隊で、受入先病院を携帯電話で探していた。

「室山大附属……いや、遠い。近くの県立室山病院で。そう。お願いします」
「あの……」

「咲花台の、県立室山病院に連れて行くから、容態が落ち着いたら、お見舞いに来るといいよ。大丈夫、バイタルはあるから、大事には至らないと思うよ」
「あの、出来れば彼女も一緒に連れて行ってあげてください！」
「駅員さん１名と、泣いているあの子か……まあ、乗れなくはないな」

救急隊員が、よいしょっと、ストレッチャーを起こすと、霜田を、駅のエレベーターで運んで行った。服部美月は、その場に泣き崩れていた。

「わたし……わたしをかばって……うわあああん……霜田さん、死んじゃ嫌ああああー」
「美月ちゃん、落ち着いて！」
「じゃ、じゃあ、はっとり……わたしと桃花は先に行って、学校の先生に話すよ。次の電車に乗るんだけどね……」
「もう泣かないで……美月ちゃん、しっかり！　ね！」
「じゃあ、美月、霜田さんのこと、よろしく頼んだ！」
「う、うん、分かった……わたしは、救急車に乗る……」

問題の急行電車は、室山県警の現場検証もあり、三十分遅れで香枚井駅を発車した。美月は、学校の先生の指示に従って、霜田の母親と、美月の父親と一緒に、その後、約一時間後の各駅停車で咲花台へと向かった。彼らは、室山県立室山病院の、ＳＩＣＵ（外科的集中治療室）へと向かった……。

（９－２）病院へお見舞い……

霜田拓也の母親と、服部美月の父親、それに、沙織と美月が病院の個室に赴いた。霜田の母親が、息子の手をさすりながら、耳元で

ささやいた……。
「拓也……拓也……」
服部征志がつぶやいた……。
「大けがですからねえ……何でも、オペに四時間かかったそうで……」
沙織と美月がショックで声を出せずにいる中、服部征志が続けた。
「美月、この駅員さんが、お前の命の恩人だよ……」
「恩人……命の、恩人……」
霜田拓也の母親が、沙織と美月に向かって、優しく諭した。
「あなたたち、どうか、静かに見守ってあげてね……」
美月の父親が、去り際にこう言い残した。
「お父さんたちは、先に、先生に経過を聞いてくる。そのまま帰るから、君たちもほどほどにして帰りなさい」
二人「はーい……」

◇◇◇

高槻沙織と、服部美月が、霜田拓也の個室に置かれた椅子に座った。そうして、静かに寝息を立てている、拓也の表情を見詰めていた。病院用ベッドは、枕元の部分が少し、斜め上を向いていて、配膳台はいつでも食事が食べられるような位置に固定してあった。沙織が美月に言った。
「ねえ、まだ目を覚まさないんだけど、しんどいのかなあ」
「そ、そりゃあ、わたしをかばって、代わりに電車と擦(こす)れたんだから、多分、肩か、背中かどこかに、ダメージを受けてて……」
「ダメージが軽いことを、祈るばかりだよ……」
「やだ、申し訳ない、霜田さん、ごめんなさい！」
「まだ、麻酔から覚めないみたいだね、まだ、覚めないのかしら……」

「み、みんな、わたしの所為だ……」
「ほーら、泣かない、泣かない！　美月がいつも私に言ってる言葉がある！」
「お、女は度胸と、愛嬌……」
「そう！　そうでなきゃ！　空元気でも元気は元気！」
「うん、ちょっと無理そうだけど、やってみる。……女は度胸と愛嬌！」
「うん、それでこそ、いつもの美月だよー」

高槻沙織が、服部美月を呼んだ。エレベーターホールは、さほど遠くない場所にあって、エレベーターの、下の階へ行くボタンを押し、乗り込んだ。何階かに止まった後、地階に着いた。

「ねえ、はっとり、こっちこっち！」
「な、何だよ……」
「晩ご飯、食べに行かない？」
「わ、わたし？　うーん、どうかな。まだ早いし、食欲がぜんぜん……」
「そうだねー。でも、食べとかないと！」
「ああ、そうかも。だいいち、腹が減っては戦ができぬ。じゃあ、わたしはカツ丼で！」
「ならば、わたしはエビピラフ……」
「なあ、沙織？」
「なあに？」
「霜田さん、治るといいね……」
「そうだね」
「……で、お医者様は何て言ってたの？」
「ううん、まだ訊いてない……ちょっと怖くて……」

◇　◇　◇

夕方に満腹になった沙織と美月は、五階東病棟へ向かった。地階のエレベーターホールにて。

「結構待つねえ」
「そうだな……」

お互い、身に降りかかっている現実を前にして、普段より無口だ。

「お医者さんが待っているみたいだよ……」
「説明を聞くのが怖い……」

ようやくエレベータが到着して、五階東病棟に行く二人。五階に到着すると、ナースステーションが目の前にあり、そこで、看護師たちが立ち働いている。沙織が、ひとりの看護師を呼び止めた。

「あのー、霜田拓也さんのお見舞いに来ました、高槻と服部です。看護師さん？」
「まあ、あなたたち、待ってたわ。お疲れさま。先生が、医局からもうじき戻って来るから、そこの部屋で待機してくれないかしら」

二人「はい」

ＳＩＣＵ（外科的緊急治療室）の横にある、窓のない四畳半程度の別室に通された。ここは、入院患者の家族に対して、医師が病状を説明する時に使う部屋だ。沙織と美月は、パイプ椅子に腰掛けて、じっと主治医が来るのを待っていた。そこに、霜田拓也を診察、そして、オペした外科医がやってきた。

「やあ、君たちか、霜田さんのお友達というのは……」

「はい」
「今から、霜田拓也さんの怪我について説明するので、落ち着いて聞いてね」
「は、はい」

医師による説明とは、次のようなことだった。まず頭は、軽い脳震とう。肩は、左の肩胛骨を中心に、骨に亀裂が走っていて、脊椎も軽度の損傷で済んだが、当面、安静にしないといけないので、関係者以外は面会謝絶にしている、食事や着替えには介添えが必要だ、などとのことだった。説明は二十分近くにも及んだ。レントゲンフィルムを見せられたりして、沙織や美月は、泣きそうになった。

「ここに運ばれた時には、意識レベルは落ちていたものの、君たちの名前を小声でつぶやいていたよ。沙織ちゃん、美月ちゃん……ってね。仲良く看病するなら、看護師の言うことに従ってやってね。あと、学業をおろそかにしないこと。約束できるね。じゃあ」
「はい、わかりました」
「気をつけます……」

パタン、と扉が閉まり、二人は深いため息をついた。

◇◇◇

二人は霜田の病室に入った。一般病室に移り、麻酔から覚めた拓也が、朧気な意識の中で、彼女たちに気づき、起き上がろうとした霜田を、沙織と美月が制した。

「あれ？　君たち……」
「ちょっと待って、霜田さん！　大怪我なんだから！」
「起き上がらなくていいから、ストップ、ストップー！」

「君たち……来てくれてたんだ。そして……オレ、助かったんだ……」
美月が、半べそをかきながら言った。
「そうだよ、霜田さん、助かったんだよ！　はー、生きてる……」
霜田が続ける。
「あれ、沙織ちゃんも一緒だったんだ。ありがとう……」
沙織が、安堵の表情を浮かべて、返す。
「良かった……霜田さん！」
二人「うわあああん……ごめんね、ごめんね、霜田さん」
霜田が応える。
「ちゃんと、オレは生きてるよ！　ほら、落ち着きなって。泣かない、泣かない」
二人は我に返ると、ティッシュで目元を拭いたり、鼻をかんだりした。

「ほらほら……オレは、無事だよ……落ち着いて」
「すごい怪我で、オペに四時間もかかったんですよ！」
「わたしたちが毎日看病します！」

薄目を開けて、霜田が応える。
「うん、ありがとう。二人とも……」
「あなたは、わたしの命の恩人です、ありがとうございます。全力で看病につとめます！」
「助かって、本当に良かった……霜田さん……」

◇◇◇

服部美月は、気を遣っているらしく、霜田拓也の身体を拭いたり、洗面器の水を取り替えたり、そうかと思えば、借りて来た花瓶に、

売店で買った花を活け、テーブルを拭いたり、寝間着を着替えさせ、それを洗濯したりしていた。

高槻沙織が、あれよあれよという間に、美月が何もかもをやってしまうのだった。沙織は、実際の所、何も出来ずにいた。

甲斐甲斐しく霜田の世話をしていた二人だったが、特に美月は、きびきびと立ち働いていた。そんな中……。

「拓也さんのこと、もう、あきらめました。なので、美月にあげる」

「えっ？　突然何を言い出すの？」

「さ、沙織ちゃん……」

高槻沙織は、服部美月の方を向いて突っ立ったまま、ただただ涙を流すのだった。流れる涙をぬぐいもせず。

「霜田さんに、身を挺してかばわれちゃ、もうあなたのものなのよね。……何だか……とってもお似合いだから……」

「そ、そんなことないぞ！　霜田さんは沙織と、ずっと仲良しじゃない。沙織、きゅ、急に何を言い出すの？」

「でも、でも、わたしには、到底真似ができない……もう、あきらめるしか……」

そうして、沙織は、その場で泣き崩れてしまった。美月は、そんな沙織をなぐさめようとして、手を差し伸べたが、沙織は真っ赤な顔をして、美月を振り払った。

「あなたにわたしの何が分かるってのよ！　放っておいてよ！」

「沙織……ごめん……」

「うえっ、うわあああああん！」
沙織は子どものように、声を出して泣いた。もう何も言えなかった。ただただ、泣き尽くすことしか術がなかったのだ。五階東の病棟中に響き渡る泣き声に、何事が起きたのかと駆けつけた病棟看護師が駆け付けた。沙織と美月は、促されるように、ナースステーションに入っていった。病棟看護師が、やさしく尋ねた。

「あんなに泣いて、一体どうしたの？」
「私が悪いんです。霜田さんと、高槻さんとの間にヒビを入れたのは私です……」
「ぐすっ、ぐすっ……」
「私が悪いんです。霜田さんに構い過ぎたと思われても、仕方がないから……」
「でもあなた、一生懸命看病してたんでしょ？　命の恩人に」
「はい……でも、沙織の気持ちも考えずに、出しゃばってしまいました」

沙織は、少しは落ち着いて椅子に座れたものの、まだ泣き止んでいなかった。黙ったまま、頬を赤らめて、涙を流し、袖でぬぐう。病棟看護師は、マグカップを差し出して、お茶を二人に勧めた。

「まあまあ、落ち着いて」
「ありがとうございます」
「す、すみません……」
「あなた、服部さんって言うの？　じゃあ、今日はもう、先にお帰りなさい」
「はい」
「今日のところは、高槻さんが看病したら？」
「わかりました。じゃあ、沙織、後はよろしく頼んだ。じゃあ、私

は帰ります」
「今日のところはね、一旦お帰りなさい、ね」
「はい、どうもすみません。じゃあ、沙織、ごめんな……失礼しました……」

美月が扉を閉め、帰って行く。エレベーターホールで待っている時も、沙織のいる、ナースステーションの方を、時々横目で見ながら……。

「……高槻さん、少しは落ち着いた？」

沙織は、こくこくとうなづき、涙をぬぐった。お茶を飲み終わると「ありがとうございました」と言って、霜田拓也の部屋へ戻って行った。

「何だか……泣かせてしまって、ごめんね」
「いいんです。わたし、霜田さんとふたりがいいんです！」
「沙織ちゃん……」

当の霜田拓也は、声をかけるタイミングを逸した。この子達が、仲違いしないかどうか、とても気になっていた。

第十話　黄昏を追い抜いて

（１０－１）黄昏を追い抜いて

――午後、校門前で、服部美月は、携帯のメールを確認していた。

ふと、こんなメッセージに、視線が止まった。

『はっとりへ　昨日、お父さんとお母さんに怒られました　かばってもらった人が命の恩人の看病をするのは当然だ！　ってね　昨日は感情的になってごめんなさい　今日からもう病院へは行かないから、美月、拓也さんのこと、よろしくね　沙織』

（さ、沙織……）

室山県立敷島女子高等学校の校門前に、一台の青い、ビッグバイクに乗った霜田　翔が現れた。彼は、落ち着かない様子で、校内の内側に目を遣っている。誰かを探しているようだった。やがて、美月が現れると、フルフェイスのヘルメットを取り、微笑みながら声をかけた。

「よっ、美月ちゃん、元気になったか？」

「翔さん……どうして……」

「午前の勤務が終わったからな。ここまで来た！　兄貴が入院してる病院に行くんだろ？　乗ってけ、乗ってけ。兄貴が会いたがってる」

「でも、わたし、恥ずかしい……みんな見てるし……」

「ああ、もう、うじうじ思わない！　高速道路飛ばすから、しっかりつかまれよ！　振り落とされて死んでも知らねえからな！」

「う、うん……」

「じゃあ、カバンは後ろにネットをかぶせて固定して、美月ちゃんはヘルメットをかぶって……スカートひざで挟んで、しっかりつかまれよ！」

美月は、肩まである長髪を後ろへ流し、ゴム紐で束ね、ヘルメットをロックした。カバンを後部座席付近のネットにしっかり結い付けると、ぎこちない仕草で、後部座席に座り、翔の身体にしがみついた。スカートをひざで挟むと、翔に言った。

「こ、こんなので、いいかな……」
「上等上等！　じゃあ、行くぞ！」
「あのー、その前に、途中で岩崎サービスエリアに寄って欲しい」
「何だ、そんなことか。いいよ、お茶でもトイレでもゆっくりして」
「と、トイレって……」

エグゾーストの音がしたかと思うと、一五〇〇CCのビッグバイクは、葱州縦貫道の敷島インターチェンジを目指していたのだった。

◇　◇　◇

――放課後

「沙織は気分が優れずに早退。美月は、あの翔さんがバイクで病院まで直接連れて行った……とさ」
「なんでも、美月は、バイクにタンデムしてたとか、他の子が騒いでたー」
「なんか、先輩お二人がいないと、調子狂っちゃいますよねー」
「そうだなー、なんというか、和菓子星人バーサス、洋菓子星人という図式がね」
「だよね、なんか部活も盛り上がらないよねー」

梨音は、うーんと空を見上げてしばらく歩きながら考えていたが、何かを思いついた様子で、ポンっと手を叩いた。
「じゃあ、あたしん家来るかー！　業務用ジューサーミキサーも見せられるぞ！」
「またー、梨音ったら商売っ気出して……どう思う、啓子ちゃん？」
「うーん、スペースがあるので、店の前にジューススタンドが出来ていても不思議ではないと思いますが、お父さんが何て言うか……今から、お父さん同伴でいいですか？」
「おお、わたしは一向に構わぬ、構わぬ、ぬわっはっはっは」
「これはまた、美月ちゃんが露骨に嫌がるわけだわ、商売っ気のカタマリだもの……」
「今からー、とりあえず、シエスタ香枚井の啓子ちゃんのお店に行こう！」
「わかりました。ちょっと、お店に電話します……」
「わたしもー、親父いるかなー」

立花梨音、水谷啓子が、ジューススタンドの件で、それぞれの家に電話した。どうやら親の了解を取り付けたようだった。

「二人とも、商売っ気たっぷりね……」
「お父さんの車で春名坂まで行ってくれるみたいです、是非試したいとのことで……」
「そんなら、行くぞ！　ももっちも付き合えー！」
「そう来ると思った……はいはい、付き合いますとも……」

◇◇◇

『香枚井、香枚井です。三番線の電車は、急行楠葉行きです……』

——その頃、葱州縦貫道、岩崎サービスエリアに、翔と美月のバイクが到着した。ここには、カフェも食堂も売店もあったが、翔は自動販売機のコーラ、美月は烏龍茶で充分そうだった。二人はベンチに腰掛けた。美月は、ストレートの長い髪を、手櫛で整えていた。サービスエリアに、夕闇が迫ってくる。

「寒くなかったか？」
「ううん、全然大丈夫……」
「『おっぱい星人』も、たまには役に立つだろう？」
「うん」
「意外と、素直なんだな、ほんとうは……」
「べっ、別に！」
「おやおや、こりゃまた失礼……」

翔は目をそらして、空を眺めていた。美月は、先程のメールを思い出して、携帯をポケットから取り出した。

「ところで翔さん……沙織からこんなメールが届いたんだけど……」
「ふーん。何か可哀想な気もする。沙織ちゃん、兄貴にぞっこんだったからね」
「わたしは、明日、どんな顔して沙織に会えばいいのか、わかんない」
「……大丈夫だって、心配ねえって！」
「……だと、いいんだけどね」
「メール打つよ。あ、美月ちゃんはカメラマンになって。オレだけ撮って」
「はいはい、行くよー、笑ってー、さわやかムース」

シャッターの切れる音がした。

「……何だよそのかけ声……ってまあいいか。それで、オレが沙織ちゃんにメールする」
「えー！　あんた、今度は沙織を取って食おうとしてるんじゃ……」
「あのなあ、オレには彼女がいるの！　そうじゃなくて、励ましのメッセージだよ。君からは何だから、オレから、君と沙織ちゃんで一緒に看病してはどうか、って提案をするのだ。どうだ、いいプランだろう」
「ありがと。意外と、優しいとこあんのね……」
『沙織ちゃんへ　久しぶりです、おっぱい星人です。兄貴のことを心配してくれてありがとう。まず感謝します。それから、美月ちゃんのことだけど、沙織ちゃんのことを、随分気にしていて、明日会わす顔がないと嘆いています。交代で看病することも考えたんだけど、今度から、二人で一緒に看病してはどうだろう。一晩ぐっすり眠って、よく考えてくれよな。じゃあ今日のところは、おやすみ。
翔』
「よし、送信っと！　どう？」
「いい感じじゃない？」
「それで行こう！」
「明日からは、沙織と一緒で。いいアイデアね」
「さあ、日が暮れる。室山北インターまであと半分だ！　しっかりつかまれよ！」
「ちょ、ちょっと待って！」
「何？」
「ちょ、ちょっとだけ、お手洗いへ」
「早ええよ。もうかよ！　さっき飲んだばっかなのに……」
「お土産に、香枚井餅も買ってくるー」
「おう！　待ってるからな！」

◇　◇　◇

翔のバイクはやがて「室山北インター　出口　香枚井　椎瀬」と書かれた標識を確認すると、左ウインカーを灯して、インターチェンジを降り、一般道を県立室山病院へと向かうと、国道六〇号線を少し南下し、咲花台の病院へ到着した。

「さすがに寒いだろう」
「コート着てても寒いっ……」
「はいはい」
「メール……梨音と、沙織から届いてる……」

『美月へ　元気かい？　イエーイ！　ついに、水谷啓子ちゃんのお店に、ジューススタンドが出来ました！　もちろんジューサーは、たちばなデンキの業務用でーす　メロンジュースうめええ！　あ、桃花も一緒だよ　また明日学校で会おうなー』

「相変わらずだね……」

そう言って、美月は翔に携帯を差し出して、メールを見せる。

「本当だ、お嬢様たちの商売上手には、参ったね」
「あ、次は沙織のぶん」
「どれどれ？」

『美月へ　先程は喧嘩腰になってしまって、本当にごめんなさい　翔さんに言われちゃった　一緒に看病すればいいじゃんって　明日からは、普段通りに、一緒に看病しましょう　もう、泣いたり取り乱したりしないから　沙織』

「うーん、オレのメールが効いたかな」
「ありがとうございます。さてと、返事は……」
『沙織へ　明日からはノーサイドで　一緒に拓也さんの看病しようよ！　一緒にがんばろう　今日はゆっくり寝なよ　美月』
「こんなところかなあ……」
『追伸　今日は、おっぱい星人が学校までバイクで来て、わたしをかっさらって病院まで乗せていってくれた　他意はないよ　あくまで事務的に　美月』

二人は、夜間入口と書かれた自動ドアをくぐり、やがて来たエレベーターに乗って、五階西病棟まで行き、ナースステーションで、面会者の名前を記入した。彼らに気付いた看護師が、二人を呼び止めた。
「霜田さんの弟さんと、確か……服部さんですよね。ご案内します、どうぞ」
「おいおい、兄貴個室かよー。面会謝絶だってさ」
「関係者以外は立ち入り禁止だそうです」
開け放された扉。カーテンを開けると、そこには、美月の命の恩人、霜田拓也が横になっていた。突然の弟の訪問にいささか、驚きを隠せない様子。
「だ、誰……？」
「……起きちゃ駄目！」
「よう、兄貴、久しぶり。服部さん、バイクで一緒に乗せて来たんだ」

「来たんだって……お前……」
「こんばんは、霜田さん！　翔くんったら、案外気配り上手でねー、わたし、明日は沙織と一緒に、また仲良く霜田さんの看病をすることになりました」
「そっか……一時期は、何かあったのかと思って、気が気じゃなかったよ」
「ご、ごめんなさい……」
「でも、こうして、みんなに看病してもらってるのも、うれしいんだ」
「霜田さんは、わたしの命の恩人です、助けて下さって、ありがとうございました！」
「うん、うん」

配膳台には、すでに夕方の病院食が並べられていた。

「じゃあ、美月ちゃん、兄貴に晩飯食わせてやれよ、俺がやると絵面的に変だからさ」
「じゃあ、霜田さん、どうぞー」
「うん、おいしい、おいしい」
「良かったー」

霜田　翔が、忘れていたエピソードを思い出した。

「あ、そうだ。美月ちゃん、例の携帯メール、兄貴に見せてみろよ」
「あ、ああ、そうね。はい、霜田さん」
「何々？　沙織ちゃんが親に叱られた？」
「そうです」
「で、翔、お前が演出して、仲直りさせたと……」
「そういうこと」
「じゃあ、これからは二人とも仲良くやってくれるんだ！」

「はいっ！」
「はー、良かった、助かった……オレ、ちょっと責任感じててさー」
「ごめんなさい」
「いいって！　いいって！　もう、無事に解決しそうじゃないか！」
「そうですねー」

美月が、忘れていたお土産を渡すことにした。

「あの、これ、つまらないものですが、どうぞ」
「おー、ありがとう。香枚井餅かあ。後で美味しくいただくよ」
「ありがとうございます！」
「じゃあ、俺らはこれで」
「お邪魔しましたー」
「ああ、ありがとう！」

翔は美月の方へ向き直って、彼女に尋ねた。

「美月ちゃん、確か、榛名天神駅前の和菓子屋さんだったよな」
「ええ」
「なら、そこまで送るよ」
「いや、遠慮します。一人で帰れます。だって電車がありますし……」
「オレに遠慮なんかすんな。俺のバイクに、乗ってけ乗ってけ！」

兄が、心配そうに声をかける。

「おい、翔、あんまり無理矢理乗っけようとするなよー」
「分かってるって、じゃなー兄貴」
「お邪魔しましたー」

◇　◇　◇

翔のビッグバイクは、咲花台から、香枚井を経て、そこから北へ、春名坂を駆け上がった。ここは、春名坂のいちばんてっぺん、榛名天神駅前だ。

「翔さん、今日は本当にありがとうございました」

「らしくないぞ。だって、素直にお礼なんか言うから……」

「……べ、別に、送ってもらって、嬉しいだなんて、思わないんだからね！」

「よし、その調子！　じゃあ、明日も頑張れー！　じゃなー」

「さよなら！」

エグゾースト音を響かせつつ、霜田　翔のバイクは、紅電の跨線橋を渡り、国道六〇号線へと南へ去って行った。

（10－2）お見舞いふたたび

ある日曜日。美月と沙織は、病棟の給湯室で、お茶を汲み、コップを洗ったりしていた。

「なあ、沙織、やっぱり拓也さんは、沙織のことが好きみたい……だぞ？」

「……私の口からは、何とも」

「本当だってば！　何かっちゅうと、沙織ちゃん、沙織ちゃん言ってるし……」

「……気のせいじゃない？　助けてもらったの、はっとりだし」

「あれは、たぶん駅員としての義務感だと思うな」

「そうかな……」

「あ、夕食の配膳台車が来た……沙織、行って来い！」

「ええっ？　はっとりはいいの？」
「お前に譲るって……さあさあ、拓也さんに食べさせて来なさいってば、ほら！」
「ありがと……ね、はっとり……で、でも……」
「うじうじしない！　女は笑顔と度胸！　さあ、行った行った！」
「もう、強引ね……」

晩の食事は沙織が持ち、お茶の入った小さな急須は美月が持つことにした。

「霜田さん、ご飯ですよー」
「はーい、マグカップでーす」

霜田拓也は、ギブスのはまった左肩が邪魔そうだ。少し痛みに顔をしかめながらも、何とか、彼女たちの方へ振り向いてみせる。

「おおー、サンキュー、ご飯かあ。ちょうど、お腹が空いていたところだったんだ。ありがとう」
「無理しないで！　霜田さん！」
「お願いです、安静にしていてください」

◇　◇　◇

高槻沙織は、窓際に花瓶の花を生けていた。服部美月は、お茶やお茶菓子を用意したり、し尿便の中身を捨てに行ったりしていた。甲斐甲斐しく、きびきびと、拓也の看病をしていた。

「はあ〜っ、終わったー」
「終わったな、やっと」

「あらあら、二人ともお疲れ様！」
二人「看護師さん！」
「ありがとうございます」
「二人とも、今ではすっかり仲直り。りんごジュース買ってきたわよ」
二人「いただきます！」
拓也「あ、どうも済みません、じゃあ、ついでに、頂戴します」

拓也、沙織、美月が、同じりんごの缶ジュースを開ける。

「くーっ、冷たくて美味しぃ」
「健康に良さそうだな」
「あー、疲れた身体にしみわたるよ……冷蔵庫に生ビールねえかなー」
「霜田さん、怪我人はアルコール禁止です！」
「ああ、済まない、ごめんごめん、いつもの癖で……」
「霜田さんにとっては、冷蔵庫イコール、生ビールなんだよねー」
「身体のためですよ、謹んでください！」
「は、はい、わかりました」

ふたりは申し合わせたように、霜田拓也の介添えに当たる。

「霜田さんは、右腕大丈夫ですか？　食事もばっちり自分で出来ますか？」
「いや、ちょっとまだ無理っぽい……」
「じゃあ、スプーンで行きまーす。ホワイトシチューですよ、はい、あーん」
「あーん」
「ご飯も食べましょう……あ、今晩のデザートは、りんごですよー」

といった感じに、仲睦まじく「はい、霜田さん」「あーん」を繰り返すのだった。傍目で見ていて、やれやれー、と思ったのは、勿論、服部美月。全部食べさせるのに、かれこれ三十分は経過しただろうか。霜田の食器はすっかりカラになった。

「おおー、霜田さん、全部食べ終わりましたー！」
「済んだね、沙織、良かったじゃんか」
「じゃあ、わたしたち、地下の食堂に行って来まーす」
「行ってらっしゃい」
「じゃ、霜田さん、後ほどー」

◇◇◇

沙織と美月は、地下の食堂付近を歩いていた。
「やだ、あっちに霊安室がある……」
「もう、美月ったら縁起でもない、こっちに購買あるよ、雑誌でも買おうよ」
「霜田さん好みの雑誌って、こんなのかな」
「いやー、こっちのファッション誌でしょう」
「競馬新聞もあるぞ」
「やだー、拓也さんは、確かギャンブルやらないはず」
「じゃあ、後で何か買ってくか！」
やがて、沙織と美月は、食事を共にするのだった……。
「それがね、婦長さんから聞いたんだけど、霜田さん、次第に良くなっているみたい」
「ほー、そいつは良かった」

「お待たせしました」と、店員から差し出された、沙織の親子丼と、美月のカツ丼。美月は、沙織に気を遣って、カツの一切れを、親子丼の上に乗っけた。

「み、美月はいいの？　私にくれるの？」
「鶏ばっか食ってんじゃない！　もっと元気出せ、元気！」
「う、うん、ありがとう……」

◇◇◇

五階東病棟に戻った、沙織と美月。沙織の手には、新聞と週刊誌。美月の手には、みかんと市販のお菓子。

「霜田さーん」
「戻って来ました！」
「はい、新聞と週刊誌です」
「元気になるように、はい、みかんとおやつです」
「おおー、ありがとう！　お金出そうか？」
「ちょーっ！　霜田さん、怪我、怪我！」
「お金は結構ですから、起き上がると身体に毒です！」
「ああ、ありがとう……ごめんね」
「まあまあ、そう気を遣わずに」
「そうそう、元気になることが、今の霜田さんのお仕事ですよ」
「お仕事かあ……」
「じゃあ、私たち、これで失礼しますー」
「頑張って治してくださいね」
「おお、じゃあねー、また今度！」

紅電咲花台駅に到着し、下りの急行電車を待つ二人。

「ところで沙織、何か忘れてないか？」
「えー、何が？」
「期末テストだと言っているー！」
「期末……そういえば、もうそんな時期かも……」
「はあ、プリントもらっといて、もう忘れてるし……」
「どうすんの、はっとり？」
「特訓じゃあー！　わたしん家で勉強の大特訓だー！」
「ええっ！　土日が……わたしの土日がつぶされてゆくー」
「沙織んちに寄るから、身支度をして、着替え持って、霜田タクシーで一気に坂の頂上へ行く！　タクシーチケットあるんだろ？」
「ある、あるある……わ、わかったから、どうか落ち着いて……」
「看病にかまけて、成績落としてちゃ、駄目だろ？」
「家に電話かける……」

相も変わらず、テストの度に、美月の家へ呼び出されては、みっちり勉強させられる羽目になる沙織だった。

「はああ……勉強かあ……」

沙織は、深い深い溜息をつくのだった……。

第十一話　冬がはじまるよ

朝の葱北本線、香枚井駅ホームで掃除をする、霜田　翔は、なんだか憂いを漂わせていた。沙織たち四人は、そっと近づいて、翔の耳元で、わざとからかうように声をかけた。

「霜田さーん」「翔くーん」「おっぱい星人」「スケベ」「まぬけー」

散々悪態をついたが、翔からは何の反応もない。返事がない。やおら、くるっと振り向くと、ギャグマンガのような涙を流して言った。

「彼女に……振られた……くうっ……」
「どうしたのよ、情けないわね」
「何か、思い当たる所があるとか……」
「一昨日、病院に美月ちゃんをバイクでタンデムして連れて行ったところを、咲花台の駅前で彼女に目撃されて……」
「うわあ……」
「ああね、不運っていうか、日頃の行いと言うか……」
「うぐっ、『もう知らない！　あんたとは、もうおしまい！』って言われてさー、とほほー」

一同「は〜あ」

美月は、腕組みをして考えた。
「だから電車でも行けたのに……なんか責任感じちゃうなー」
翔は立ち上がって、美月の手をとり、おもむろに告げた。
「じゃあ、責任、感じていただけましたでしょうか！　それなら、

俺と交際を……」
美月は、グーで翔の頬を殴っていた。　軽々しい……」
「敷女の校則なめんじゃないわよ！　おととい来なさい！」
「い、痛ってえ……」
「そんなこと言うなら、おととい来なさい！」
「罰当たり」
「まぬけー」
「さあ、行こう、行こう……」
「帰りは紅電に乗ろうねー」
「そうだな、変態おっぱい星人がいるこの駅は、危ない危ない」
「そうだねー」
「帰りに、服飾材料、シエスタ香枚井で買っていこうか」
「そうしましょう」
「賛成ー！」
置き去りにされた格好の霜田　翔は、ホームで途方に暮れていた。
「ま、待ってくれー、誤解だー！」
そこへ、通りがかった駅長が、翔の脳天に空手チョップを炸裂させた。
「霜田、仕事中にサボるな」
「は、はい、すみません……」

◇◇◇

昼休み、人工芝が敷き詰められた校舎の屋上で、お弁当を広げていた美月は、携帯電話を取り出すと、メールを打ち始めた。
『翔さんへ　わたしは、勉強が忙しいし、校則も厳しい。実家も旧家で厳しい。でも、あんたが改心してくれるなら、スケベ心を起こ

さないと誓うならば、高校卒業後に付き合ってあげなくはないんだからね。大学生になったら、わたしのリストの、サ行のうちの一人になら、加えてあげても良くってよ、じゃあね。　服部美月』

お弁当に口をつけた後、今度はもう一人、気になる人物にメールを打ち始めた。

『拓也さんへ　お身体大丈夫ですか？　病院で休職扱いとなっているることに、胸を痛めています。かばってくださって本当にありがとうございました。何度お礼を申し上げて良いか分かりません。で、大変、言い出しにくい話ではありますが、沙織を大事にしてあげてください。わたしからのお願いです。それでは、また。　服部美月』

そこへ、いつものメンバーが勢揃いした。沙織、梨音、桃香、啓子だ。

「よっ、はっとり！」
「美月ったら、探したぞー。珍しいな、屋上で弁当なんて、寒いのにー」
「声をかけてくれたら、いつでもついて行くのに」
「そうですよ、水くさい」
「いやー、ちょっと野暮用があってな。携帯電話いじってた」
「誰とー？」
「うちのお父さん」
「つまんねー、めっちゃつまんねー」
「浮いた話の一つもないのかな、はっとりには」
「クリスマス前に、彼氏ゲットだぜ！」
「あー、わたしにはないね」
「本当かなあ」
「勉強と仕事の手伝いで忙しいっちゅーんじゃ、ボケぃ！」

「あんまりだー」
「ひどいよー」
「沙織、桃香、ここでマジ引きしない！」
美月は、本当の事は秘密にしようと考えた。もしみんなに言ったら、それは利口ではないと考えたからだった。なので、彼女は心の中で、少しだけほくそ笑んでいた……。

◇◇◇

あれから一ヶ月。霜田拓也が退院する日がやってきた。真新しい駅員の制服に着替えた拓也は、ナースステーションから祝福を受けている。傍らには、霜田の父、浩二郎と、高槻沙織と、服部美月。そして、拓也は、医師から差し出された、事故当日の夕刊を受け取って読んだ。新聞の見出しには、こうあった。
『紅電香枚井駅で転落事故未遂　女子高生を身を挺して助ける駅員』
「おおーっ！　オレと美月ちゃんの写真が載っている……誰が撮ったんだろう……って、『写真提供・立花梨音さん』だってー？」
「梨音ちゃんは、スクープ記者にも向いているのかも知れないねえ……」
「梨音かあ……」
「まあまあ、完治して良かったじゃないですか」
「先生、お世話になりました」
二人「ありがとうございました」
「これ、看護師一同からの花束です！」
「うわぁ、サプライズ！　ありがとうございます！」
「じゃあ、みんな元気で！」
看護師一同「元気でねー」

「さよならー、お世話になりました」
「ありがとうございました」
「お世話様でしたー」

無事退院した霜田拓也は、父親の浩二郎が運転するタクシーの車両の前側に座る。そして、沙織と美月は、後部座席に座るのだった。

「命の恩人です、霜田さん、良かった……無事に退院できてよかった……」
「美月ちゃん、鉄道員として、当然のことをしたまでだよ」
「ワシの息子にしては、上出来だな、名誉の負傷だ」
「霜田さん、かっこよかったよ！」

タクシーは一路、紅電香枚井駅、香枚井三丁目の沙織の自宅、高槻洋菓堂で下車させ、そして、榛名天神へ登る坂道を、美月の実家、服部宝珠庵へ向かって登っていった。

「なあ、服部さん」
「何でしょう」
「拓也は自慢の息子です。身体を張って、あなたを助けたのだから、たいした物だ」
「拓也さんのおかげで、助かりました」
「こうして、みんな一件落着したわけだ」
「はい、そう思います……」
「じゃあ、着いたよ、お店ここだっけ」
「はい！　ありがとうございました！」
「うん、うん、こちらこそ！」

やがて、霜田タクシーは、紅電榛名天神駅前のロータリーをぐるりと転回した後、春名坂を下って行った。

◇　◇　◇

――翌朝、紅電榛名天神駅前、バス乗り場にて。

（紅電香枚井駅……ど、どんな顔して霜田さんに会えばいいんだろう……）

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。料金は降車時にお支払い願います。発車までしばらくお待ち下さい。室山三四系統……発車します』

バスは、なだらかな下り道を降りて行った。そして、春名台団地。柏原桃花の家の近くの停留所。

「おはよう、美月ちゃん！」

「やあ、おはよう、ももっち。今日は一人でお着替えできたか？」

「うん、多分大丈夫だよ……って、今朝は、霜田さんに会うんだよね」

「そこなんだが、どんな顔して会えばいいのか……うーん、悩ましい」

「あのさ、美月ちゃん、いつも通りでいいんじゃない」

「というと……」

「変に肩の力が入っていると、霜田さん、また心配しちゃうかも」

「言えてる……」

「自然体だよ、美月ちゃん！」

「そうだな！」

バスは、春名坂小学校前で止まった。たちばなデンキがある、立花梨音の家の近くの停留所。

「おーっす！　諸君、おはよう！」
「おはよう、梨音ちゃん！」
「な、なあ、梨音？」
「なんだ美月ぃ。何か相談でもあんの？」
「実はさあ、紅電香枚井駅に、霜田拓也さん、いるだろ？　ど、どんな顔して会えばいいのかって」
「なんだなんだー？　らしくないぞ美月ぃ。恋の悩みかー？」
「違う！　ただ、霜田さん、今日は、初出勤だろ？　一体、どんな顔して会えばいいのか……って」
「あん？　別に普段通りでいいんじゃない？　つーか、美月も乙女だったんだなあ、そんなことで悩むとは」
「そんなこと……って。わたしには大問題なんだ！」
「大問題ねえ……」

　バスは坂を降り、交差点を右折すると、高槻洋菓堂がある、高槻沙織の家の近くの停留所に停まった。

「おはよう、みんな！」
「おっす、沙織！」
「沙織ちゃん、おはよう」
「おはよー、沙織ぃ」
「ちょっと何？　美月、顔色悪いわよ……もしかしてバス酔い？」
「それもあるんだけどさー、霜田拓也さんに、どんな顔して会えばいいのかって、私にとっては大問題なのだ」
「そんなの簡単じゃない。それでいいと思うよ」
「いやー、普段ならそれでいいと思うんだが……今日は、霜田さん、初出勤日だろ？」
「笑って、笑って、こちょこちょこちょ！」

「ぶっ、く、くすぐったい、こら、やめろ沙織……あははは！」
「これで良し。笑える準備はできたかな？」
「はー、沙織には敵わないよー、いきなり脇の下くすぐるんだもん……ひー」

『次は、終点、紅電香枚井駅前、紅電香枚井駅前です。どなた様も、お忘れ物無きよう、お支度下さい』

「じゃあ、お二人さん、いつもの笑顔で！」
「沙織ちゃん、美月ちゃん、頑張ってー」
「うん、そうするね！」
「あ、ああ、愛嬌、愛嬌か……って、大丈夫かなあ……」

バスのドアが開く。一斉に、元気よく、女生徒たちは降りる。そして、紅電香枚井駅の改札目指して駆け込む。「今日の霜田はプラットホームだよ」と聞かされて、若干嫌な思い出がよみがえるが、そんなことはお構いなし。霜田拓也のアナウンスが聞こえる。

『えー、今度の二番線、急行・海浜神崎行きです。停車駅は、咲花台、室山、岩崎、敷島、牡鹿沢、神崎、終点、海浜神崎に止まります。到着までしばらくお待ちください』

「霜田さーん」
「や、やあ！　おはよう！」
「はいっ！」
「朝っぱらから、女子高生に囲まれて、オレ、照れちゃうなあ……」
「きゃはははは！」
「それを言うなら、幸せだなあ……でしょ？」

こうして、霜田拓也は、駅員としての日常を回復した。

第十二話　雪が落ちて来た！

　ここは、服部美月が住む近くの、榛名天神社。学問の神様をお祀りしている神社だ。さっそく、沙織、美月、梨音、桃花の四名は、榛名天神社で初詣中。最前から、粉雪が舞って来ている。今日は一月三日、お正月の三が日だ。これはうっすらと雪化粧をしそうな空模様だ。みんな、セーターやらコートで完全防備している。

「じゃーん」
「沙織、なにそれ？」
「これは、わたしが我慢がまがまで貯め込んだ、一円五円貯金箱の中身なのです！　だから、お賽銭！」
「うわあ……軽く千円ぐらいありそう……チャリティには募金しなかったのか？」
「他人の幸せを願うなら、まず自分が幸せでなければなんないの。だから、お賽銭！」
「で、沙織、そんなにお賽銭奮発して、何をお願いするんだ？」
「霜田拓也さんと永遠に結ばれますように、だ、なんちって」
「はーあ、沙織はすぐこれだ……梨音、桃花は何を願うんだ？」
「わたしは、商売繁盛！」
「わたしは、受験に合格……とか」
「梨音！」
「はい！」
「緊張感ちゅーもんがないのか！　何が商売繁盛だ！　大学進学だろ普通！」
「いやー、わたしはコンピュータの専門学校行く気でいるから、その点心配ない」
「じゃあ、みんな、お賽銭投入！」

沙織のお賽銭の投入の仕方が、半端ではなかった。まるで、豆まきのように、右手で一円五円をつかんだか、と思うと、何度もお賽銭箱にぶちまけるのだった。後の三人は、ふつうに十円とか、五十円とかをお賽銭箱に投げ入れて、鈴を鳴らしていたが、沙織は、まだお賽銭がぶち込め切れていなくて、まだ投入を続けていた。袋を逆さまにして、一円残らずぶち込んだのを確認してから、祈った。

梨音が言った。

「なあ、あそこで絵馬書くところがあるぞー、行くぞ皆の者ー！」

「おーっ！」

「やれやれ……」

「元気だねえ、梨音ちゃんって、相変わらず……」

絵馬は一枚五〇〇円で、境内で巫女さんが売っていた。買い終わると、四人組は、設えられたテーブルの上で、油性のフェルトペンで願い事を書き始めた。

『第一志望　室山大学教育学部英文学科合格祈願！　高槻沙織』

『室山大学教育学部国文学科、合格必勝祈願！　服部美月』

『今年もお店の売り上げが上がりますように　たちばなデンキ　立花梨音』

『お引っ越ししても、みんなとの友情が末永く続きますように　柏原桃花』

「どれどれー？　ももっち、お引っ越しするの？」

「うん、お父さんが、東京の放送局へ転勤になるから、それで……」

「切ない、ああ、切ないよわたしはー」

「梨音、わざとらしい……」

「それで、引っ越しはいつなんだ？」

「来年の四月……だから、東京の方面の大学を受験することになる

よ」
「旅立つ時は言ってくれ！　新幹線の乗り場まで迎えに行くからな！」
「みんなでお見送りしよう！」
「そうだな！」

皆が、また巫女さんのいる天神社のお守り売り場に並んだ……。

「お守り買ってくか……おみくじ引くと、凶が出たら嫌だしー」
「そうだね、恋愛成就っと！」
「言えてる、学業成就っと！」
「わたしは、商売繁盛かな……」
「わたしは、家内安全、かなー」

一通りお詣りを済ませた後で、美月がみんなに提案した。

「わたしん家で、和菓子と甘酒おごるから、来なよ！」
「まさか、あずきは入ってないでしょうねえ、美月」
「あ、ああ、まあ、沙織には特別食の羽二重餅の訳あり品てとこで」
「ねえねえ、美月ちゃん、わたしたちには？」
「ぎっしり詰まったきんつば！　どうだ、グレイトだろう？」
「うんうん！」

◇　◇　◇

新雪を踏みしめながら、紅電榛名天神駅前の「服部宝珠庵」で、お茶会ならぬ、甘酒会が開かれることになった。

美月「ただいまー」
三人「お邪魔しまーす」

「あらあら、皆さんお揃いで！　あけましておめでとう」
「おめでとうございます」
「さあさ、雪を払って、上がって上がって！」
　ここは服部宝珠庵の二階、すなわち、美月の部屋だ。みんな、震えながら、こたつに足を突っ込んでいた。
「なんつーか、いつも思うんだけど、女っ気の欠片もない部屋だよね……」
「つまんねー、めっちゃつまんねー」
「悪かったな、梨音！」
「ねえねえ美月ちゃん、今度クレーンゲームで釣ったお人形持って来るよー」
「いや、桃花、そういう乙女チックな趣味はわたしには無くてなあ……」
　障子戸が開いて、甘酒とスイーツを、美月の母が持って来た。それから、美月の母は、思い出したかのように言った。
「あ、美月ー、お母さんね、おせちも用意したから、みんなで召し上がれ」
「うわー、本当ですか！」
「サービス満点、さすがは美月のお母さん」
「いただいちゃってもいいんですかー？　何だか高級そう」
「ええ、いいわよ、今年はお煮染めを特にたくさん炊いたから、残り物でごめんね」
　一同「いただきます！」
「美月ー、これぞ、お袋の味ってーやつだ」
「梨音、何を訳のわからんことを……」

◇　◇　◇

話題は、むしろ柏原桃花の動向に関心が集まっていて、今後どうするのかが知りたい気持ちで一杯だった。

「で、東京のどこに引っ越すんだ？」

「えーっと、実家だから、新小岩ってところ。総武線と総武快速線が止まります。駅の南側からバスだから、東京都江戸川区……になるのかな」

「さぞかしハイソな街なんでしょうな、おそらく」

「いやいやいや、そんなことないよ、庶民的で、みんなチャキチャキしてるよー」

「ああ、また室山県から優秀な人材が流出してしまう……」

「美月、しょうがないでしょ、ももっちの故郷なんだし、東京は」

「寂しくなるなあ……」

「受験も、あっちなんだろう？」

「うん、おじいちゃん家で合宿です！」

「泊まりに行ってもいいかー？　わたし、一度でいいからトーキョーブックマークしたかったんだー」

「うーん、無理をすれば泊められなくはないけど、おじいさんとおばあさんが住んでるから、たぶん落ち着かないと思うよー、狭くて」

「なあ、桃花、秋葉原まで近いのか？」

「うん、電車で十五分ぐらい……」

「うおおお、わたし、眼鏡ッ子メイドになれるかなあ！」

「梨音はご主人様に尽くすより、ご主人様から巻き上げそうだしな、現金を」

「なにをおっしゃいますか、皆の衆ー。わたしゃそんなに商売汚くないよ」

「あの……基本的に、梨音ちゃん見て、萌えるお客さんいるのかな

ー」
「うーん」
（他のみんなは、脳内で梨音のメイド姿を想像してみた……）
「ま、イマイチってとこで……」
「もう一つだよね……」
「あ、あんまりだー」

桃花がひざで立ち上がって、みんなに告げた。
「皆さんに重要なお知らせがあります。わたくし、柏原桃花は、松の内を明けた八日から、冬期講習に東京へ一旦行って来ます！」
「電車のダイヤを教えてくれ。みんなで一緒に見送りに行くから……のぞみ何号かな？」
「うーん、午前中なんだけど、まだ切符取ってない……」
「とにかく、がんばって来いよ、桃花！」
「うんっ！」

◇◇◇

葱北本線、香枚井駅では、指定券販売コーナーで、てきぱき働いている、霜田　翔の姿があった。
「次のお客様どうぞ……って、沙織ちゃんに、美月ちゃんに、梨音ちゃんに、桃花ちゃん！　どうしたんだい？　どこかみんなで、お出かけ？」
「いいえ、わたしだけです。大学は関東地方の大学に進学するので、冬期講習に東京へ行く事になって……なので、香枚井から新小岩までの切符をください。大人二人、指定席、禁煙で……」
「マジで？　そっかー、桃花ちゃんは、もともと東京の子だもんな、で、時間は……」
「のぞみ十四号で……」

「うん、わかった。えーっと、香枚井から、東京都区内まで、えいっ！」

専用端末から、切符が吐き出されて来た。緑色の切符である。

「じゃあ、気をつけて行っておいで。美月ちゃんたちも、一緒に見送るんだぞー！」
「わかってるわよ、変態！」
「へ……変態……変態って一体……」

◇◇◇

ここは、葱北本線と、山陽新幹線の新室山駅。随分葱州神崎寄り……つまり、浜側にある駅だ。一月八日、午前九時代の新幹線のぞみ号のデッキに親子の姿があった。

「じゃあ、わたしたちはこれで一旦帰らせていただきます」
「みんなー、バイバーイ！　また帰って来るからね！」

三人「桃花！」

『えー、二十三番線から、のぞみ十四号、東京行き、まもなく発車致します。お見送りの方は、車外へ出られまして、柵の外にてお見送り願います……乗車、完了……』

車外へ手を振る桃花と、お母さん。やがて、発車のベルが鳴り終わる。

「バイバイ……」
「元気でね……」

「達者で暮らせ……」

電車の窓越しに、涙を拭いたり、うんうんうなずいたり、まだまだ敷島女子の女生徒は、涙もろい年頃だった……。
やがて、かすかな余韻を残して、小さな窓は、東へ、東へと向かうのだった。電車を追いかけて走り出した三人組だったが、新幹線に追いつける訳もなく、途中で息を切らして、ホームの端で、電車の最後尾を見送るしか、手立てがなかった……。

「桃花……桃花……ももかあぁー」
「梨音ちゃん……」
「中学校からの大親友だったからなぁ」
「ももか、ももか……」
「はいはい、泣かない泣かない！　冬期講習終わったら帰って来るんだし……」
「さ、ひとまず帰るか！」

服部美月と高槻沙織に挟まれて、立花梨音は、鼻水をすすりながらまだ泣きじゃくっていたが、その後、新室山駅の甘味処で回復した梨音の涙はもう乾いていた……。

「えへ、このあんみつ、美味しい♪」
「現金な奴ー」
「てへへ、てへへ」
「さっき泣いたカラスが、もう笑った、って感じよねー」
「ところで沙織、おぜんざいは食わないのか？」
「まるっとあげます。あずきアレルギーなんです」
「知ってます」
「あら、やるわねー、後ほどご自宅に、チーズケーキを贈らせていただきますわ」

「沙織、わたしが悪かった。どうかそれだけは勘弁！」
「じゃあ、杏仁豆腐頼もうかなー」
「食欲旺盛だなあ、オイ」

在来線（葱北本線）に乗り換えて、新幹線よりは、ゆっくりとした快速電車に乗って、三人は香枚井駅まで帰るのだった。

第十三話　それから……

高校卒業から十数年後……室山県立敷島女子高等学校、職員室で働く服部美月の姿があった。肩書きは、国語科教員兼、生徒指導部長補佐。そして、高槻沙織も、敷島女子高等学校で働いていた。肩書きは、英語科教員兼、家庭科部の顧問。

「服部教諭！」
「なんだ、沙織かぁ……」
「高槻教諭とおっしゃって」
「失礼しました、教諭……」
「ささ、家庭科室でお茶しましょう！」
「まったく……少しだけですよ！」

放課後、三階東側の家庭科室。教室の中ではきゃいきゃい、生徒がはしゃいでいる。時は流れても、雰囲気は、十数年前のあの頃のままだ。扉をがらりと開ける。騒いでいた生徒の挙動がぴたっと止まった。わらわらと着席して、皆、前方を見て、静かになった。

「みんな、やってるかーい？」
「あ、沙織先生……と、服部先生……」
「げっ、服部……」
「げっ、って何よ。心配しなくても、あたしはお説教しに来たんじゃありませんから」
「わたしたち、十数年前、敷女の同級生だったの」
「本当ですか、沙織先生！　初耳です！」
「そう、マイフレンド！」
一同「え、えぇーっ！」

「そうねえ、あたしは沙織の勉強見てやってたかな」
「大学も、同じ、室山大学の教育学部だったんだよねえ」

一同「おおーっ」

「さあ、服部先生に、チームにつき一皿づつ、ケーキをプレゼントしてください。もしかすると、内申点が上がるかもよ」
「せ、先生、これ、お口汚しかも知れませんが、ど、どうぞ！」
「ああ、ありがと。ねえ、これ、何のケーキ？」
「れ、レアチーズケーキですっ」
「まあ、何ですって！　あなた、何年何組の誰？　よし、国語の内申点減点……」
「そ、そんなあ……」
「ぷっ、冗談に決まってるじゃない、あんた、あははは」
「みんな、服部先生は、チーズがお嫌いですので、決して地雷を踏まないように」

一同「はあーい」

「いちご大福が嫌いな奴に言われたくないわよっ！」

周囲の生徒からは、ドッと笑いが起きた。そうして、二人の教諭からは、自然と笑みがこぼれていた。

◇◇◇

一方、榛名天神の「菓匠　服部宝珠庵」では、霜田　翔……いや、婿養子に入ったので、服部　翔が、銘菓「香枚井餅」作成の修行中だった。

「違う！　水分が足りない！　水飴も混ぜろ！　いいや、後から足すな！　ああ、もうっ、だからそうじゃない。そうじゃないって！」
「じゃあ、どうするんですかぁ」
「己の魂に問え！」
「問え……って、何わかんないこと言ってるんですかぁ」
「まだまだ和菓子職人としての自覚が足りないようだなー」
「ちゃんと教えてくださいよー」
「まずは魂から！」
「魂、魂って……もう、意味不明っすよー。言語明瞭、意味不明瞭ですよー」
「がたがた言わない。うちの美月をめとったからには、和菓子職人としての自覚を持って、跡を継いでもらわねば困る！」
「勘弁してくださいよー」

それから、香枚井三丁目の「高槻洋菓堂」では、霜田拓也……いや、これまた婿養子に入ったので、高槻拓也が、パティシエとしての修業を行っていた。

「メレンゲをもっとクリーミーに！　違う！　卵白をだなぁ……」
「えっと、メレンゲがこうで……ああっ、覚えすぎることがたくさんあるー」
「馬鹿者！　うちの沙織をめとったからには、跡継ぎの自覚を持ってもらわねば困る！」
「今度は小麦を練るところだが……」
「って、ノートに書ききれません。勘弁してください」
「はい、次！　もたもたするな！」
「何この小麦の袋……って、重っ！　重たいっす！　なんじゃこりゃ！」
「それしきで音を上げるようでは、一人前のパティシエとは呼べな

いな」
「ちょっとたんま、少し休ませてください……」
「駄目だ！」
「マジ、勘弁してくださいよー」
「俺も若い頃、同じ目に遭った……」
「って、あんたも婿養子かよ！」

高槻信也は、黙ってうなづいた。

◇◇◇

ふたたび、室山県立敷島女子高等学校、職員室……。少し目尻に小じわができた、あの相川杏子先生が座っている。そこへ、高槻沙織と、服部美月が入って来た。沙織先生の手には、生徒と一緒に作った洋菓子を携えていた。怪訝な表情をして、寝不足の眼をこすりながら、杏子先生が苦言を呈した。

「おそーい。あなたがた、いつまで残ってるの？　鍵の当番はあたしなの。さあ、早く帰り支度をしなさい……」
「すみません、お待たせしました」
「相川先生、はい、これ！」
「ああ？　これって何よ……って、スイートポテト？」
「はい、生徒と一緒に作りました」

相川先生は急に満面の笑みを浮かべ、眼の色を変え、早速頬張った。

「ふはは、美味しい、美味しい……あなたがた、昔とちっとも変わらないのね」
「成長してないってことですか？」

「なにをおっしゃいますか、高槻さん、あんたもすっかり教師らしくなったわね」
「てへへ……」
「服部さん、最近お説教の仕方が、あたしに似てきたようね」
「は、はい、すみません、以後気をつけます」
「いいえ、あたしの愛弟子、その調子でバリバリ生徒指導して頂戴ね？　いいこと？」
「は、はい……」
「さすがに相川先生には、かなわないよねー」
「ま、まったくだー」

◇◇◇

その後の、立花梨音は、たちばなデンキに併設した、携帯電話店の店員をやっていた。某携帯キャリアの、室山春名坂店だ。ボディコンシャスなスーツに身を固めて、見た目、イケてるお姉さんを演じていた。

「いらっしゃいませ、どうぞ！」
「あのー、ビジネス用に携帯電話を探してるんだけど……」
「あ、そうしましたら、ピッタリのがございます。こちらの、ＩＣレコーダー、カメラ、ワンセグ、決済機能付き携帯をオススメします！」
「い、いや、そこまで高機能なものは……値が張るので……」
「今なら、三千円キャッシュバックがございます！　ささ、こちらへどうぞ！」

契約を結ばされた男性は、ごてごて重装備の携帯電話を手に店を出て、きつねに摘まれたような顔をしていた……。

「ありがとうございました！」

梨音は心の中でほくそ笑んだ。

（……ふう、今日も商売繁盛！）

◇　◇　◇

その後の、柏原桃花は、東京の某大学の教育学部を卒業した後、幼稚園の教諭免許を取って、都内某所の幼稚園で先生になっていた。チューリップなどのお花の切り絵にまみれた窓の中。無邪気な幼稚園の児童に向かって、オルガンを弾いていた。

「むすんで、ひらいて、手を打って、むすんでー♪　また、開いて、手を打って、その手をうえにー……はーい、よくできました、えらいえらい、上手上手ー♪」

このように、女性の社会進出というのは、案外、そういうものなのかも知れない……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7214x/

紅葉野日記

2011年10月19日04時08分発行